第一篇

一 惡きもの(イ)の謀略にあゆまず つみびとの途にたゝず 嘲るものの座にすわらぬ者はさいはひなり

二 ヱホバはたゞしきものの途をしりたまふ されど惡きもの(チ)の途は滅びうせん

三 かゝる人はヱホバの法をよろこびて日も夜もこれをおもふ(ニ)

四 樹の期にいたりて實をむすび 葉もまた凋まざるごとく その作ところ皆さかえん(ヘ)

五 ふきさる粃糠のごとし 然ばあしきものは審判にたへず 罪人は義きものの會にたつことを得ざるなり

六 ヱホバは義きものの途をしりたまふ されど惡きもの(リ)の途は滅びうせん

第二篇

一 何なればもろもろの國人はさわぎたち 諸民はむなしきことを謀るや

二 地のもろもろの王はたちかまへ 群伯はともに議り ヱホバとその受膏者(ヌ)とにさからひていふ

三 われらその械をこぼちその縄をすてんと

四 天に坐するもの笑ひたまはん 主かれらを嘲りたまふべし

五 かくて主は忿恚をもてものいひ 大なる怒をもてかれらを怖まどはしめて宣給ふ

六 しかれども我わが王をわがきよきシオンの山にたてたりと

七 われ詔命をのべんヱホバわれに宣まへり なんぢはわが子なり今日われなんぢを生り

八 われに求めよ さらばわれらその械をこぼちその受膏者とにさからひていふ

九 汝くろがねの杖をもて彼等をうちやぶり陶工のうつはものごとくに打碎かんと

一〇 されば汝等もろもろの王よ さとかれ地の審士輩をしへをうけよ

一一 畏をもてヱホバにつかへ戰慄をもてよろこべ

一二 子にくちつけせよ おそらくはかれ怒をはなちなんぢら途にほろびん その忿恚はすみやかに燃べければなり すべてかれに依賴むものは福ひなり

イ 箴四・一四、一五　ロ 詩三六・四　耶一五・三、二三　詩一・一　賽三・一〇　ハ 詩一一九・三五、四七・九二　ニ 賽一・八　詩一一九・一、九七　ホ 耶一七・八　ヘ 創三九・三、二一・二七　一二八・二　一〇　ト 伯二一・一八　賽一七・一〇　三五・五　詩一一九・五　チ 詩三七・一八　約一〇・一四　リ 詩四六・六　提四・二五、二六　ヌ 詩四五・七　約一・四一　ル 耶五・五　路一九・四　ヲ 詩一一・四　ワ 詩三七・一三、五九・七　ソ 來一二・二八　ツ 腓二・一二　ネ 創四一・四〇　一〇・一　約五・二三　ナ 默六・一六、一七　ラ 詩三四・八、八四・一二　賽三〇・一八耶一七・一〇　ム 箴一六・二〇　詩一一九・一八　賽一七・一〇　三五・五　來一二・三、一三、二九・五　ウ 詩二二・二七、七二・一六　ヰ 默一・一六　ノ 出後五・七　オ 伯後五・七　ク 詩一三・三　來一・五、五・五　ヤ 詩二二・二七、七二・八、八九・二七　默二・一二・五　マ 詩一一九・一三五　ケ 詩四六・八　提後二・一九　フ 詩四六・六　提四・二五、二六　コ 詩二・一二　エ 詩三七・一三、五九・八　箴一・二六　テ 詩一四・一五　ア 創三九・三、二一　ヨ 徒一三・三三　來一・五、五・五　サ 詩二二・二七、七二・一八　約一〇・一四　キ 箴一六・二〇　ユ 詩一一九・一八　賽一七・一〇　三五・五　來一二・三、一三、二九・五　メ 詩三四・八、八四・一二　賽三〇・一八耶一七・一〇　ミ 箴一六・二〇　詩一一九・一八　賽一七・一〇　三五・五　來一二・三、一三、二九・五　シ 詩二・一二　エ 詩三七・一三、五九・八　箴一・二六　テ 詩一四・一五　ア 創三九・三、二一　ヨ 徒一三・三三　來一・五、五・五　サ 詩二二・二七、七二・一八　約一〇・一四　キ 箴一六・二〇　ユ 詩一一九・一八　賽一七・一〇　三五・五　來一二・三、一三、二九・五　メ 詩三四・八、八四・一二　賽三〇・一八耶一七・一〇　ミ 箴一六・二〇　詩一一九・一八　賽一七・一〇　三五・五　來一二・三、一三、二九・五　シ 詩二・一二

第三篇 ― ダビデその子アブサロムを避しときのうた

一 ヱホバよ我にあたする者のいかに蔓延れるや　我にさからひて起りたつもの多し　二 わが靈魂を
(一)

二 さしていふ者ぞおほき　セラ　三 されどヱホバよ　なんぢは我をかこめる盾わが榮わが首をもたげ給ふものなり　四
(イ) (ロ) (ハ) (ニ)

わが聲をあげてヱホバによばはれば　その聖山より我にこたへたまふ　セラ　五 われ臥していねまた目さめたり　ヱホバわれを支へたまへばなり
(ホ) (ヘ) (ト)

六 千萬の人をも我はおそれじ　七 ヱホバよねがはくは起たまへ　わが神よわれを救ひたまへ　なんぢ曩にわがすべての仇の頰骨をうち惡きものの齒ををりたまへり　八 救はヱホバにあり　ねがはくは恩惠なんぢの民のうへに在んことをセラ
(チ) (リ) (ヌ) (ル) (ヲ)

第四篇 ― 琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌

一 わが義をまもりたまふ神よ　ねがはくはわが呼るときに答へたまへ　わがなやみたる時なんぢ我をくつろがせたまへり　ねがはくはわが祈をきゝたまへ　二 人の子よ　なんぢらいくそのとき我をなんぢら知れ　ヱホバは神をうやまふ人をわかちて己につかしめたまひしことを　われヱホバによばはらば聽たまはん　四 なんぢら愼みをのゝきて罪をかすなかれ　臥床にておのが心にかたりて默せ　セラ　五 なんぢら義の祭をそなへものを獻てヱホバに依賴め　六 おほくの人はいふ　たれか嘉事をわれらに見するものあらんやと　ヱホバよ
(ワ) (カ) (ヨ) (タ)

イ 拙後一五・一二、一　ロ 毋後一六・八　詩六・一一　ハ 創一五・一　詩二七・六　ニ 詩二七・六　ホ 詩二・六、四三・三、七一・一一　ヘ 詩三四・四　ト 利二六・六　詩四・八　箴三・二四　チ 詩二七・三　リ 伯一六・一〇、二九　ヌ 詩五八・六　ル 提後二・一九　彼後　カ 申三三・一九　詩九一・一一　ヲ 弗四・二六　ワ 詩七七・六　哥後　ヨ 詩三七・三、六二・八　タ 民六・二六　詩八〇・三、七、一九、一一九・一三五　レ 賽九・三　ソ 伯一一・一八、一九　詩三・五

ッ利二五・一八、一九、ネ詩三・四　一三、一三〇・六　ネ詩五五・二三
二六・五　中一二・ナ詩六五・二　ム哈一・二三　ノ王上八・二九、三〇、
ラ詩三〇・五、八八・ウ默二一・八　三五、三八　詩二八　オ
一〇　二、一三二・七、ク詩二五・四、二七・
一三八・二　ヤ路一一・四四　羅三
一一

七 ねがはくは聖顔の光をわれらの上にのぼらせたまへ　七 なんぢのわが心にあたへたまひし歡喜はかれらの穀物と
八 酒との豐かなる時にまさりき　八 われ安然にして臥またねぶらん　ヨホバよわれを獨にて坦然にをらしむるもの
は汝なり　(ソ)

第五篇 一

簫にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

二 ヨホバよねがはくは我がことばに耳をかたむけ　わが思にみこゝろを注たまへ　二 わが王よわが
神よ　わが號呼の聲をきゝたまへ　われ汝にいのればなり　三 ヨホバよ朝になんぢわが聲をきゝたまはん　我あ
したになんぢの爲にそなへして俟望むべし　四 なんぢは惡きことをよろこびたまふ神にあらず　惡人はなんぢの
寄客たるを得ざるなり　五 たかぶる者はなんぢの目前にたつをえず　なんぢはすべて邪曲をおこなふものを憎み
たまふ　六 なんぢは虛僞をいふ者をほろぼしたまふ　血をながすものと詭計をなすものとはヨホバ憎みたまふな
り　七 然どわれは豐かなる仁慈によりてなんぢの家にいらん　われ汝をおそれつゝ聖宮にむかひて拜まん　八 ヨ
ホバよ願くはわが仇のゆゑになんぢの義をもて我をみちびき　なんぢの途をわが前にたひらかにしたまへ　九 かれらの
口には眞實なく　その衷はよこしま　その喉はあばける墓　その舌はへつらひをいへばなり　一〇 神よねがはくは
かれらを刑なひ　その謀略によりてみづから仆れしめ　その愆のおほきによりて之をおひいだしたまへ　かれらは
汝にそむきたればなり　一一 されど凡てなんぢに依賴む者はよろこばせ　永遠によろこびよばはらせたまへ　なんぢ
斯る人をまもりたまふなり　名をいつくしむ者にもなんぢにより歡喜をえしめたまへ　一二 ヨホバよなんぢは
義者にさいはひし盾のごとく恩惠をもて之をかこみたまはん

第六篇

一 ニ ヱホバよねがはくは八音ある琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

三 四 五 六 七 八 九 一〇

一 ヱホバよねがはくは忿恚をもて我をせめ烈しき怒をもて我をこらしめたまふなかれ（イ）

二 ヱホバよわれ萎みおとろふるなり ヱホバよかくて幾何時を（ニ）へたまふや

三 わが骨わなゝきふるふ

四 わが靈魂さへも甚くふるひわなゝく ヱホバよねがはくは忿恚をもて我をこらしめたまへ わが骨わなゝきふるふ（ロ）

五 ヱホバよかくて幾何時を（ニ）へたまふや

六 ヱホバよ歸りたまへ わが靈魂を救ひたまへ なんぢの仁慈の故をもて我をたすけたまへ

七 わが歎息にてつかれたり 我よなよな床をたゞよはせ 涙をもてわが衾をひたせり

八 わが目うれへによりておとろへ もろもろの仇ゆゑに老ぬ

九 われよ ヱホバはわが泣ころをきゝたまひたり

一〇 わがもろもろの仇はぢて大におぢまどひ あわたゞしくはぢて立かへるべし

第七篇

一 ニ ベニヤミンの人クシの言につきダビデ、ヱホバに對ひてうたへるシガヨンの歌

一 わが神ヱホバよわれ汝によりたのむ 我をすくひ我をたすけたまへ

二 おそらくはかれ獅の如くわが靈魂をかきやぶり援るものなき間にさきてずたずたに爲ん

三 わが神ヱホバよわれ此事をなしゝならんには わが手に不義あり

四 バよもしわれ故なく仇するものをさへ助けしに禍害をもてわが友にむくいしならんには

五 よし仇人わがたましひを逐とらへ わがいのちを地にふみにじりわが榮を塵におくともそのなすにまかせよセラ

六 ヱホバよなんぢの怒をもて起わが仇のいきどほりにむかひて立たまへ わがために目をさましたまへ なんぢは審判をおほせ出したまへり

七 もろもろの國人の會をなんぢの

イ 詩三八・一 耶一〇・二四 ロ 詩四一・四 ハ 何六・一 ニ 詩九〇・一三 ホ 詩三〇・九 ヘ 伯一七・七 詩三一・九、三八・一〇、一一五・一七 ト 詩一一九・一五 チ 詩三・四 リ 詩三一・一五 ヌ 箴三八・一 ル 詩五〇・二二 ヲ 拇後一六・七、八 ワ 拇前二四・一一 カ 拇前二四・七、二六・九 ヨ 詩九四・二

八 まはりに集はしめ 其上なる高座にかへりたまへ ヘ ヱホバはもろもろの民にさばきを行ひたまふ ヱホバよわが
九 正義とわが衷なる完全とにしたがひて我をさばきたまへ
一〇 くしたまへたゞしき神は人のこゝろと腎とをさぐり知たまふ
一一 なり 二 神はたゞしき審士ひごとに忿恚をおこしたまふ神なり 二三 人もしかへらずば神はその剣をとぎ その弓
一二 をはりてかまへ 二三 これに死の器をそなへ その矢に火をそへたまはん 一四 視よその人はよこしまを産んとして
一三 くるしむ 残害をはらみ虚偽をうむなり 一五 また坑をほりてふかくし己がつくれるその溝におちいれり その
一四 残害はおのが首にかへり その強暴はおのが頭上にくだらん 一七 われその義により ヱホバに感謝し いとたかき
一五 ヱホバの名をほめうたはん

第八篇 一 わ

ギテトの琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌

一 われらの主ヱホバよ なんぢの名は地にあまねくして尊きかな そ
二 なんぢは嬰児ちのみごの口により力の基をおきて敵にそなへたまへり こは仇人とうらみを報るものを鎮靜めんがためなり
三 我なんぢの指のわざなる天を觀 なんぢの設けたまへる月と星とをみるに
四 世人はいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや 人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや
五 只すこしく人を神よりも卑つくりて榮と尊貴とをかうぶらせ 六 またこれに手のわざを治めしめ萬物をその足下におきたまへり すべての羊うし また野の獣 七 そらの鳥 うみの魚 もろもろの海路をかよふものをまで皆しかなせり

九 われらの主ヱホバよ なんぢの名は地にあまねくして偉(イ)

第九篇

一 われ心をつくしてヱホバに感謝し そのもろもろの奇しき事迹をのべ
二 てたのしみ且よろこばん 至上者よなんぢの名をほめうたはん
三 ムッラベン(調子の名)にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた
四 なんぢわが義とわが訟(ロ)とをまもりたまへばなり
五 またもろもろの國をせめ惡きものをほろぼし世々かぎりなくかれらが名をけしたまへり
六 世々、あれすたれたり 汝のくつがへしたまへるもろもろの邑はうせてその跡だにもなし
七 ろもろの民に審判をおこなひたまはん ヱホバは公義をもて世をさばき直をもて
八 聖位にすわりたまふ 審判のためにその寶座をまうけたまひたり
九 ヱホバは虐げらるゝものの城また難みのときの城なり
一〇 ものはなんぢに依賴んなんぢを尋るものの棄られしこと斷てなければなり
一一 ヱホバに對ひてほめうたへ その事迹をもろもろの民のなかにのべつたへよ
一二 ものを心にとめてその號呼をわすれたまはず 血を問糺したまふものは苦しむ
一三 ヱホバよ我をあはれみたまへ われを死の門よりすくひいだしたまへる
一四 たまへる者よ ねがはくは仇人のわれを難むるを視たまへ さらば我なんぢのすべての頌美をのぶるを得また
一五 シオンのむすめの門にてなんぢの救をよろこばん もろもろの國民はおのがつくれる阱におちいり そのかくしまうけたる網におのが足をとらへらるる
一六 ヱホバは己をしらしめ審判をおこなひたまへり あしき人はおのが手のわざなる羂にかゝれり ヒガイオン セラ(カ)
一七 あしき人は陰府にかへるべし 神をわするゝもろもろの國民も

イ 詩八・一 ロ 詩五・一一 ハ 詩五六・二、 八三・七
ニ 申九・一四 歳一〇 ホ 詩一〇二・一二、二六 來一・一一 ヘ 詩九六・一三、九八 ト 詩三二・七、三七・九、三九、四六・一、 チ 詩九一・一四 リ 詩一〇七・二二 ヌ 利九・五 ル 詩一三・五、二〇・五、三五・九 ヲ 詩七・一五、一六、三五・八、五七・六、九四・二三 歳五 ワ 出一四・四、一〇、 二二、二二・八、二六・二七

一八 またしからん 一八 貧者はつねに忘るゝにあらず苦しむものの望はとこしへに滅ぶるにあらず
一九 たまへ ねがはくはヱホバよ起
二〇 バよ願くはかれらに懼をおこさしめたまへ もろもろの國民におのれたゞ人なることを知しめたまへ セラ

第一〇篇

一 あゝヱホバよ何ぞはるかに立たまふや なんぞ患難のときに匿れたまふや
二 りて苦しむものを甚だしくせむ かれらをそのくはだての謀略にとらはれしめたまへ
三 とは己がこゝろの欲望をほこり貪るものを祝してヱホバをかろしむ
四 もとむることをせざるなりと 凡てそのおもひに神なしとせり
五 かれの途はつねに堅くなんぢの審判はその眼にとほくして 彼はそのもろもろの敵をくちさきらにて吹く
六 よりはなれてたかし 彼はそのもろもろの敵をくちさきらにて吹く
七 るゝことなく世々われに禍害なかるべしと その口にはのろひと虚僞としへたばこゝろの中にいふ 我うごかさ
八 殘害とよこしまとあり かれは村里のかくれたる處にをり隱やかなるところにて罪なきものをころす その
九 眼はひそかに倚仗なきものをうかゞひ 窟にをる獅のごとく潜みまち苦しむものをとらへんために伏ねらひ
一〇 貧しきものをその網にひきいれてとらふ また身をかゞめて蹲まる その強勁によりて依仗なきものは仆る
一一 かれ心のうちにいふ 神はわすれたり神はその面をかくせり神はみることとなかるべしと
一二 神よ手をあげたまへ 苦しむものを忘れたまふなかれ
一三 いかなれば惡きもの神をいやしめて 心中になんぢ
一四 探求むることをせじといふや なんぢは鑒たまへり その殘害と怨恨とを見てこれに手をくだしたまへり

三一 カ詩一九・一四、九二・三 ヨ伯八・一三 詩五〇・二二
タ詩九・一二、一〇・五 ツ詩九四・四 レ箴二三・一八、二四 ネ箴二八・四 羅一・三二
ソ詩七・一六、九・一 ナ詩一四・一、五三・一 五、一六 箴五・二二 ラ箴二四・七 撒二六・二一
ム詩一二・五 ウ詩三〇・六 傳八・一一 ク哈三・一四 ヤ詩一七・一一 マ詩一七・一二 米七・二
ケ伯二二・一三 詩七三・一一、九四・七 結八・一二、九・九 フ米五・九
ノ箴三・一四 オ伯二〇・一二 ク哈三・一四 ヤ詩一七・一一 マ詩一七・一二 米七・二

一五 倚仗なきものは身をなんぢに委ぬ なんぢは昔より孤子をたすけたまふ者なり
一六 をりたまへあしきものの惡事を一つだにのこらぬまでに探究したまへ 一六 ヱホバよ汝はくるしむものの祈求をきゝたまへり その心を
一七 もろの國民はほろびて神の國より跡をたちたり 一七 孤子と虐げらるゝ者とのために審判をなし地につける人に
一八 かたくしたまはん なんぢは耳をかたぶけてきゝ 一八
ふたゝび恐嚇をもちひざらしめ給はん

第一一篇

うたのかみに謳はしめたるダビデのうた

一 われヱホバに依賴めり なんぢら何ぞわが靈魂にむかひて鳥のごとくなんぢの山にのがれよといふや 二 視よあしきものは暗處にかくれ心なほきものを射んとて弓をはり絃に矢をつがふ 三 基みなやぶれたらんには義者なにをなさんや 四 ヱホバはその聖宮にいますヱホバの寶座は天にあり その目はひとのこを鑒その眼瞼はかれらをこゝろみたまふ 五 ヱホバは義者をこゝろむ そのみこゝろは惡きものと强暴をこのむ者をにくみ 六 羂をあしきもののうへに降したまはん 火と硫磺ともゆる風とはたゞしき者にしてその聖顏をあふぎみん
とをにくみ 六 八音にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた
八音にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

七 なり 七 ヱホバはたゞしき者にして義きことを愛したまへばなり 直きものはその

第一二篇

一 あゝヱホバよ助けたまへ そは神をうやまふ人はたえ誠あるものは人の子のなかより消失るなり
二 人はみな虚偽をもてその隣とあひかたり滑かなるくちびると貳心とをもてものいふ 三 ヱホバはすべての滑か

イ提後一・一二 牧前四・一九 ロ詩六八・五 何一四・三 ハ詩三七・一七 ニ詩二九・一〇、一四 ホ代上二九・一八 ヘ詩八二・三 箴一一・五、一三、一四六・一〇・一〇 耶一〇・一〇 哀五・一九 但四・四 ト詩五六・一一 三四、六・二六 提 チ母前二六・一九、二〇 前一・一七 リ詩六四・三、四 ヌ詩二一・一二 ル詩八二・五 ヲ哈二・二〇 ワ詩二・四 寒六六・一 太五・三四、二三・ヨ創二二・一 雅一・ソ伯三六・七 詩三三・二一 タ創一九・二四 三八・二二 レ詩四五・七、一四六・八 ネ詩一〇・七 ナ詩二八・三、六二・七 四耶九・八 羅一六 ム出三・七、八 箴三三・二〇 ラ母前二・三 詩一七・一〇 但七・八、二五 ツ箴五七・一 米七・二 カ詩三三・一三、三四・一五、一六、六六・ 默四・二 ヨ創二二・一 雅一・ソ伯三六・七 詩三三・二一 タ創一九・二四 三八・二二 レ詩四五・七、一四六・八 ネ詩一〇・七 ナ詩二八・三、六二・七 四耶九・八 羅一六 ム出三・七、八 箴三三・二〇 ラ母前二・三 詩一七・一〇 但七・八、二五 ツ箴五七・一 米七・二 カ詩三三・一三、三四・一五、一六、六六・ 默四・二 ヨ創二二・一 雅一・ソ伯三六・七 詩三三・二一 タ創一九・二四 三八・二二 レ詩四五・七、一四六・八 ネ詩一〇・七 ナ詩二八・三、六二・七 四耶九・八 羅一六 ム出三・七、八 箴三三・二〇 ラ母前二・三 詩一七・一〇 但七・八、二五 ツ箴五七・一 米七・二 カ詩三三・一三、三四・一五、一六、六六・ 默四・二 ヨ創二二・一 雅一・ソ伯三六・七 詩三三・二一 タ創一九・二四 三八・二二 レ詩四五・七、一四六・八 ネ詩一〇・七 ナ詩二八・三、六二・七 四耶九・八 羅一六 ム出三・七、八 箴三三・二〇

四 なるくちびると大なる言をかたる舌とをほろぼし給はん
五 わがものなり誰かわれらに主たらんやと
六 いま起てこれをその慕ひもとむる平安におかん ヱホバの
七 七次きよめたる白銀のごとし ヱホバよ汝はかれらをまもり之をたすけてとこしへに
八 はん 人の子のなかに穢しきことの崇めらるゝときは惡者こゝやかしこにあるくなり

第一三篇 一

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 あゝヱホバよ かくて幾何時をへたまふや 汝とこしへに我をわすれたまふや
二 いくそのときを歷たまふや 我何時をへたまかなしみをいだき 籌畫をたましひに用ひて幾何時をふべきか
三 わが仇はわがうへに崇められて幾何時をふべきか
四 わが神ヱホバよ我をかへりみて答をなしたまへ 恐らくはわれ死の睡につかん
五 わが敵わがうごかさるゝによりて喜ばん 我かれに勝りと おそらくはわが仇いはん 我はなんぢの憐憫によりたのみ
六 てよろこばん 我はヱホバに對ひてうたはん わが心はなんぢの救によりてよろこばん

第一四篇 一

一 愚なるものは心のうちに神なしといへり かれらは腐れたり かれらは憎むべき事をなせり 善をなすものなし
二 ヱホバ天より人の子をのぞみて悟るもの神をたづぬる者ありやと見たまひしに
三 おこなふ者なし
四 きいでてことごとく腐れたり 善をなすものなし一人だになし
四 不義をおこなふ者はみな智覺なきか かれらは

五 物くふごとくわが民をくらひ またヱホバをよぶことをせざるなり
六 はたゞしきものの類のなかに在せばなり なんぢらは苦しめるものの謀略をあなどり辱かしむ されどヱホバはその避所なり
七 たまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂まん ねがはくはシオンよりイスラエルの救のいでんことを ヱホバその民のとらはれたるを返し

第一五篇 ―ダビデのうた

一 ヱホバよなんぢの帷幄のうちにやどらん者はたれぞ なんぢの聖山にすまはんものは誰ぞ
二 そこなはず 直くあゆみ義をおこなひ そのこゝろに眞實をいふものぞ
三 その舌をもてそしらず その友をそこなはず またその隣をはぢしむる言をあげもちひず
四 惡にしづめるものを見ていとひかろしめ ヱホバをおそるゝものをたふとび 誓ひしことはおのれに禍害となるも變ることなし
五 貨をかして過たる利をむさぼらず 賄賂をいれて無辜をそこなはざるなり 斯ることどもを行ふものは永遠にうごかさるゝことなかるべし

第一六篇 ―ダビデがミクタムの歌

一 神よねがはくは我を護りたまへ 我なんぢに依賴む
二 われヱホバにいへらく なんぢはわが主なり なんぢのほかにわが福祉はなしと
三 地にある聖徒はわが極めてよろこぶ勝れしものなり
四 ヱホバにかへて他神をとるものの悲哀はいやまさん 我かれらがさゝぐる血の御酒をそゝがず その名を口にとなふることをせじ
五 ヱホバはわが嗣業またわが酒杯にうくべき有なり なんぢはわが所領をまもりたまはん
六 準繩は

視よかゝる時かれらは大におそれたり 神

イ 耶一〇・二五 歿八 ロ 詩五三・六 詩一四・二 ハ 詩七九・六 賽六四・七 ニ 詩五三・六 ホ伯四二・一〇 詩一二六・一 ヘ 詩二四・三―六 ト 詩二・六、三・四 チ 賽三三・一五 リ 亞八・一六 弗四・二五 ヌ 利一九・一六 詩二三・一 ル 出二三・一 ヲ 帖三・二 ワ 士一一・三五 カ 出二二・二五 詩二五・三六 申二三 タ 詩一六・八 彼後一・一九 結一八・八、二二・一二 レ 詩二五・二〇 ソ 出二三・一三 書二三・七 何二・一 ツ 申三二・九 詩七三・二六、一一九・五七、一四二・五 耶一〇・一六 哀三・二四 ネ 詩一一・六

ナ徒二・二五　ラ詩七三・二三、一一　キ詩四九・一五　ム詩一五・五　ウ詩三〇・一二、五七　ノ利一九・二八

七 わがために樂しき地におきたり 宜われよき嗣業をえたるかな
八 ん 夜はわが心われをしふ 八 われ常にヱホバをわが前におけり
九 なかるべし 九 このゆゑにわが心はたのしみ わが榮はよろこぶ わが身もまた平安にをらん
一〇 しひを陰府にすておきたまはず なんぢの聖者を墓のなかに朽しめたまはず
一一 われに示したまはん なんぢの前には充足るよろこびあり なんぢの右にはもろもろの快樂とこしへにあり

第一七篇 ― ダビデの祈禱

一 あゝヱホバよ公義をきゝたまへ わが哭聲にみこゝろをとめたまへ いつはりなき口唇よりいづる
二 我がいのりに耳をかたぶけたまへ
三 なんぢわが心をこゝろみ また夜われにのぞみたまへり 斯てわれを糺したまへど我になにの惡念あるをも見出でじ
四 たまはざりき わが口はつみを犯すことなからん 四 人の行爲のことをいはゞ我なんぢのくちびるの言によりて
五 暴るものの途をさけたり
六 我がいのりに耳をかたぶけたまへ
七 我にこたへたまふ我なんぢをよべり ねがはくは汝の耳をわれにかたぶけてわが言をきゝたまへ
八 依賴むものを右手をもて仇するものより救ひたまふ者よ ねがはくはなんぢの妙なる仁慈をあらはしたまへ
九 ヘ願くはわれを瞳のごとくにまもり 汝のつばさの蔭にかくし
一〇 命をそこなはんとする仇よりのがれしめ給へ かれらはおのが心をふさぎ その口をもて誇かにものいへり

一二 二 いづこにまれ往ところにてわれらを打圍み われら
一三 を地にたふさんと目をとむ
一三 獅のごとく隱やかなるところに潜みまつ壯獅のごとし
一四 たふし御劍をもて惡きものよりわが靈魂をすくひたまへ
一四 おのがうくべき有をこの世にてうけ 汝のたからにてその腹をみたさるゝ世人より我をたすけいだしたまへ
一五 はおほくの子にあきたり その富ををさなごに遺す
一五 もて飽足ることをえん されどわれは義にありて聖顏をみ目さむるとき容光を

第一八篇

一 ヱホバわれの力よ 伶長にうたはしめたるヱホバの僕ダビデの歌、
二 救れしときヱホバに對ひてうたへるなり 云く
三 神 わが堅固なるいはほ われ切になんぢを愛しむ
四 わが盾 わがすくひの角 わがたかき櫓なり
五 死のつな我をめぐり惡のみなぎる流われをおそれしめたり
六 すくはるゝことをえん われ窮苦のうちにありてヱホバをよび又わが神にさけびたり
七 ヱホバはわが巖 わが城 われを救ふ者 わがよりたのむ
八 よりわが聲をきゝたまふ その前にてわがよびし聲はその耳にいれり
九 ふるひうごき山の基はゆるぎうごきたり 烟その鼻より出 燃あがれり ヱホバは天をたれて臨りたまふ その足の下はくらきこと甚だし
一〇 風のつばさにて翔り ケルブに乘りてとび 翼をおほひとなし水のくらきとそらの密雲とをそのまはりの幕となしたまへり
一一 かくてケルブに乘りてとび

イ 母前二三・二六　一六・二五　雅五・五　チ 徒四・三一
ロ 詩一〇・八―一〇　二 約壹三・二　リ 詩一四四・五
ハ 詩七三・一二　ホ 詩四・六、七、一一、六五・四　ヌ 詩九九・一
ニ 詩一六・　ヘ 詩一四四・一　ル 詩一〇四・三
ホ 詩一一六・三　ト 詩一一六・三　ヲ 詩九七・二
ワ 詩九七・三

カ 詩二九・三　一四四・六　賽三〇・三〇
ヨ 申一〇・一〇　詩　タ 出一五・八　詩一〇

一三 みまへの光輝よりくろくもをへて雹ともえたる炭とふりきたれり
一四 至上者のこゑいでて雹ともえたる炭とふりきたり
一五 ちてかれらをうち敗りたまへり
一六 みえ地の基あらはれいでたり ヱホバはたかきよりの叱咤となんぢの鼻のいぶきとによりて水の底
一七 われを憎むものとより我をたすけいだしたまへり かれらは我にまさりて最強かりきにせまりきたれり 然どヱホバはわが支柱となりたまひき
一八 へ廣處にいだして助けたまへり ヱホバはわが正義にしたがひて恩賜をたまひ わが手のきよきにしたがひて
一九 報賞をたれたまへり ヱホバよ斯るときになんぢの叱咤となんぢの鼻のいぶきとによりて水の底
二〇 ての審判はわがまへにありて われその律法をすてしことなければなり われ神にむかひて缺るところなく己
二一 をまもりて不義をはなれたり この故にヱホバはわがたゞしきとその目前にわが手のきよきとにしたがひて
二二 我にむくいをなし給へり ヱホバよ斯るときになんぢの叱咤となんぢの鼻のいぶきとによりて水の底
二三 きものには潔きものとなり僻むものにはひがむ者となりたまふ
二四 目をひくゝしたまふ可ればなり
二五 まはん 我なんぢによりて軍の中をはせとほり わが神によりて垣ををどりこゆ
二六 ホバの言はきよし ヱホバはすべて依賴むものの盾なり
二七 に巖はたれぞや 神はわれぞや
二八 神はちからをわれに帶しめ わが途を全きものとなしたまふ
二九 我なんぢによりて軍の中をはせとほり わが神によりて垣ををどりこゆ
三〇 神はしもその途またくヱホバの言はきよし ヱホバはすべて依賴むものの盾なり
三一 そはヱホバのほかに神はたれぞや われらの神のほかに神はたれぞや
三二 神はちからをわれに帶しめ わが途を全きものとなしたまふ
三三 神はわが足を鹿のあしのに巖はたれぞや 神はわれぞや

三四 ごとくし我をわが高處にたゝせたまふ
三五 めたまふ　又なんぢの救の盾をわれにあたへたまへり　なんぢの右手われをさゝへ　なんぢの謙卑われを大ならしめたまへり
三六 三六 なんぢわが歩むところを寛濶ならしめたまひたればわが足ふるはざりき
三八 三八 われかれらを擊てたつことを得ざらしめん　かれらはこれに追及かれらのほろぶるまでは歸ることをせじ
三九 三九 そはなんぢ戰爭のために力をわれに帶しめ　われにさからひておこりたつ者をわがわが足の下にたふるべし
四〇 四〇 我をにくむ者をわが滅しえんがために　汝またわが仇の背をわれにむけしめたまひたればなり
四一 四一 かれら叫びたれども救ふものなく　ヱホバに對ひてさけびたれども答へたまはざりき
四二 四二 給へり　かれらのごとくに打棄たり　なんぢわれを民のあらそひより助けいだし
四三 四三 風のまへの塵のごとくに搗碎き　ちまたの埃のごとくにわれを民のあらそひより助けいだし
四四 四四 我をたてゝもろもろの國の長となしたまへり　わがしらざる民われにつかへん
四五 四五 われにしたがひ異邦人はきたりて僞りつかへん　かれらわが事をきゝて立刻
四六 四六 われにしたがひ異邦人はきたりて僞りつかへん　ことくにびとは衰へてその城よりをのゝきいでん
四七 四七 は活ていませり　わが磐はほむべきかな　わがすくひの神はあがむべきかな
四八 四八 われに服はせたまふはこの神なり　神はわれを仇よりすくひたまふ實になんぢはわれを仇よりすくひたまふ實になんぢは
四九 四九 うへに我をあげ　あらぶる人より我をたすけいだし給ふ
五〇 五〇 なんぢに感謝し　なんぢの名をほめうたはん　ヱホバはこの故にヱホバよ　われもろもろの國人のなかにて
その裔とに世々、かぎりなく憐憫をたれたまふ　その受膏者ダビデと　その受膏者ダビデと　その王にあたへ　その救をその王にあたへ

イ 申三二・一三、三三　ロ 詩一四四・一　ハ 哀四・一二　ニ 伯二七・九、三五・
一二 箴一・二八　ホ 亞一〇・五　ヘ 拂後二・九、一〇、一一、一四・一二　ト 拂後八・九―一四　チ 結五二・一五、五五　リ 申三三・二九　詩二一・一　ヌ 結八・一八　米三・四　ル 詩四七・三　ヲ 詩五九・一　ワ 羅一五・九　カ 詩一四四・一〇　ヨ 拂後七・一三　タ 創一・六　賽四〇・二二　羅一・一九、二〇　レ 羅一〇・一八　ソ 傳一・五

ツ詩一一一・七
ネ詩一二・六
ナ詩一三・三

ラ詩一一九・七二、一二七　総八・一〇、一一・一九
ム詩一一九・一〇三　ウ総二九・一八　キ詩四〇・一二
ノ詩九〇・八　オ利四・二一―一二　ク創二〇・六　再前　ヤ詩一一九・一三三　ケ箴四三・一四、四四　フ歴一八・一〇

第一九篇 ―

うたのかみに謳はしめたるダビデのうた

一 もろもろの天は神のえいくわうをあらはし穹蒼はその手のわざをしめす
二 日につたへ このよ知識をかの夜におくる
三 語らずいはずその聲きこえざるに
四 そのことばは地のはてにまでおよぶ 神はかしこに帷幄を日のためにまうけたまへり
五 日は新郎がいはひの殿をいでたつやうに その運りゆくや勇士がきそひはしるをよろこぶに似たり
六 そのいでたつや天の涯より
七 はてにいたる 物としてその和 煦をかうぶらざるはなし
八 ヱホバの法はまたくして愚なるものを智からしむ ヱホバの證詞はかたくして心をよろこばしめ
九 ヱホバの訓諭はなほくして世々にたゆることなく ヱホバを惶みおそるゝ道はきよくして眼をあきらかならしむ
一〇 これを黄金にくらぶるも 精金にくらぶるもいやまさりて甘し 誡命はきよくしてことごとく正し
一一 なんぢの僕はこれらによりて儆戒をうく これらをまもらば大なる報賞あらん
一二 たれかおのれの過失をしりえんや ねがはくは我をかくれたる愆より解放ちたまへ
一三 願くはなんぢの僕をひきとめて故意なる罪ををかさしめず それをわが主たらしめたる愆より解放ちたまへ
一四 給ふなかれ さればわれ玷なきものとなりて大なる愆をまぬかるゝことを得ん

ヱホバわが磐わが贖主よ わがくちの言わがこゝろの思念なんぢのまへに悦ばるゝことを給ふなかれ

第二〇篇 ―

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ねがはくはヱホバなやみの日になんぢにこたへヤコブのかみの名なんぢを高にあげ
二 聖所より

三 援助をなんぢにおくりシオンより能力をなんぢにあたへ
四 燔祭をうけたまはんことを セラ
五 めたまはんことを 四 ねがはくはなんぢがこゝろの願望をゆるし なんぢの謀略をことごとく遂し
六 バ 汝のもろもろの求をとげしめたまはんことを
七 きよき天より右手なるすくひの力にてかれに應へたまはん
八 者あり 五 われらは我儕なんぢの救によりて歓びうたひ われらの神の名によりて旗をたてん ねがはくはなんぢの求をことごとく遂し
九 ヱホバよ王をすくひたまへ われらがよぶとき應へたまへ

第二一篇

一 ヱホバよ王は汝のもろもろの獣物をみこゝろにとめ なんぢのなんぢの救によりてその榮光おほいなり なんぢは尊貴と威とをかれに衣せたまふ 六 そは之をとこしへに福ひなるものとなし聖顔のまへの歓喜をもて樂しませたまへばなり 七 王はヱホバに依頼み いとたかき者のいつくしみを蒙るがゆゑに動かさるゝことなからん 八 なんぢの手はそのもろもろの仇をたづねいだし 汝のみぎの手はおのれを憎むものを探ねいだすべし 九 なんぢ怒るときは彼等をもゆるす爐のごとくにせん ヱホバはげしき怒によりてかれらを呑たまはん 火はかれらを食つくさん

二 なんぢ彼がこゝろの願望をゆるし その口びるの求をいなみ給はざりき セラ
三 伶長にうたはしめたるダビデのうた
四 ヱホバよ王はなんぢの力によりてたのしみ 汝のすくひによりて奈何におほいなる歓喜をなさん
五 かれ生命をもとめしに汝これをあたへてその齢の日を世々かぎりなからしめ給へり
六 なんぢの救によりてその榮光おほいなり なんぢは尊貴と威とをかれに衣せたまふ
七 そはよきたまものの恵をもて歓喜をもて樂しませたまへばなり
八 かれらはわが神ヱホバの名をとなへんことを
九 かれらは屈みまた仆る われらは起てかたくたてり

イ詩二一・二 ロ詩九・一四 ハ出一七・一五 詩 二詩二・二 ホ詩三三・一六、一七 ヘ代下三二・八 創二一・三一 賽三一・一 ト詩二〇・五、六 チ詩二〇・四、五 リ毋後一二・三〇 代 上二〇・二 ヌ詩六一・五、六 ル毋後七・一九 詩 九一・一六 ヲ詩一六・一一、四五 ワ詩一六・八 カ毋前三一・三 ヨ馬四・一 タ詩五六・一、二 レ詩一八・八 賽二六・一一

ソ王上一三・三四　伯　ッ詩二・一　ム詩二五・二、三、三一　・一四
一八・一六、一七、一　ネ太二七・四六　可　・二、七一・一　寮　キ寮五三、三
九　詩三七・二八、　一五・三四　四九・二三　撮九・　ノ太二七・三九　路　ナ寮五・七
一〇九・一三　寮　ナ寮五・七　三三　ウ伯二五・六　寮四一　オ伯一六・四　詩一〇　ケ寮四六・三、四九・一
一四・二〇　ラ巾一〇・二一　二三・三五　ヲ伯一六・一〇　詩　フ申三二・一四　詩
三五・二一　哀二・ア　六八・三〇　結三九　エ　一六、三・四六
一六　ア徴一七・二三　テ書七・五　伯二三・　一八　寮四・一　エ伯五・六

一〇 汝(ンヂ)かれらの裔(スエ)を地(チ)よりほろぼし　かれらの種を人(ヒト)の子のなかよりほろぼさん　一一
一一 くはだて遂(トゲ)がたき謀略(ハカリゴト)をおもひまはせばなり　汝(ンヂ)かれらをして背(ソビラ)をむけしめ　その面(カホ)にむかひて弓絃(ユヅル)をひかん
一二 ヱホバよ能力(チカラ)をあらはしてみづからを高(タカ)くしたまへ　我儕(ワレラ)はなんぢの稜威(ミイヅ)をうたひ且(カツ)ほめたゝへん

第二二篇

あけぼのの鹿(シカ)の調(シラベ)にあはせて伶長(ウタノカミ)にうたはしめたるダビデの歌(ウタ)

一 わが神(カミ)わが神(カミ)なんぞ我(ワレ)をすてたまふや　何(イカ)なれば遠(トホ)くはなれて我(ワレ)をすくはず　わが歎(ナゲ)きのことばを
二 きゝ給はざるか　あゝわが神われ晝(ヒル)よばはれども汝(ンヂ)こたへたまはず　夜よばはれどもわれ平安(ヤスキ)をえず　三
三 あれイスラエルの讃美のなかに住(スム)たまふものよ　汝(ンヂ)はきよし　四
四 われらの列祖はなんぢに依頼(タノ)めり　かれら依頼(タノ)みたればこれを助けたまへり　五
五 かれら汝(ンヂ)をよびて援(タスケ)をえ汝により(エ)たのみて恥(ハヂ)をおへることなかりき　六
六 然はあれどわれは蟲(ムシ)にして人にあらず　世にそしられ民(タミ)にいやしめらるものなり　七
七 すべてわれを見(ミ)るものはわれをあざみわらひ　口唇をそらし首(カウベ)をふりていふ(ク)　八
八 かれはヱホバにより(オ)たのめりヱホバ助(タス)くべし　ヱホバかれを悦(ヨロコ)びたまふが故(ユヱ)にたすくべしと　九
九 されど汝(ンヂ)はわれを胎内(ハラノウチ)よりいだし給へるものなり　わが母(ハヽ)のふところにありしとき既(スデ)になんぢ
一〇 に依頼(タノ)ましめたまへり　一〇 我(ワレ)うまれいでしより汝(ンヂ)にゆだねられたり　わが母われを生しとき
一一 われに遠(トホ)ざかりたまふなかれ　患難(ナヤミ)ちかづき又すくふものなければなり　一一
一二 おほくの牡牛(ヲウシ)われをかこめり　一二 かれらは口(クチ)をあけて我(ワレ)にむかひ物(モノ)をかきさき吼(ホエ)うだく獅(シヽ)のごとし　一四
一三 の力(チカラ)つよき牡牛われをかこめり　一三 かれらは口をあけて我にむかひ物をかきさき吼うだく獅のごとし　一四
一四 われ水(ミヅ)のごとくそゝぎいだされ　わがもろもろの骨(ホネ)ははづれ　わが心(コヽロ)は蠟(ラフ)のごとくなりて腹(ハラ)のうちに鎔(トケ)たり　一五
一五 わが力(チカラ)は(テ)

一六 かわきて陶器(すゑもの)のくだけのごとく　わが舌は齶(あぎ)にひたつけり　なんぢわれを死(し)の塵(ちり)にふさせたまへり　一七
をめぐり惡(あし)きものの群(むれ)われをかこみてわが手(て)およびわが足(あし)をさしつらぬけり　一八
一九 りになりぬ　惡(あし)きもの目(め)をとめて我(われ)をみる　一八 かれらたがひにわが衣(ころも)をわかち我(わ)がしたぎを鬮にす　一九 ヱホバよ
二〇 遠(とほ)くはなれ居たまふなかれ　わが力(ちから)よねがはくは速(とく)きたりてわれを援けたまへ　二〇 わが
二一 しわが生命(いのち)を犬(いぬ)のたけきいきほひより脫(のが)れしめたまへ　二一 われを獅(し)の口(くち)また野牛(のうし)のつのより救ひいだしたまへ
二二 なんぢ我(われ)にこたへたまへり　二二 われなんぢの名(みな)をわが兄弟(はらから)にのべつたへ　なんぢを會(つどひ)のなかにて讃(ほめ)たゝへん
二三 ヱホバを懼(おそ)るゝものよヱホバをほめたゝへよ　ヤコブのもろもろの裔(すゑ)よヱホバをあがめよ　イスラエルのもろ
二四 もろのすゑよヱホバを畏(かしこ)め　二四 ヱホバはなやむものの辛苦(くるしみ)をかろしめ棄(すて)たまはず　これに聖顏(みかほ)をおほふことなく
二五 してその叫(さけ)ぶときにきゝたまへばなり　二五 大(おほい)なる會(つどひ)のなかにてわが讃美(ほめ)はなんぢによる
二六 誓(ちか)ひしことはヱホバをおそるゝ者(もの)のまへにてことごとく償(つぐの)はん　二六 謙遜者(へりくだるもの)はくらひて飽(あく)ことをえ　ヱホバをたづぬる
二七 づねもとむるものはヱホバをほめたゝへん　願(ねがは)くはなんぢらの心(こゝろ)とこしへに生(いき)んことを　二七 地(ち)のはては皆(みな)おもひ
二八 いだしてヱホバに歸(かへ)り　もろもろの國(くに)の族(やから)はみな前(みまへ)にふしをがむべし　二八 國(くに)はヱホバのものなればなり　ヱホバは
二九 もろもろの國人をすべをさめたまふ　二九 地(ち)のこえたるものは皆(みな)くらひてヱホバををがみ　塵(ちり)にくだるものと己(おの)が
三〇 たましひを存ふること能はざるものと皆そのみまへに拜跪かん　三〇 たみの裔(すゑ)のうちにヱホバにつかふる者(もの)あらん
三一 主(しゅ)のことは代々(よ)にかたりつたへらるべし　三一 かれら來(きた)りて此はヱホバの行爲(わざ)なりとてその義(ぎ)を後(のち)にうまるゝ民(たみ)に

イ伯二九・一〇　哀四・二〇　三、三七、二〇・二五　ト詩三五・一七　一二　ヲ約二〇・一七
・四　約一九・二八　二路二三・二七、三五　チ詩二二・一六　・二九
ロ默二二・一五　ホ路二三・三四　約リ提後四・一七　ヌ賽三四・七　徒四・ワ詩一三五・一
ハ太二七・三五　可一九・二三、二四　二七　ル詩四〇・九　來二・カ來五・七
一五・二四　路二三　へ詩一〇・一、二二・　
・三三　約一九・二　一一

ノ寨四〇・一一　耶　オ俳四・一九
二三・四　結三四・　ク結三四・一四
一一、一二、二三　約　ヤ默七・一七
一〇・一一　彼前二　マ詩五・八、三一・三　ケ伯三・五、一〇・二　ア詩三・六、二七・一、三一・五　サ創一・九　伯三八・六
・二五　默七・一七　ヰ俳四・一九　ヲ詩四四・一九　テ詩九二・一〇　エ詩一〇四・一五　ア出九・二九、一九・五　伯　サ創一・九　伯三八・六
一一八・六　詩一〇四・五、一三　メ太五・八

のべつたへん

第二三篇

ダビデのうた

一　ヱホバはわが牧者なり　われ乏しきことあらじ（ア）
二　水濱にともなひたまふ
三　ヱホバはわが靈魂をいかし名のゆゑをもて我をたゞしき路にみちびき給ふ（イ）
四　われ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ　なんぢ我とともに在せばなり　なんぢの笞なんぢの杖われを慰む（ウ）
五　なんぢわが仇のまへに我がために筵をまうけ　わが酒杯はあふるゝなり（エ）
六　わが世にあらん限りはかならず恩惠と憐憫とわれにそひきたらん　我はとこしへにヱホバの宮にすまん

第二四篇

ダビデのうた

一　地とそれに充るもの世界とその中にすむものとはみなヱホバのものなり（ア）
二　大海のうへに置これを大川のうへに定めたまへり
三　ヱホバの山にのぼるべきものは誰ぞ　その聖所にたつべきものは誰ぞ
四　手きよく心いさぎよき者そのたましひ虚きことを仰ぎのぞまず　偽りの誓をせざるものぞ　その人（イ）
五　かゝる人はヱホバより福祉をうけ　そのすくひの神より義をうけん
六　斯のごとき者は神をしたふものの族類なり　ヤコブの神よなんぢの聖顔をもとむる者なり　セラ
七　門よなんぢらの首をあげよ　とこしへの戸よあがれ　榮光の王いりたまはん
八　えいくわうの王はたれなるか　ちからをもちたまふ猛きヱホバなり　戰鬪にたけきヱホバなり
九　門よなんぢらの首をあげよ　とこしへの戸よあがれ　榮光の王いりたまはん
一〇　この榮光

の王はたれなるか 萬軍のヱホバ是ぞえいくわうの王なる セラ

第二五篇 ダビデのうた

一 あゝヱホバよ わがたましひは 汝をあふぎ望む
二 わが神よわれ(一)なんぢに依賴めり ねがはくは
われに愧をおはしめたまふなかれ わが仇のわれに勝誇(二)ることとなからしめたまへ
三 實になんぢを俟望むものは
はぢしめられず 故なくして信をうしなふものは愧をうけん
四 ヱホバよなんぢの大路をわれにしめし なんぢの
徑をわれにをしへたまへ
五 我をなんぢの眞理にみちびき我ををしへたまへ
(三)
なんぢはわがすくひの神なり われ終日
なんぢを俟望むこれを思ひいだしたまへ
六 ヱホバよ汝のめぐみの大(四)なんぢの仁慈にしたがひて
がわかきときの罪(五)とわが愆とはおもひいでたまふなかれ ヱホバよ汝(六)のめぐみの故
我をおもひいでたまへ
七 ヱホバはめぐみ深くして直くましませり 斯るがゆゑに道をつみびとにをしへ
だるものを正義にみちびきたまはん
八 ヱホバはめぐみ深くして直くましませり 斯るがゆゑに道をつみびとにをしへ
けいやくと證詞とをまもるものには仁慈なり眞理なり
九 ヱホバをおそるゝ者はたれなるか 之にその
したまへ
十 ヱホバをおそるゝ者はたれなるか 之にその
ひは平安にすまひ その裔はくにをつぐべし
十一 ヱホバの親愛はヱホバをおそるゝ者とともにあり ヱホバはその
契約をかれらに示したまはん
十二 わが目はつねにヱホバにむかふ ヱホバわがあし
十三 わが不義はおほいなり
十四 わが不義はおほいなり
十五 わが目はつねにヱホバにむかふ ヱホバわがあし
十六 ねがはくは歸りきたりて我をあはれみたまへ われ獨わびしくまた苦しみをるなり
十七 心のうれへをゆるめ 我をわざはひより脱かれしめたまへ
十八 わが患難わが辛苦をかへりみ わがすべての罪を

イ詩八六・四、一四三・八 ロ詩二二・五、三一・一、三四・八 ハ詩一三・四 ニ詩二八・一六、四九・一三 ホ出三三・一三 ヘ伯一三・二六、二〇・一四三・八、一一九・二三 ト詩一〇二・一二 チ羅五・二〇 リ詩三一・三、七九・一一 ヌ詩三七・二三 ル箴一九・二三

ヲ詩三七・一一、三二、二九　タ慨後一六・一二
ワ慨三・三一　約七・一七、一五・一五
カ詩一四一・八
ヨ詩六九・一六、八六　レ詩二五・二

一九 ゆるしたまへ　一九 わが仇をみたまへ　かれらの數はおほし情なき憾をもてわれをにくめり

二〇 まもり我をたすけたまへ　われに愧をおはしめたまふなかれ　我なんぢに依頼めばなり

二一 ねがはくは完全と正直とわれをまもれかし　二二 神よすべての憂よりイスラエルを贖ひいだしたまへ

ダビデの歌

第二六篇 一

一 ヱホバよねがはくはわれを鞫きたまへ　われわが完全によりてあゆみたり　然のみならず我たゆたはずヱホバに依頼めり

二 ヱホバよわれを糺しまた試みたまへ　わが腎とこゝろとを錬きよめたまへ

三 そは汝のいつくしみわが眼前にあり　我はなんぢの眞理によりてあゆめり

四 われは虚しき人とともに座らざりき　惡をなすものの會をにくみ惡者とともにはゆかじ

五 惡をなすものの會をにくみ惡者とともにすわることをせじ

六 われ手をあらひて罪なきをあらはす　ヱホバよ斯てなんぢの祭壇をめぐり

七 感謝のこゑを聞えしめ　すべてなんぢの奇しき事をのべつたへん

八 ヱホバよ我なんぢのましますいへとなんぢが榮光のとゞまる處とをいつくしむ

九 願くはわがたましひを罪人とともに　わが生命を血をながす者とともに取收めたまふなかれ

一〇 かゝる人の手にはあしきくはだてあり　その右の手は賄賂にてみつ

一一 されどわれはわが完全によりてあゆまん　願くはわれをあがなひ我をあはれみたまへ

一二 わがあしは平坦なるところにたつ　われもろもろの會のなかにてヱホバを讃まつらん

ダビデの歌

第二七篇 一

一 ヱホバはわが光わが救なり　われ誰をかおそれん　ヱホバはわが生命のちからなり　わが懼るべき

二 ものはたれぞや
三 縦ひいくさびと
四 あり われ一事を
五 あらん限りは
六 その幕屋のおくに
うへに高くあげらるべし
七 わが聲をあげてさけぶときヱホバよ
八 たゝへん
面をたづねもとめよと
九 いへり ねがはくは
一〇 噫わがすくひの神よ
一一 たまはん
一二 はりの證をなすもの
一三 たまふなかれ
一四 俟望ぞめ

第二八篇

ダビデの歌

一 あゝヱホバよわれ汝をよばん わが磐よねがはくは我にむかひて暗啞となりたまふなかれ なんぢ

イ 詩一四・四　ロ 詩三・六　ハ 詩二六・八　ニ 詩九〇・一七　ホ 詩六五・四　歴二・三七　ヘ 詩三一・二〇、八三　ト 詩四〇・二　チ 詩三・三　リ 詩二四・六　ヌ 詩六九・一七、一四　ル 箴四九・一五　ヲ 詩二五・四、八六・一一　ワ 毋前二二・九　毋後一六・七、八　詩三五　カ 徒九・一　ヨ 詩三五・二五　タ 詩五六・一三、一一　レ 詩三・七　ソ 詩二七・一四　ツ 詩一四・五　ネ 詩一四・六、一〇五　ナ 詩三一・二二　ラ 詩三九・一二　ム 詩三五・一九　ウ 詩三五・一一　ヰ 詩三五・一二　ノ 詩三五・一三　オ 詩三五・一四　ク 詩三五・一五　ヤ 詩三五・一六　マ 詩三五・一七　ケ 詩三五・一八　フ 詩三五・一九　コ 詩三五・二〇　エ 詩三五・二一　テ 詩三五・二二　ア 詩三五・二三　サ 詩三五・二四　キ 詩三五・二五　ユ 詩三五・二六　メ 詩三五・二七　ミ 詩三五・二八　シ 詩三五・二九　ヱ 詩三五・三〇　ヒ 詩三五・三一　モ 詩三五・三二　セ 詩三五・三三　ス 詩三五・三四

二 默したまはゞ恐らくはわれ墓にいるものとひとしからん　二 われ汝にむかひてさけび聖所の奥にむかひて手を
三 あぐるときわが懇求のこゑをきゝたまへ　三 あしき人また邪曲をおこなふ者とともに我をとらへてひきゆき給ふ
四 なかれかれらはその隣にやはらぎをかたれども心には殘害をいだけり　四 その事にしたがひてこれに與へその手の行爲にしたがひて彼等にあたへ
五 したがひて彼等にあたへその手のなしわざとをかへりみずこの故にエホバかれらを報いたまへ　五 エホバのもろもろの事とその手のなしわざとをかへりみずこの故にエホバかれらを毀ちて建たまふことなから
六 ん　六 エホバは讃べきかなわが祈のこゑをきゝたまひたり　七 エホバはわが力わが盾なりわが心これに依賴みたればわれたすけをえたり然るゆゑにわが心いたくよろこぶわれ歌をもてほめまつらん　八 エホバはその民のちからなりその受膏者のすくひの城なり　九 なんぢの民をすくひなんぢの嗣業をさきはひ且これをやしなひ之をとこしなへに懷きたすけたまへ

ダビデの歌

第二九篇

一 なんぢら神の子らよエホバに獻げまつれ榮と能とをエホバにさゝげまつれ　二 エホバに榮光をエホバにさゝげ奉れきよき衣をつけてエホバを拜みまつれ　三 エホバの聲は雷をとゞろかせたまふエホバは大水のうへにいませり　四 エホバの聲はちからありエホバの聲は尊厳あり　五 エホバのみこゑは杉柏ををりくだくエホバはレバノンのかうはくを折くだきたまふ　六 これを犢のごとくをどらせレバノンとシリオンとをわかき野牛のごとくをどらせたまふ　七 エホバのみこゑは稜威あり

詩篇　二八・二―二九・七

八 みこゑは火焔をわかつ
九 みこゑは野をふるはせ
一〇 ヱホバのみこゑは鹿に子をうませ また林木をはだかにす その宮にあるすべてのものは呼はりて榮光なるかなといふ
一一 ヱホバは洪水のうへに坐したまへり ヱホバは寶座にざして永遠に王なり
一二 ヱホバはその民にちからをあたへたまふ 平安をもてその民をさきはひたまはん

第三〇篇

ダビデのうた

一 ヱホバよわれ汝をあがめん なんぢ我をおこしてわが仇のわがことによりて喜ぶをゆるし給はざればなり
二 わが神ヱホバよわれ汝によばはれば汝われをいやしたまへり
三 ヱホバよ汝わがたましひを陰府よりあげ我をながらへしめて墓にくだらせたまはざりき
四 ヱホバの聖徒よヱホバをほめうたへ きよき名に感謝せよ
五 その怒はたゞしばしにてその恵は生命のうちとゝもにながし 夜はよもすがら泣かなしむとも朝には歓呼ばん
六 われ安けかりしときに謂く とこしへに動かさるゝことなからんと
七 ヱホバよなんぢ恵をもてわが山をかたく立せたまひき 然はあれどなんぢ面をかくしたまひければ我おぢまどひたり
八 ヱホバよわれ汝によばはれり 我ひたすらヱホバにねがへり
九 われ汝にによばはれり 我ひたすらヱホバにねがへり
一〇 たゝへんや なんぢの眞理をのべつたへんや
一一 ヱホバよ聽たまへ われを憐みたまへ ヱホバよなんぢ踊躍をもてわが哀哭にかへ わが麁服をとき歓喜をもてわが帶としたまへり
一二 われ榮をもてほめうたひつゝ默すことなからんためなり わが神ヱホバよ われ永遠になんぢに感謝せん

イ民一三・二六　ロ伯三九・一—三　ハ創六・一七　伯三八・八、二五　ニ詩一〇・一六　ホ詩二八・八　ヘ詩二五・二、三五・九　ト詩二八・九　チ詩六・二、一〇三・三　リ詩八六・一三　ヌ詩二八・二　ル代上一六・四　詩九七・一二　ヲ詩一〇三・九　寮　ワ詩六三・二　カ詩一二六・五　ヨ伯二九・一八　タ詩一〇四・二九　レ詩六・五、八八・一一、一一五・一七、一一八・一七　寮　ソ哥後六・一四　哀六一・三　耶三一・四　ツ詩二三・五、二五・二、七一・一　寮四　ム詩二三・三　二五・九・二三　ネ詩一四三・一　ナ詩七一・二　ラ詩一八・二

第三一篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ヱホバよわれ汝によりたのむ　願くはわがとこしへまで恥をおはしめたまふなかれ　なんぢの義をもてわれを助けたまへ

二 なんぢの耳をかたぶけて速かにわれをすくひたまへ　願くはわがために堅固なる磐となりわれを救ふ保障の家となりたまへ

三 なんぢはわが磐わが城なり　されば名のゆゑをもてわれを引われを導きたまへ

四 なんぢわれらが密かにまうけたる網よりひきいだしたまへ　なんぢはわが保砦なり

五 われ靈魂をなんぢの手にゆだぬ　ヱホバまことの神よ　なんぢはわれを贖ひたまへり

六 われはいつはりの虚きことに心をよする者をにくむ　われは獨ヱホバによりたのむなり

七 我はなんぢの憐憫をよろこびたのしまん　なんぢわが艱難をかへりみ　わがたましひの禍害をしり

八 わが仇の手にとぢこめしめたまはず　わが足をひろきところに立たまへばなり

九 われを迫りくるしめり　ヱホバよ我をあはれみたまへ　わが目はうれひによりておとろふ　靈魂も身もまた衰へぬ

一〇 わが生命はかなしみによりて消えゆき　わが年華はなげきによりて消ゆけばなり　わが力はわが不義によりておとろへ　わが骨はかれはてたり

一一 われもろもろの仇ゆゑにそしらる　わが隣にはわけて甚だし　相識ものには忌憚られ　衢にてわれを見るもの避てのがる

一二 われは死たるもののごとく忘られて人のこゝろにおかれず　われはやぶれたる器もののごとくなれり

一三 そは我おほくの人のそしりをきゝ到るところに懼あり　かれら我にさからひて互にはかりしが　わが生命をさへとらんと企てたり

一四 されどヱホバよわれ汝によりたのめり　ねがはくはわれは汝なんぢの手にあり　わが仇の手よりわれをたすけ　われに迫るものより助けいだしたまへ

一五 わが時はすべてなんぢの手にあり　ねがはくはわれを仇なんぢの僕のうへに聖顏をかゞやかせ　なんぢの仁慈をもて我をすくひ

一六 追迫るものより助けいだしたまへ　なんぢ

ウ路二三・四六　徒七・五九　ノ約一〇・二七　マ詩三二・三、一〇二・四　ク詩四・一、一八・一九　ヤ詩三一・三　ケ詩四一・八　ヨ詩六四・八　ル詩五三・一　フ伯一九・一三　詩三八・一一、八八・一　エ詩八八・四、五　テ耶二〇・一〇　ア耶六・二五、二〇・一〇　キ民六・二五、二六　詩三・二三　サ太二七・一　詩四・六、六七・一

一七 たまへ　一七 ヱホバよ我なんぢをよべばなり　願くはあしきものに恥をうけし
一八 め陰府にありて口をつぐましめ給へ　一八 (イ)我れに愧をおはしめ給ふなかれ　そは(ロ)傲慢と輕侮とをもて義きものにむかひ妄りにのゝしるいつはりの口唇を
一九 つぐましめたまへ　一九 汝をおそるゝ者のために　なんぢに依頼むもののために
二〇 したまへる汝のいつくしみは大なるかな　二〇 汝かれらを御前なるひそかなる所にかくして人の謀略よりまぬかれ
二一 しめ また行宮のうちにひそませて舌のあらそひをさけしめたまはん　二一 讃べきかなヱホバは堅固なる城のなか
二二 にて奇しまるゝばかりの仁慈をわれに顯したまへり　二二 われ驚きあわてゝいへらく　なんぢの目のまへより絕れ
二三 たりと然どわれ汝によびもとめしとき　汝わがねがひの聲をきゝたまへり　二三 なんぢらもろもろの聖徒よヱホバを
二四 をいつくしめ　ヱホバは眞實あるものをまもり　傲慢者におもく報をほどこしたまふ　二四 すべてヱホバを俟望む
ものよ雄々しかれ　心をかたうせよ

第三一篇

ダビデの訓諭のうた

一 ヱホバよ我なんぢに負せられざるもの　その心に福ひなり　二 不義をヱホバに負せられざるもの
二 いつはりなき者はさいはひなり　三 我いひあらはさゞりしときは終日かなしみさけびたるが故にわが骨ふるびおとろへたり
三 とろへたり　四 なんぢの手はよるも晝もわがうへにありて重し　わが身の潤澤はかはりて夏の旱のごとくなれり
四 セラ　五 斯てわれなんぢの前にわが罪をあらはしわが不義をおほはざりき　我いへらくわが愆をヱホバにいひあらはさんと　斯るときしも汝わがつみの邪曲をゆるしたまへり　セラ
五
六 らはさんと　六 されば神をうやまふ者はなんぢに遇ことを

イ 詩二五・二　ロ 毋前二・九　詩一一　ホ 箴六四・四　哥前二　ヘ 詩二七・五、三二・七　ト 伯五・二一　チ 毋前二三・七　リ 詩一七・七　ヌ 毋前二三・二六　詩一一六・一一　ル 箴三八・一二、一三　ヲ 詩三四・九　ワ 詩二七・一四　カ 詩八五・二　羅四・六―八　哀三・五四　拿二・四　ヨ 哥後五・一九　タ 約一・四七　レ 毋前五・六、一一　伯三三・七　詩三八・二　ツ 提前一・一六　ソ 箴二八・一三　箚六五・二四　路一五・一八、二二　約壹一・九

をうべき間になんぢに祈らん　大水あふれ流るゝともかならずその身におよばじ
なんぢ患難をふせぎて我をまもり　救のうたをもて我をかこみたまはん　セラ　八
途にみちびきわが目をなんぢに注てさとさん　九
は鑣たづなのごとき具をもてひきとめずば近づきたるることとなし　一〇
ものは憐憫にてかこまれん　二　たゞしき者よヱホバを喜びたのしめ　凡てこゝろの直きものよ喜びよばふべし　一一

第三三篇

一　感謝せよ　たゞしき者よヱホバによりてよろこべ　讃美はなほきものに適はしきなり　二
琴をもてヱホバにたゞみことばは直く　そのすべて行ひたまふところ眞實なればなり　四
ヱホバは義と公平とをこのみたまふ　その仁慈はあまねく地にみつ　五
ばにより天の萬軍はヱホバの口の氣によりてつくられたり　六
くし深淵を庫にをさめたまふ　全地はヱホバをおそれ世にすめるもろもろの人はヱホバをおぢかしこむべし　八
そはヱホバ言たまへば成り　おほせたまへば立るがゆゑなり　九
もろもろの民のはかりごとを虛くしもろもろの國のはかりごとを虛くし　一〇
ヱホバはもろもろの國のはかりごとをやぶりたまふ　一一
ヱホバの謀略はとこしへに立ち　そのみこゝろのおもひは世々にたつ　一一
ホバ天よりうかゞひてすべての人の子を見　一四　そのヱホバ嗣業にせんとて撰びたまへるその民はさいはひなり　一二
ヱホバをおのが神とする國はさいはひなり　一三
その在すところより地にすむもろもろの人をみたまふ　一五　ヱホバ

ネ箴五五・六　約七・三四　詩九・九、二七・五、三一・二〇、一一九　牛歳一三・二一　羅二・九　ラ出一五・七　士五・一　ノ詩三四・八、八四・一二　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六　メ伯二三・一三　歳一六・二〇　ヤ詩一四七・一　ム歳二六・三　雅三・三　詩一一・七、四五・七　ウ伯三五・一一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八・三五　ク詩三二・一一、九七・一二　ケ詩九六・一、一四四・九、一　寒四二・一　テ創二・一　一〇　獣五・九　ア伯二六・一三　マ詩九二・二、一四四・九　ヨ詩一一九・六四・二〇　エ創一・六、七　來一一　キ創一・三　詩一四・一　彼後三・五　サ創一・九　伯二六・八　一〇、三八・八　ミ詩六五・四、一四四　シ出一九・五　申七・六

一六 はすべてかれらの心をつくり その作ところをことごとく鑒みたまふ 一六 王者いくさびと多をもて救をえず勇士
一七 ちから大なるをもて助をえざるなり 一七 馬はすくひに益なく その大なるちからも人をたすくることなからん
一八 一八 視よヱホバの目はヱホバをおそるゝ者の並その憐憫をのぞむものの
一九 一九 うへにあり 二 此はかれらのたましひを死よりすくひ饑饉たるときにも世にながらへしめんがためなり 二〇 われらのたましひはヱホバを俟望めり ヱホ
二〇 二一 バはわれらの援われらの盾なり 三 われらはきよき名によりたのめり 斯てぞわれらの心はヱホバにありてよろ
二一 二二 こばん 三 ヱホバよわれら汝をまちのぞめり これに循ひて憐憫をわれらのうへに垂たまへ

第三四篇

ダビデ、アビメレクのまへにて狂へる狀をなし逐れていでさりしときに作れるうた

一 二 一 われつねにヱホバを崇めよ わがたましひはヱホバにより
二 三 て誇らん 謙だるものは之をきゝてよろこばん 二 われとともにヱホバを崇めよ われらともにその名をあげたゝ
三 四 へん 四 われヱホバを尋ねたればヱホバわれにこたへ我をもろもろの畏懼よりたすけいだしたまへり 三 かれら
四 五 ヱホバを仰ぎのぞみて光をかうぶれり かれらの面はぢあからむことなし 六 この苦しむもの叫びたればヱホ
五 六 バこれをきゝ そのすべての患難よりすくひいだしたまへり 七 ヱホバの使者はヱホバを畏るゝ者のまはりに
六 七 營をつらねてこれを援く 八 なんぢらヱホバの恩惠ふかきを嘗ひしれ ヱホバにたよる者はさいはひなり
七 八 九 ヱホバの聖徒よヱホバを畏れよヱホバをおそるゝものには乏しきことなければなり 一〇 わかき獅はともしくし
八 九 一〇 て饑ることありされどヱホバをたづぬるものは嘉物にかくることあらじ 一一 子よきたりて我にきけ われヱホバ
九 一〇 一一

イ伯三四・二一　耶　二伯三六・七　詩三三・一九　ト詩六二・一、五、　ヌ弗五・二〇　撒前五・一八　撒後一・三、　ヲ詩一一九・七四、一一七　カ太七・七　路一一・九
ロ詩四四・六　チ詩一一五・九―一一　三・一二　ホ詩一四七・一一　ワ詩一三・五　亞一〇　ル耶九・二四　哥前一・四六　ヨ詩三・四　タ詩三四・一七　撒後二二・一　レ但六・二二　來一・一四
ハ詩二〇・七、一四七・一〇　徴二一・三一　ヘ伯五・二〇　詩三一・一九　ソ創三二・一、二　王下六・一七　亞九・八　ツ彼前二・三　ネ詩二・一二

を畏るべきことを汝等にをしへん 一二 福祉(井)をみんがために生命をしたひ存へんことをこのむ者はたれぞや 一三 なんぢの舌をおさへて惡につかしめず なんぢの口唇をおさへて虚僞をいはざらしめよ 一四 惡をはなれて善をおこなひ和睦(ク)をもとめて切にこのことを勉めよ 一五 ヱホバの目はたゞしきものをかへりみ その耳はかれらの號呼(ケ)に傾く 一六 ヱホバの聖顏はあくをなす者にむかひてその跡を地より斷滅したまふ(コ) 一七 義者さけびたれば ヱホバ之をきゝてそのすべての患難よりたすけいだしたまへり 一八 ヱホバは心のいたみかなしめる者にちかく在して たましひの悔頽れたるものをすくひたまふ 一九 たゞしきもの(ア)は患難おほし されどヱホバはみなその中よりたすけいだしたまふ 二〇 ヱホバはかれがすべての骨をまもりたまふ その一つだに折らるゝことなし(サ) 二一 惡はあしきものをころさん 義人をにくむものは刑なはるべし 二二 ヱホバはその僕等のたましひを贖ひたまふ ヱホバに依賴むものは一人だにつみなはるゝことなからん

第三五篇 ダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは我にあらそふ者とあらそひ我とたゝかふものと戰ひたまへ 二 干と大盾とをとりてわが援にたちいでたまへ 三 戈(シ)をぬきいだしたまひて我におひせまるものの途をふさぎ且わが靈魂にわれはなんぢの救なりといひたまへ 四 願くはわが靈魂をたづぬるものの恥をえていやしめられ はかるものの退(モ)けられて惶てふためかんことを 五 ねがはくはかれらが風のまへなる粃糠のごとくなりヱホバの使者におひやられんことを 六 願くはかれらの途をくらくし滑らかにしヱホバの使者にかれらを追ゆかしめたまへ

七 はんことを 七 かれらは故(ゆゑ)なく我(われ)をとらへんとて網(あみ)をあ
(イ)
八 なにふせ 故(ゆゑ)なくわが靈魂(たましひ)をそこ
れば なり 八 願(ねがは)くはかれらが思(おも)ひよらぬ間(ま)にほろびきた
(ロ)
九 ことを り己(おの)がふせたる網(あみ)にとらへられ自(みづか)らその滅(ほろび)におちいらん
(ハ)
一〇 九 然(さる)ときわが靈魂(たましひ)はヱホバによりてよろこび
その救(すくひ)をもて樂(たの)しまん 一〇 わが
(ニ)
骨(ほね)はいはんヱホバよ汝(なんぢ)はくるしむものを之(これ)にまさりて力(ちから)つよきものより並(また)くるしむものの貧(まづ)しきものを掠(かす)めうばふ者(もの)よりたすけい
だし給ふ 誰(たれ)かなんぢに比(たぐ)ふべき者(もの)あらんと 一一 こゝろあしき
(ト)
證人(あかしびと)おこりてわが知(しら)ざることを詰(なじ)りとふ 一二 かれ
らは惡(あく)をもてわが善(ぜん)にむくい我(わ)がたましひを依(よるべ)なきものとせり 一三 然(され)どわれかれらが病(やめ)しときには麁服(あらたへ)をつけ
(リ)
糧(かて)をたちてわが靈魂(たましひ)をくるしめたり わが祈(いのり)はふところにかへれり 一四 わがかれに作(な)ることはわが友(とも)わが兄弟(はらから)にことならず母(はゝ)の喪(も)にありて痛哭(なげく)がごとく哀(かな)しみうなたれたり 一五 然(され)どかれらはわが倒(たふ)れんとせしとき喜(よろこ)びつどひ
わが知(しら)ざりしとき匪類(をこのもの)あつまりきたりて我(われ)をせめ われを裂(さ)てやめざりき 一六 かれらは酒宴(しゆえん)にて穢(きたな)きことをのぶる嘲笑者(あざけりびと)のごとく我(われ)にむかひて齒(は)をかみならせり 一七 主(しゅ)よいたづらに見(み)るのみにして幾何時(いくそのとき)をへたまふや 願(ねがは)くはわがたましひの彼等(かれら)にほろぼさるゝを脫(のが)れしめ わが生命(いのち)をわかき獅(し)よりまぬかれしめたまへ 一八 われ大(おほい)なる會(つどひ)にありてなんぢに感謝(かんしや)し おほくの民(たみ)のなかにて汝(なんぢ)をほめたゝへん 一九 虛僞(いつはり)をもてわれに仇(あだ)するもののわが故(ゆゑ)なくわれを憎(にく)む者(もの)のたがひに眴(めくば)せすることなからしめたまへ 二〇 かれらは平安(やすき)をかたらず あざむきの言(ことば)をつくりまうけて國(くに)のうち(ヲ)にによろこぶことを容(ゆる)したまふなかれ故(ゆゑ)なくして我(われ)をにくむ者(もの)のたがひに眴(めくば)せすることなからしめたまへ 二一 かれらは口(くち)をあけひろげ あゝ視(み)よや視(み)よやわれらの眼(め)これをみたりといへり 二二 ヱホバよ汝(なんぢ)すでにならず我(われ)にむかひて口(くち)をあけひろげ あゝ視(み)よや視(み)よやわれらの眼(め)これをみたりといへり 二三 ヱホバよ汝(なんぢ)すでに

イ 詩九・一五　ロ 撒前五・三　ハ 詩七・一五、一六、五七・六、一四一・九、一〇 箴五・二二　ニ 詩一三・五　ホ 詩五一・八　ヘ 出一五・一一　詩七一・二九　ト 詩二七・一二
チ 詩三八・二〇、一〇　リ 伯三〇・二五　ヌ 太一〇・一三　ル 伯三〇・一、八、一二　ヨ 詩二二・二〇　タ 詩二二・二五、三一、四〇・九、一〇、一一　レ 詩一三・四、二五・一一・二　ソ 詩六九・四、一〇九・二三、一一九・一六一　ワ 伯一六・九　詩三七・一二　カ 哈一・一三　ヲ 伯一六・九　ツ 伯一五・一二　箴六・一三、一〇・一〇　ネ 詩三二・一三　哀三・五二　約一五　ナ 詩四〇・一五、五四・七、七〇・三

ラ出三・七　徒七・三四
ム詩三八・一、八三・一
ウ詩一〇・一、二二・
一二、一九、三八・
二二、七一・一二
キ詩四四・二三、一四〇・八

ヤ詩二七・一二、七〇
・三、一四〇・八

マ哀二・一六
ケ詩三五・四、四〇・
一四

フ詩三八・一六
コ詩一〇九・二九、一
三二・一八

エ羅一二・一五　哥前
ユ申二九・一八　詩
一〇・三、四九・一八

メ詩一二・二
ミ耶四・二三
シ箴四・一六　米二・一

ヱ罪六五・二
ヒ詩五七・一〇、一〇
八・四

モ伯一一・八　詩七七
・一九　羅一一・三三
セ伯七・二〇　詩一四
五・九　提前四・一〇

ス詩三一・一九
イ得二・一二　詩一七
八、九一・四

ロ詩六五・四
ハ詩一六・一一

ヱ羅一二・一五
ヲ詩一四九・四
ア詩七〇・四
サ詩五〇・一五、五
一・二四
シ箴四・一六　米二・一
ス詩三一・一九

ヱ罪六五・二
ヒ詩五七・一〇、一〇
八・四
メ詩一二・二
モ伯一一・八　詩七七
・一九　羅一一・三三
セ伯七・二〇　詩一四
五・九　提前四・一〇

ユ申二九・一八　詩
一〇・三、四九・一八
イ得二・一二　詩一七
八、九一・四
ロ詩六五・四
ハ詩一六・一一

ヱ罪六五・二
ヒ詩五七・一〇、一〇
八・四
ヲ詩一四九・四
ア詩七〇・四
サ詩五〇・一五、五
一・二四
シ箴四・一六　米二・一

ヱ羅一二・一五　哥前
ユ申二九・一八　詩
一〇・三、四九・一八
メ詩一二・二
ミ耶四・二三
シ箴四・一六　米二・一

ヱ罪六五・二
ヒ詩五七・一〇、一〇
八・四
モ伯一一・八　詩七七
・一九　羅一一・三三
セ伯七・二〇　詩一四
五・九　提前四・一〇

ス詩三一・一九

一〇 ちの泉はなんぢに在り われらはなんぢの光によりて光をみん 一〇
一一 ほどこし心なほき者にたえず 正義をほどこしたまへ 一一
一二 をゆるし給ふなかれ 一二 邪曲をおこなふ者はかしこに仆れたり かれら打伏られてまた起ことあたはざるべし 一二

ダビデのうた

第三七篇

一 惡をなすものの故をもて心をなやめ 不義をおこなふ者にむかひて嫉をおこすなかれ 一
二 やがて草のごとくかりとられ 青菜のごとく打萎るべければなり 二
三 ヱホバによりたのみて善をおこなへ この國にとゞまり眞實をもて糧とせよ 三
四 ヱホバによりて歡喜をなせ ヱホバはなんぢが心のねがひを汝にあたへたまはん 四
五 なんぢの途をヱホバにゆだねよ 彼によりたのみて善をおこなへ 五
六 光のごとくなんぢの義をあきらかにし 午日のごとくなんぢの訟をあきらかにしたまはん 六
七 なんぢヱホバのまへに口をつぐみ忍びてこれを俟望めおのが途をあゆみて榮るものの故をもて 心をなやむるなかれ 七
八 怒をやめ 忿恚をすてよ 心をなやむるなかれ これ惡をおこなふ方にうつらん 八
九 そは惡をなすものは斷滅され ヱホバを俟望むものは國をつぐべければなり 九
一〇 あしきものは久しからずしてうせん なんぢ細密にその處をおもひみるともあることなからん 一〇
一一 されど謙だるものは國をつぎ また平安のゆたかなるを樂まん 一一
一二 あしきものは義きものにさからはんとて謀略をめぐらし之にむかひて切齒す 一二
一三 主はあしきものの日のきたるを見たまへばなり 一三
一四 あしきものは劍をぬき弓をはりて苦しむものと貧しきものとをたふし行ひなほきものを

イ 彼前二・九　ロ 耶二二・一六　ハ 詩七・一〇、九四・一五、九七・一一　ニ 詩一・五　ホ 詩三七・七、七三・チ 詩五五・二二　一六・三　太六・二五　ヌ 詩六二・一、一二四・一、一九　路一二・二二　彼前ル 箴三〇・一、五・七　リ 伯一一・一七　米七　ヲ 詩三七・一、八　耶ヨ 詩三七・一一、二二、ツ 詩二・四　ワ 詩七三・三　弗四・タ 伯七・一〇、二〇・九　レ 太五・五　カ 伯二七・二三、一四　ソ 詩三五・一六　ヨ 詩三七・一一、二二、ツ 詩二・四　ネ 提前二六・一〇

一五 を殺さんとせり
一六 されどその劍はおのが胸をさしその弓はをらるべし
一七 くの惡きものの豐かなるにまされり
一八 ヱホバは完全もの(カ)の日をしりたまふ かれらの嗣業はかぎりなく久しからん
一九 そは惡き(ム)ものの(ク)もろもろの日にもあくことを得ん
二〇 ふとき愧をおはず饑饉の日にもあくことを得ん
二一 くうせ烟のごとく消ゆかん
二二 あしき者はものかりて償はず 義きもの(ケ)は惠ありて施しあたふ
二三 まふ人は國をつぎ 神ののろひたまふ人は斷滅さるべし
二四 ヱホバよろこびたまへり 縱ひその人たふるゝことあり(コ)
二五 たすけ支へたまへばなり
二六 くを見しことなし われむかし年わかくして今おいたれど 義者のすてられ 或はその裔の糧こひあり
二七 たゞしきものは終日めぐみありて貸あたふ その裔はさいはひなり
二八 なせ 然ばなんぢの住居とこしへならん ヱホバは公平をこのみ その聖徒をすてたまはざればなり かれらは
二九 永遠にまもりたすけられど惡きもの(サ)のすゑは斷滅さるべし
三〇 とこしへに及ばん たゞしきものの口は智慧をかたり その舌は公平をのぶ
三一 ありそのあゆみは一步だにすべることあらじ
三二 かる ヱホバは義者をあしきものの手にのこしおきたまはず 審判のときに罰ひたまふことなし
三三 俟望みてその途をまもれ さらば汝をあげて國をつがせたまはん なんぢ惡者のたちほろぼさるゝ時にこれをみん
三四

ナ 米五・六
ラ 箴一五・一六、一六 ウ 詩一・六
箴一五・二一 キ 雅六〇・二一
八 提前六・六 詩三三 ケ 箴一六・九
ム 伯三八・一五 詩 フ 詩三四・一九、二〇、
一〇・一五 結三〇 オ 詩一〇二・三
ク 詩一一二・五、九 四〇・二、九一・一二 エ 申一五・八、一〇 詩
箴二四・一六 米七 一一二・五、九
ヤ 箴三・三三 コ 伯一五・二三 詩
マ 詩三七・九 五九・一五、一〇九
ケ 箴一六・九 ・一〇
フ 詩三四・一九、二〇、 テ 詩三四・一四 賽一 ユ 太一二・三五
四〇・二、九一・一二 エ 申一五・八、一〇 詩 ・二六、一七 メ 申六・六 詩四〇・
箴二四・一六 米七 一一二・五、九 ア 詩一一・七 八、一一九・九八
サ 詩二一・一〇 箴二 賽五一・七 ミ 詩一〇・八
・二二 賽一四・二〇 シ 彼後二・九
キ 箴二・二一 ヒ 詩二七・一四、三七
・九 箴二〇・二二
モ 詩五二・五、六、 九
一・八

三五 我あしきものの猛くして
三六 (イ)ゆけり 視よたちまちに無なりぬ われ之をたづねしかど遇ことをえざりき
三七 完人に目をそゝぎ直人をみよ 和平
三八 なる人には後あれど 三八罪をかすものらは共にほろぼされ悪きものの後はかならず断るべければなり
三九 しきものの救はヱホバよりいづ ヱホバはかれらが辛苦のときの保砦なり
四〇 (ホ)ヱホバはかれらを助けかれらを救ひたまふ (ト)かれらはヱホバをその避所とすればなり

第三八篇 一

記念のために (チ)ヱホバよ 汝の怒をもて我をせめ はげしき怒をもて我をこらしめ給ふなかれ
二 矢われにあたり なんぢの手わがうへを壓へたり
三 (ヌ)なんぢの怒によりてわが肉には全きところなし わが罪によりてわが骨には健かなるところなし
四 わが不義はわが首をすぎてたかく重荷のごとく負がたければなり
五 (カ)われ折屈みていたくなげきうなたれたり われ終日
六 なるによりてわが傷あしき臭をはなちて腐れたり
七 我おとろへはて甚くきずかなしみありく
八 わが腰はことごとく燒るがごとく肉に全きところなければなり
九 (ク)あゝ主よわがすべての願望はなんぢの前にあり わがつけられ わが心のやすからざるによりて歎息さけべり
一〇 わが胸をどりわが力おとろへ わが眼のひかりもまた我にはなし
一一 嘆息はなんぢに隠るゝことなし
一二 わが友わが親めるものはわが痍をみて遥にたち わが隣もまた遠かりてたてり
一三 わが生命をたづぬるものは羂をまうけ我をそこなはんとするものは悪言をいひ また終日たばかりを謀る
一四 然はあれどわれは聾者のごとく

イ 伯五・三　ロ 伯二〇・五　ハ 詩一・四、五二・五　ニ 詩三・八　ホ 詩九・九
ヘ 賽三一・五　ト 代上五・二〇　チ 詩六・一
リ 伯六・四　ヌ 詩三二・四　ル 詩六・二　ヲ 啰九・六　詩四〇・一二
ワ 太一一・二八　カ 詩三五・一四　ヨ 伯三〇・二六　四二・九、四三・二　詩三八・三
レ 伯三・二四　詩二二・一　賽五九・一一　ソ 詩六・七、八八・九　ツ 詩三一・一一　ネ 路一〇・三一、三二
ナ 路二三・四九　ラ 毋後一七・一—三　ム 毋後一六・七、八　ウ 詩三五・二〇　キ 毋後一六・一

ノ詩三九・二、九　マ詩三五・二六　エ詩三五・一二　ヒ詩九〇・四　詩二、六　雅一二・二
オ毋後一六・一二　詩三二・五　箴三八　ケ詩三九・一三　テ彼前三・一三　約壁　キ王上二・四　王下二・二
ク詩一三・四　三九・七　フ哥後七・九、一〇　ア詩三五・二二　モ詩三九・一一、六二　ミ詩三八・一三　シ耶二〇・九　ユ酉四・五　一〇・三一
ヤ申三二・三五　コ詩三五・一九　サ詩二七・一、六二・　メ詩一四一・三　エ詩九〇・一二、一一　セ伯二七・一七　傳二　ス詩三八・一五
雅三　九・八四　・一八、二一、二六、

一四 きかず われは口をひらかぬ唖者のごとし　一四 如此われはきかざる人のごとく口にことあげせぬ人のごとき
一五 なり　一五 エホバよ我なんぢを俟望めり 主わが神よなんぢかならず答へたまふべければなり
一六 くはかれらわが事によりて喜び わが足のすべらんとき我にむかひて誇りかにたかぶらんと
一七 りになりぬ わが悲哀はたえずわが前にあり　一八 そは我みづから不義をいひあらはし わが罪のために
一八 なり　一九 わが仇はいきはたらきてたけく 故なくして我をうらむるものおほし　二〇 惡をもて善にむくゆるものは
一九 遠かりたまふなかれ　二一 われ善事にしたがふが故にわが仇となれり　二二 エホバよねがはくは我をはなれたまふなかれ
二〇 われ善事にしたがふが故にわが仇となれり　二一 エホバよねがはくは我をはなれたまふなかれ
二一 遠かりたまふなかれ　二二 主わがすくひよ速きたりて我をたすけたまへ

第三九篇

一 に在るあひだはわが口に銜をかけんと　二 われ默して唖となり善言すらことばにいださず わが憂なほおこれり
二 われ曩にいへり われ舌をもて罪ををかさゞらんために我すべての途をつゝしみ惡者のわがまへ
三 わが心わがうちに熱し おもひつゞくるほどに火もえぬればわれ舌をもていへらく　四 エホバよ願くはわが終と
四 わが日の數のいくばくなるとを知しめたまへ わが無常をしらしめたまへ　五 視よなんぢわがすべての日を一掌に
五 すぎさらしめたまふ わがいのち主前にてはなきにことならず 實にすべての人は皆その盛時だにもむなしから
六 ざるはなし セラ　六 人の世にあるは影にことならず その思ひなやむことはむなしからざるなし その積蓄ふる
七 ものはたが手にをさまるをしらず　七 主よわれ今なにをかまたん わが望はなんぢにあり　八 ねがはくは我を

九 すべての愆より助けいだしたまへ　愚なるものに誹
(イ)
一〇 此はなんぢの成したまふ者なればなり　願くはなんぢ
(ロ)
の責をわれよりはなちたまへ　我なんぢの手にうちこら
二 さるゝによりて亡ぶるばかりになりぬ　一一 なんぢ罪をせめて人をこらし　その慕ひよろこぶところのものを蠹の
(ハ)
三 くらふがごとく消うせしめたまふ　實にもろもろの人はむなしからざるなし　セラ
(ニ)
一二 わが祈をきゝ　わが號呼に耳をかたぶけたまへ　わが涙をみて默したまふなかれ　われはなんぢに寄る旅客すべて
(ホ)
(ヘ)
(ト)
一三 わが列祖のごとく宿れるものなり　一三 我こゝを去てうせざる先になんぢ面をそむけてわれを爽快ならしめたまへ
(チ)
(リ)
(ヌ)

第四〇篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 我たへしのびてヱホバを俟望みたり　ヱホバ我にむかひてわが號呼をきゝたまへり
(ル)
二 ほろびの阱より泥のなかよりとりいだしてわが足を磐のうへにおきわが歩をかたくしたまへり
(ヲ)
(カ)
三 らしき歌をわが口にいれたまへり此はわれらの神にさゝぐる讃美なり　おほくの人はこれを見ておそれかつヱホバに
(ヨ)
(タ)
四 バによりたのまん　四 ヱホバをおのが頼となし高るものにより虚偽にかたぶく者によらず虚偽にかたぶく人はさいはひなり
(レ)
(ソ)
(ツ)
五 わが神ヱホバよなんぢの作たまへる奇しき迹と　われらにむかふ念とは甚おほくしてこれを數かぞふることあたはず
(ネ)
(ナ)
六 ことあたはず　我これをいひのべんとすれどその數かぞふることをもとめたまはず　六 なんぢ犧牲と祭物とをよろこびたまはず汝わが耳をひらきたまへり　なんぢ燔祭と罪祭とを
(ラ)
七 そのとき我いへらく　視よわれきたらんわがことを書の巻にしるしたり　八 わが神よわれは聖意にしたがふことを樂む
(ム)
(ウ)
(ヰ)
(ク)
(ヤ)
(マ)
(ケ)
(フ)
(コ)
(エ)
(テ)
(ア)
(サ)
(キ)
(ユ)
(メ)
(ミ)
(シ)

イ 詩四四・一三、七九　三伯九・三四、一三一　ト利二五・二三　代上二九・一五　詩一一一・四　チ 創四七・九
ロ 利一〇・三　伯四〇・四、四、五　詩三八・一三　ホ伯四・一九、二一　リ伯一四・一〇—一二　ヌ伯一〇・二〇、二一、一四・五、六　ヲ 詩六九・二、一四
ハ 毋後一六・一〇　伯二・一〇　ニ 詩五〇・九　ヘ 詩三九・五　ル 詩二七・一四、三七・七　ワ 詩二七・五　ヨ 詩三三・三　レ 詩三四・八　耶一七・七　カ 詩三七・二三　タ 詩五二・六　ソ 詩一〇一・三、七　ツ 箴一二五・五　ネ 箴五五・八　ナ 出一五・一一　伯五・九、九・一〇　詩七一・一五、九二・七　ラ 毋前一五・二二　詩五〇・八、五一・一六　ム 路二四・四四　ウ 詩一一九・一六、二　ヰ 申三七・三一　耶一三九・六・一七　ク 詩四四、四七、九二　約四・三四　羅七・二二　ヤ 詩一〇・七　マ 詩四〇・九　ケ 詩一一九・一六、二　フ 詩四〇・一〇　コ 詩四〇・一〇　エ 詩四〇・一〇　テ 詩四〇・一〇　ア 詩四〇・一〇　サ 詩四〇・一〇　キ 詩四〇・一〇　ユ 詩四〇・一〇　メ 詩四〇・一〇　ミ 詩四〇・一〇　シ 詩四〇・一〇

にありと　九　われ大なる會にて義をつげしめせり　視よわれ口唇をとぢず　ヱホバよなんぢ之をしりたまふ　一〇　われなんぢの義をわが心のうちにひめおかず　なんぢの眞實となんぢの拯救とをのべつたへたり　我なんぢの仁慈と　一一　眞理とをもて恒にわれをまもりたまへ　二　そはかぞへがたき禍害われをかこみ　わが不義われに追及てあふぎみること能はぬまでになりぬ　その多きことわが首の髮にもまさり　わが心きえうするばかりなればなり　一三　ヱホバよなんぢ憐憫をわれにしみたまふなかれ　仁慈と　一四　よ願くはわれをすくひたまへ　ヱホバよ急ぎきたりて我をたすけたまへ　一五　願くはわが靈魂をたづねほろぼさんとするものの皆はぢあわてんことを　わが害はるゝをよろこぶもののみな後にしりぞきて恥をおはんことを　一六　われにむかひてあゝ視よや視よやといふ者おのが恥によりておどろきおそれんことを　一七　願くはなんぢを尋求むるものの皆なんぢによりて樂みよろこばんことを　なんぢの救をしたふものの恒にヱホバは大なるかなととなへんことを　一八　われはくるしみ且ともし　主われをねんごろに念ひたまふ　なんぢはわが助なり　われをすくひたまふ者なり　あゝわが神よねがはくはためらひたまふなかれ

第四一篇

うたのかみに謳はしめたるダビデのうた

一　よわき人をかへりみる者はさいはひなり　ヱホバ斯るものを禍ひの日にたすけたまはん　二　ヱホバ之をまもり之をながらへしめたまはんなんぢ彼をその仇のぞみにまかせて付したまふなかれ　三　ヱホバは彼がわづらひの床にあるをたすけ給はん　なんぢかれが病るときその衾褥をしきかへたまはん　四　我いへらくヱホバよわれを憐みわがたましひを醫したまへ　われ汝にむかひて罪を

五 をかしたりと　セラ　わが仇われをそしりていへり　彼いづれのときに死いづれのときにその名ほろびんと
六 七 又われを見んとてきたるときは虚偽(イ)をかたり邪曲をその心にあつめ　外にいでてはこれを述ぶ
八 にくむもの互ひにさゝやき我をそこなはんとて相謀る　ヘ
九 ふしてふたゝび起ることなからんと　九 わが恃みしところ　わが糧(ロ)をくらひしところの
一〇 そむきてその踵をあげたり　一〇 然はあれどヱホバよ　汝ねがはくは我をあはれみ我をたすけて起したまへ　されば
一一 我かれらに報ることとをえん　一二 わが仇われに打勝てよろこぶこと能はざるをもて　汝がわれを愛いつくしみ
一三 たまふを我しりぬ　一三 わが事をいはゞ　なんぢ我をわが完全うちにてたもち我をとこしへに面のまへに置たまふ
一三 イスラエルの神ヱホバはとこしへより永遠までほむべきかな　アーメン　アーメン

第四二篇

一 あゝ神よ　しかの渓水をしたひ喘ぐがごとく　わが霊魂もなんぢをしたひあへぐなり　二
二 しひは渇けるごとく　なんぢの神はいづくにありやとのゝしる間はたゞわが涙のみ晝夜そゝぎてわが糧なりき　三
三 終日われにむかひて　なんぢの神はいづくにありやといふ　四
四 われむかし群をなして祭日をまもる衆人とともにゆき歓喜と讃美のこゑをあげてかれらを神の家にともなへり　五
五 今これらのことを追想してわが衷よりたましひを注ぎいだすなり　六
六 たゝふべければなり　七 わが神よわがたましひはわが衷にうなたるゝや　なんぢ神をまちのぞめ　われに聖顔のたすけありて我なほわが神をほめん

イ 詩一二・二　箴二六　ハ 出後一五・一二　伯二〇・一〇　ニ 詩一〇六・四八　ホ 詩一〇二・一八　ヘ 詩六三・一、一九・一九　詩五五　ニ 伯三六・七　詩三四　ト 撒前一・九　チ 詩四二・一〇、七九・一〇、一一五・二　リ 詩八〇・五、一〇二・一九、一二、一三、二〇　ヌ 箴三〇・二九　ル 伯三〇・一六　詩六二・八　ヲ 哀三・二四　ワ 詩四二・一一、四三・五

七　よりミザルの山より汝をおもひいづ　七　なんぢの大瀑のひゞきによりて淵々よびこたへ　なんぢの波なんぢの
八　猛浪ことごとくわが上をこえゆけり　八　然はあれど晝はヱホバその憐憫をほどこしたまふ　夜はその歌われと
九　ともにあり　此うたはわがいのちの神にさゝぐる祈なり　九　われわが磐なる神にいはん　なんぞわれを忘れたまひ
一〇　しや　なんぞわれは仇のしへたげによりて悲しみありくや　一〇　わが骨もくだくるばかりにわがてきはひねもす
一一　我にむかひて　なんぢの神はいづくにありやといひのゝしりつゝ我をそしれり　一一　あゝわがたましひよ　汝なんぞ
うなたるゝや　何ぞわがうちに思ひみだるゝや　なんぢ神をまちのぞめ　われ尚わが
たゝふべければなり

第四三篇

一　神よねがはくは我をさばき　情しらぬ民にむかひてわが訟をあげつらひ詭詐おほきよこしまなる
人より我をたすけいだし給へ　二　なんぢはわが力の神なり　なんぞ我をすてたまひしや　何ぞわれは
三　仇の暴虐によりてかなしみありくや　三　願くはなんぢの光と眞理とをはなちて我をみちびきてその聖山と
四　その帷幄とにゆかしめたまへ　四　さらばわれ神の祭壇にゆき又わがよろこびよろこぶ神にゆかん　あゝ神よわが
五　神よわれ琴をもてなんぢを讃たゝへん　五　あゝわが靈魂よなんぞうなたるゝや　なんぞわが衷におもひみ
だるゝや　なんぢ神によりて望をいだけ　我なほわが面のたすけなるわが神をほめたゝふべければなり

第四四篇

一　あゝ神よむかしわれらの列祖の日になんぢがなしたまひし事迹をわれら耳にきけり　列祖われら

伶長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

カ耶四・二〇　結七・三　ツ詩四二・三　耳二・　ラ詩三五・一
二六　レ伯三五・一〇　詩一七　米七・一〇　ム詩二八・七
ヨ詩八八・七　拿二・三　三二・七、六三・六、　ネ詩四二・五、四三・五　ウ詩四二・九
タ利二五・二一　申一四九・五　ナ詩二六・一、三五・　ヰ詩四〇・一一、五七　ノ詩三・四
二八・八　詩一三三　ソ詩三八・六、四三・二　二四　・三　オ詩四二・五、一一
ク出一二・二六、二七
詩七八・三

二 に語れり　二 なんぢ手をもてもろもろの國人をおひしりぞけ われらの列祖をうゑ並
(イ)
三 もろの民をなやまして われらの列祖をはびこらせたまひき　三 かれらはおのが劍によりて國をえしにあらず おのが臂によりて勝をえ
(ロ)
四 しにあらず 只なんぢの右の手なんぢの臂なんぢの面のひかりによれり 汝かれらを恵みたまひたればなり　四 神
(ハ)
五 よなんぢはわが王なり ねがはくはヤコブのために救をほどこしたまへ　五 われらは汝によりて敵をたふし また
(ニ)
六 我儕にさからひて起りたつものをなんぢの名によりて踐壓ふべし　六 そはわれわが弓によりたのまず わが劍も
(ホ)
七 また我をすくふことあたはざればなり　七 なんぢわれらを敵よりすくひ またわれらを悪むものを辱かしめたまへり
(ヘ)
八 八 われらはひねもす神によりてほこり 永遠になんぢの名に感謝せん セラ
(ト)
九 九 しかるに今はわれらをすてゝ恥をおはせたまへり われらの軍人とともに出ゆきたまはず
(チ)
一〇 一〇 われらをして敵のまへより退かしめたまへり われらを悪むものその任意にわれらを掠めうばへり
(リ)
一一 一一 なんぢわれらを食にそなへらるゝ羊のごとくにあたへ 斯てわれらをもろもろの國人のなかにちらし
(ヌ)
一二 一二 汝われらを隣人にそしらしめ われらの周圍にあるものにあなどらしめ
一三 一三 なんぢわれらをもろもろの國人のなかにことわざとなし もろもろの民のなかにわれらを頭ふらるゝ者となし
(カ)
一四 一四 又もろもろの國のなかにわれらを談柄となし
一五 一五 わが凌辱ひねもす我がまへにあり わが顔かほの恥われをおほへり
(ヨ)
一六 一六 こは我をそしり我をのゝしる者の聲により 我にあだし我にうらみを報るものの故によるなり
(タ)
一七 一七 これらのことみな我らなほ汝をわすれず なんぢの契約をいつはりまもらざりき
(レ)
一八 一八 われらの心しりぞかず われらの歩履なんぢの

イ 出一五・一七　申七・二　詩七八・五五、八〇・八　ロ 申八・一七　書二四・二二　ハ 申四・三七、七・七、ト 詩四〇・一四　チ 詩三四・二一　二四　羅二・一七　リ 詩六〇・一、一〇、七四・一、八八・一四、八九・三八、一〇八・一二　ヌ 利二六・一七　申二八・二五　書七・八、一二　ル 羅八・三六　ヲ 申四・二七・六四　詩六〇・一　ワ 賽五二・三、四　一五・一三　カ 申二八・三七　詩七九・四、八〇・六　ヨ 耶二四・九　タ 王下一九・二一　伯一六・四　詩二二・七　レ 詩八・二　ソ 但九・一三　ツ 伯二三・一一　一九・五一、一五　詩八八・八　ネ 賽三四・一三、三五・七　ナ 詩二三・四　ラ 伯一一・一三　詩

一九 道をはなれず　一九 然どなんぢは野犬のすみかにてわれらをきずつけ死蔭をもてわれ
二〇
二一 もしおのれの神の名をわすれ或はわれらの手を異神にのべしことあらんには　二一 神
二二 や 神はこゝろの隱れたることをも知たまふ　二二 われらは終日なんぢのために死にわ
二三 如くせられたり　二三 主よさめたまへ 何ればねぶりたまふや 起たまへ　われらを
二四 いかなれば聖顏をかくしてわれらがうくる苦難と虐待とをわすれたまふや　二五 わ
二五 塵にふし われらの腹は土につきたり　二六 ねがはくは起てわれらをたすけたまへ なん
二六 われらを贖ひたまへ　ぢの仁慈のゆゑをもて

第四五篇

一 わが心はうるはしき事にてあふる 我百合花のしらべにあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のをしへのうた 愛のうた

二 我ものかく字人の筆なり 二 なんぢは人の子輩にまさりて美しく文雅そのくちびるにそゝがる このゆゑに神はとこしへに汝をさいはひしたまへり

三 英雄よなんぢその劍その榮その威をたくましくし勝をえて乘すゝめ なんぢの右手なんぢに畏るべきことをしめすべし

四 なんぢは人の子輩にまさりて美しく文雅そのくちびるにそゝがる このゆゑに神はとこしへに汝をさいはひしたまへり　四 なんぢ眞理と柔和とたゞしきとのために威をたくましくし勝をえて乘すゝめ なんぢの右手なんぢに畏るべきことをしめすべし

五 なんぢの矢は銳して王のあたの胸をつらぬき もろもろの民はなんぢの下にたふる　五 神よなんぢの寶座はいやとほ永くなんぢの國のつゑは公平のつゑなり

六 なんぢは義をいつくしみ惡をにくむ このゆゑに神なんぢの神はよろこびの膏をなんぢの侶よりまさりて汝にそゝぎたまへり

七 なんぢの衣はみな沒藥 蘆薈 肉桂のかをりあり 琴瑟の音ざうげの諸殿よりいでて汝をよろこばしめたり

八 なんぢがたふとき婦のなかにはもろもろの王のむすめ

一〇 あり 皇后はオフルの金をかざりてなんぢの右にたつ 一〇
一一 の民となんぢが父の家とをわすれよ (イ)一一
一二 一三 ツロの女は贈物をもてきたり民間のとめるものも亦なんぢの恵をこひもとめん (ロ)一二 さらば王はなんぢの美麗をしたはん (ハ)一三
一四 ていとど榮えかゞやき そのころもは金をもて織なせり (ニ)一四
一五 ともなへる處女もそのあとにしたがひて汝のもとにみちびかれゆかん 一五
一六 一七 れ斯して王の殿にいらん 一六 なんぢの子らは列祖にかはりてたち なんぢはこれを全地に君となさん 一七
ぢの名をよろづ代にしらしめん この故にもろもろの民はいやとほ永くなんぢに感謝すべし

第四六篇 一 神はわれらの避所また力なり 二 なやめるときの最ちかき助なり

一 女 音のしらべにしたがひて伶長にうたはしめたるコラの子のうた
二 三 うみの中央にうつるとも我儕はおそれじ 三 よしその水はなりとゞろきてさわぐとも その溢れきたるによりて
四 山はゆるぐとも何かあらん セラ 四 河あり そのながれは神のみやこをよろこばしむ
五 聖所をよろこばしめ 五 神そのなかにいませば都はうごかじ 神は朝つとにこれを助けたまはん
六 民はさわぎたち もろもろの國はうごきたり 神その聲をいだしたまへば 地はやがてとけぬ 六
七 われらとともなり ヤコブの神はわれらのたかき櫓なり セラ 七 萬軍のヱホバは
八 おほくの懼るべきことを地になしたまへり 八 きたりてヱホバの事跡をみよ ヱホバは地になしたまへり
九 ヱホバは地のはてまでも戦闘をやめしめ弓ををり戈をたち戦車を火にて焼すてたまふ 九

イ 王上二・一九　ロ 申二一・一三　ハ 詩九五・六　賽五四・五　ニ 歌一・四　ホ 歌一九・七、八　ヘ 歌一・一四　チ 馬一・一一　リ 詩六二・七、八　ヌ 申四・七　詩一四五・一八　ル 詩九三・三、四　耶五・二二　太七・二五　ヲ 賽八・七　ワ 詩四八・一、八　賽六〇・一四　カ 申二三・一四　賽一二・六、結四三・七、九　何一一・九　ヨ 詩二・一　タ 番二・九、二四　レ 民一四・九　詩四六・一〇　賽四九・二三、六〇・一二　ソ 詩一二一・四　ツ 賽二・四　ネ 詩七六・三　ナ 結三九・九　ラ 賽二・一一、一七　ム 詩四六・七

一〇 を火にてやきたまふ 一〇 汝等しづまりて我の神たるを知れ われはもろもろの國のうちに崇められ全地にあがめ
一一 らるべし 一一 萬軍のヱホバはわれらと偕なり ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり セラ

第四七篇 一

伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 もろもろのたみよ手をうち歡喜のこゑをあげ神にむかひてさけべ
二 べくまた地をあまねく治しめす大なる王にてましませばなり 三 ヱホバはもろもろの國の民をわれらに服はせ
三 もろの國をわれらの足下にまつろはせたまふ 四 又そのいつくしみたまふヤコブが譽とする嗣業をわれらのため
四 に選びたまはん セラ 五 神はよろこびさけぶ聲とともにのぼり ヱホバはラッパの聲とともにのぼりたまへり
五 六 ほめうたをうたへ神をほめうたへ 七 頌歌へわれらの王をほめうたへ
六 七 もろもろのたみの諸侯はつどひきたりてアブラハムの神の民となれり 八 神はもろもろの國をすべをさめたまふ 神はその
七 八 いとたふとし 九 もろもろのたみの諸侯はつどひきたりてアブラハムの神の民となれり 地のもろもろの盾は神のものなり 神は
九 いとたかきヱホバはおそるべくまた地をあまねく治しめす大なる王にてましませばなり 三 ヱホバはもろもろの國の民をわれらに服はせ もろ
一〇 を火にてやきたまふ 一〇 汝等しづまりて我の神たるを知れ われはもろもろの國のうちに崇められ全地にあがめ
一一 らるべし 一一 萬軍のヱホバはわれらと偕なり ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり セラ

第四八篇 一

コラの子のうたなり 讃美なり

一 ヱホバは大なり われらの神の都そのきよき山のうへにて甚くほめたゝへらるべし 二 シオンの山はきたの端たかくしてうるはしく喜悦を地にあまねくあたふ こゝは大なる王のみやこなり 三 その
二 三 オンの山はきたの端たかくしてうるはしく喜悦を地にあまねくあたふ こゝは大なる王のみやこなり 三 その
四 もろもろの殿のうちに神はおのれをたかき櫓としてあらはしたまへり 四 みよ王等はつどひあつまりて偕にすぎ
五 六 ゆきぬ 五 かれらは都をみてあやしみ且おそれて忽ちのがれさりぬ 六 戰慄はかれらにのぞみ その苦痛は子を

ウ 詩五五・一二　ノ 馬一・二四
キ 申七・二一　尼一・五　オ 詩一八・四七
詩七六・一二　ク 彼前一・四

ヤ 詩六八・二四、二五　ヲ 代上一六・三一　詩
マ 亞一四・九　ニ 歌一九・六
ケ 哥前一四・一五、一　九三・一、九六・一
コ 亞四・一一、一二

ヨ 得後一〇・六、一四、一六、一八、一九
タ 詩八九・一八　テ 詩四六・四、八七・三
サ 結二〇・六　キ 太五・三五　メ 何一三・一三

うまんとする婦のごとし　七　なんぢは東風をおこして各ル
七八　今われらは萬軍(ニ)のヱホバの都われらの神(イ)のみやこにて之(ロ)をみることをえたり　神はこの
たまはん　セラ　九　神よ我らはなんぢの宮のうちにて仁慈(ハ)をおもへり　一〇　神よなんぢの
九〇　極にまでおよべり　なんぢの右手はたゞしきにて充り　一一　シオンの周圍をありき徧くめぐりてその櫓をかぞへよ　一二
一一　びユダの女輩はなんぢの審判によりてシオンの山はよろこ
一二　とめよ　そのもろもろの殿をみよ　なんぢらこれを後代にかたりつたへんが爲なり　一四　そはこの神はいや遠長に
一四　われらの神にましてわれらを死るまでみちびきたまはん

第四九篇

一　二　三　四　五　六　七　八　九　一〇　一一　一二　一三

ニ　もろもろの民よきけ　賤きも貴きも富るも貧きもすべて地にすめる者よ　二　なんぢらともに耳をそばだてよ　三　わが口はかしこきことをかたり　わが心はさときことを思はん　四　われ耳を喩言にかたぶけ琴をならして(ト)わが幽玄なる語をときあらはさん　五　わが踵にちかゝる不義のわれを打圍むわざはひの日もいかで懼るゝことあらんや　六　おのが富をたのみ財おほきを誇るものを(ル)　七　たれ一人おのが兄弟をあがなふことあたはず之(ヲ)がために贖價を神にさゝげ　八　之をとこしへに生存へしめて朽ざらしむることあたはず(ワ)　九　そは智きものも死におろかものも獣心者もひとしくほろびてその富を他人にのこすことは常にみるところなり　一〇　かれら竊におもふ　わが家はとこしへに存りいとおほくして此事をとこしへに捨置ざるを得ざればをわがすまひは世々にいたらんと　かれらはその地におのが名をおはせたり　一一　されど人は譽のなかに永くとゞまらず

イ耶一八・一七　ロ結三七・二六　ハ詩四八・一、二　ニ賽二・二　米四・一　ホ詩二六・三、四〇・一〇　ヘ申二八・五八　ト賽五八・一一　チ詩六二・九　リ詩七八・二　ヌ詩三八・四　ル伯三一・二四、二五　ヲ太一六・二六　ワ詩八九・四八　カ伯三六・一八、一九　ヨ傳二・一六　タ徒一一・四　傳二・一七　レ詩五二・七、六二・一〇　可一〇・二四　提前六・一七

レ創四・一七
ソ詩三九・五、四九・一三、二〇、八二・七

らず亡びうする獣のごとし　一三 斯のごときは愚かなるものの途なり　然はあれど後人はその言をよしとせん　セラ　一四 かれらは羊のむれのごとくに陰府のものと定められる　死これが牧者とならん直きもの朝にかれらを一五 をさめんその美容は陰府にほろぼされて宿るところなかるべし　一五 されど神われを接たまふべければわが霊魂を一六 あがなひて陰府のちからより脱かれしめたまはん　セラ　一六 人のとみてその家のさかえくはゝらんとき汝おそるるなかれ　一七 かれの死るときは何一つたづさへゆくことあたはず その栄はこれにしたがひて下ることをせざれば なり　一八 かゝる人はいきながらふるほどに己がたましひを祝するともみづからを厚うするがゆゑに人々一九 なんぢをほむるとも　なんぢ列祖の世にゆかん かれらはたえて光をみざるべし　二〇 尊貴なかにありて暁らざる人はほろびうする獣のごとし

ヤ尼九・三一　詩九・一〇　ナ伯四、二一　詩三九・一九
六 耶三二・一八　詩四八・二　ケ申三三・二　詩八〇・二　フ利一〇・二　民一六　エ出二四・七
ヨ申三三・三　詩九七・六　タ申三三・三　詩一三　メ詩一一・一一　耶七・二二
ア詩九七・六　サ詩七五・七　キ詩八一・八　ユ出二〇・二　ミ何六・六

第五〇篇

アサフのうた

一 ぜんのうの神ヱホバ詔命して日のいづるところより日のいるところまであまねく地をよびたまへり　二 かみは美麗の極なるシオンより光をはなちたまへり　三 われらの神はきたりて默したまはじ火その前にものをやきつくし暴風その四周にふきあれん　四 神はその民をさばかんとて上なる天および地をよびたまへり　五 いはく祭物をもて我とけいやくをたてしわが聖徒をわがもとに集めよと　六 もろもろの天は神の義をあらはせり　セラ　七 わが民よきけ我ものいはん イスラエルよきけ我なんぢにむかひて證をなさん われは神なんぢの神なり　八 わがなんぢを責るは祭物のゆゑにあらず なんぢの燔祭はつねにわが前に

九 あり　九我はなんぢの家より牡牛をとらず　なんぢの牢より牡山羊をとらず
一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二
一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二

の千々の牲畜(イ)はみなわが有なり　二われは山のすべての鳥をしる　野のたけき獣はみなわが有なればなり
そのなかに充るものとはわが有なればなり　三われいかで牡牛の肉をくらひ牡山羊の
血をのまんや　一四感謝のそなへものを神にさゝげよ　なんぢのちかひを至上者につくのへ(ハ)
をよべ我なんぢを援けん而してなんぢ我をあがむべし(ニ)　一五然はあれど神あしきものに言給く　なんぢは教をにくみ　わが言をその後にすつるものなるに何のかゝはりありてわが律法をのべ　わがけいやくを口にとりしや
一八なんぢ盗人をみれば之をよしとし姦淫をおこなふものの伴侶となれり　一九なんぢその口を悪にわたす　なんぢの舌は詭計をくみなせり　二〇なんぢ坐りて兄弟をそしり己がはゝの子を誣のゝしれり　二一なんぢこれらの事をなしゝをわれ默しぬれば　なんぢ我をおのれに恰にたるものとおもへり　されど我なんぢを責めてその罪をなんぢの目前
につらぬべし　二二神をわするゝものよ今このことを念へ　おそらくは我なんぢを抓さかんとき助るものあら
じ　二三感謝のそなへものを獻るものは我をあがむ　おのれの行爲をつゝしむ者にはわれ神の
救をあらはさん

第五一篇

ダビデがバテセバにかよひしのち預言者ナタンの來れるときよみて伶長にうたはしめたる歌

一 あゝ神よわがはくはなんぢの仁慈によりておのれの不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ　二わが不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ　三われはわが愆尤のおぼきによりてわがもろもろの慾をけしたまへ　三われはわが愆尤のおぼきによりてわがもろもろの慾をけしたまへ　四我はなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし聖前にあしきことを行へり
しるわが罪はつねにわが前にあり

イ 米六・六　徒一七・八　何一四・二　來一三・二五
ロ 出一九・五　申一〇・一四　申二三・二一・二五　伯四一・一一　詩七六・二四　伯四一・一一　哥前二三・一　詩二四・一　傳五・四、五　詩一〇二・二六、二八
ハ 詩九一・一五、一〇七・六、一二、一九、二八　哥前一三・九　ニ 申二三・二一・二五　ホ 出一九・五　申一〇・一四　詩七六・二　ヘ 詩二二・二三、五〇・二三　ト 羅二・二一、二二
一一 ワ 羅二・四　カ 詩九〇・八　ヨ 伯八・二三　詩九・一七　賽五一・一三　タ 詩二七・六　羅一二・二　レ 加六・一六　ソ 詩五一・九　賽四三・二五、四四・二二　ツ 來九・一四　約壹一・九　ネ 詩三二・五、三八・七、九　默一・五　ナ 創二〇・六、三九・二　利五・一九、六・五　ル 詩五二・二　西二・一四　ヲ 傳八・一一、九　利五・一、一二　哥後一二・一三　ラ 羅三・四　ム 伯一四・四　詩五八・三　約三・六　羅五・一二　弗二・三　ウ 伯一四・四

第五一篇

エドム人ドエグ、サウルにきたりてダビデはアヒメレクの家にきぬと告しときダビデがよみて伶長にうたはしめたる教訓のうた

五　されば汝ものいふときは義とせられ　なんぢ鞫くときは咎めなしとせられ給ふ
六　罪にありてわが母われをはらみたりき　なんぢ眞實をこゝろの衷にまでのぞみ　わが隱れたるところに智慧をしらしめ給はん
七　なんぢヒソプをもて我をきよめたまへ　さらばわれ淨まらん　我をあらひたまへ　さらばわれ雪よりも白からん
八　なんぢ我によろこびと快樂とをきかせ　なんぢが碎きし骨をよろこばせたまへ
九　ねがはなんぢ我らの不義をけしたまへ　わがすべての罪よりそむけ
一〇　あゝ神よわがために清き心をつくり　わが衷になほき靈をあらたにおこしたまへ
一一　汝のきよき靈をわれより取りたまふなかれ
一二　なんぢの救のよろこびを我にかへし自由の靈をあたへて我をたもちたまへ
一三　さらばわれ愆をおかせる者になんぢの途をしへん罪人はなんぢに歸りきたるべし
一四　神よわが救のかみよ血をながしゝ罪よりわれを聖前より棄たまふなかれ　汝のきよき靈をわれより取りたまふなかれ
一五　主よわが口唇をひらきたまへ　然ばわが口なんぢの頌美をあらはさん
一六　なんぢは祭物をこのみたまはず　もし然らずば我これをさゝげん　なんぢは燔祭物をも悦びたまはず
一七　神のもとめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり　神よなんぢは碎けたる悔しこゝろを藐しめたまふまじ
一八　ねがはくは聖意にしたがひてシオンにさいはひし　エルサレムの石垣をきづきたまへ
一九　その時なんぢ義の祭と全きはんさいとを悦びたまはんかくて人々なんぢの祭壇に牡牛をさゝぐべし

一 猛者よなんぢ何ぞなればあしき企圖をもて自らほこるや神のあはれみは恒にたえざるなり(イ)

二 あしきことをはかり利き剃刀のごとくいつはりをおこなふ

三 なんぢは善よりも惡をこのみ正義をいふよりも

四 虚僞をいふをこのむ　セラ

五 たばかりの舌よなんぢはすべての物をくひほろぼす言をこのむ

六 たまはん　セラ　義者はこれを見ておそれ彼をわらひていはん

七 とこしへまでも汝をくだき　また汝をとらへてその幕屋よりぬきいだし生るものの地よりなんぢの根をたやし　セラ

八 なるをたのみ　その惡をもて己をかたくせんとする人をみよと

九 樹のごとし　我はいやとほながに神のあはれみに依頼まん

一〇 なんぢこの事をおこなひ給ひしによりて我とこしへになんぢの聖徒のまへにて聖名をまちのぞまん　こは宜しきことなればなり

第五三篇　マハラッ（樂器の名、あるひはいふ調べの名、あるひは名）にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの教訓のうた

一 愚かなるものは心のうちに神なしといへり　かれらは腐れたりかれらは憎むべき不義をおこなへり　善をおこなふ者なし

二 神は天より人の子をのぞみて悟るものと神をたづぬる者とありやなしやを見たまひしに

三 みな退ぞきてことごとく汚れたり　善をなすものなし一人だになし

四 不義をおこなふものは知覺なきかかれらは物くふごとくわが民をくらひ　また神をよばふことをせざるなり

五 かれらは懼るべきことのなきときに大におそれたり　神はなんぢにむかひて營をつらぬるものの骨をちらしたまへばなり　神かれらを棄たまひしによりて汝かれらを辱かしめたり

六 願くはシオンよりイスラエルの救のいでんことを　神その民のとらはれたるを返したまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂まん

イ 申前二二・七　詩五〇・一九　ロ 詩五七・四、五　ハ 詩五七・四、五九・　ニ 耶九・四、五　ホ 箴二・二二　ヘ 伯二二・一九　詩三七・三四、四〇・　ト 詩五八・一〇　三、六四・九　馬一　チ 詩四九・六　リ 耶一一・一六　何一四・六　ヌ 詩五四・六　ル 詩一〇・四、一四・一　ヲ 羅三・一〇　ワ 詩三三・一三　カ 代下一五・二、一九　タ 利二六・一七、三六・三　レ 結六・五　ヨ 耶四・二二　ソ 詩一四・七　ツ 詩五三・五　ネ 詩一四・六　ナ 詩一四・七　ラ 詩一四・四　ム 詩一四・二　ウ 詩一四・三　ヰ 詩一四・三　ノ 詩一四・四　オ 詩一四・五　ク 詩一四・六　ヤ 詩一四・七　マ 詩一四・八　ケ 詩一四・九　フ 詩一四・一〇　コ 詩一四・一一　エ 詩一四・一二　テ 詩一四・一三　ア 詩一四・一四　サ 詩一四・一五　キ 詩一四・一六　ユ 詩一四・一七　メ 詩一四・一八　ミ 詩一四・一九　シ 詩一四・二〇　ヱ 詩一四・二一　ヒ 詩一四・二二　モ 詩一四・二三　セ 詩一四・二四　ス 詩一四・二五

第五四篇

一 神よねがはくは
二 ジフ人のサウルにきたりてダビデはわれらの處にかくれをるにあらずやといひたれば
三 ダビデうたのかみに琴にてうたはしめたる教訓のうた
四 たまへ わが口のことばに耳をかたぶけたまへ
五 ひを保つものとともに在せり
六 よりて彼等をほろぼしたまへ
七 こは宜しきことなればなり
一 神よねがはくは汝の名によりて我をすくひ なんぢの力をもて我をさばきたまへ
二 神よわが祈をきゝ
三 そは外人はわれにさからひて起りたち強暴人はわがたましひを索むるなり かれらは神をおのが前におかざりき セラ
四 みよ神はわれをたすくるものなり 主はわがたましひを保つものともに在せり
五 主はわが仇にその惡しきことの報をなしたまはん 願くはなんぢの眞實にこれを滅ぼしたまへ
六 我よろこびて祭物をなんぢに獻ん ヱホバよ我なんぢの名にむかひて感謝せん
七 そはヱホバはすべての患難より我をすくひたまへり わが目はわが仇につきての願望をみたり

第五五篇

一 神よねがはくは耳をわが祈にかたぶけたまへ わが懇求をさけて身をかくしたまふなかれ
二 我にこたへたまへ われ歎息によりてやすからず悲みうめくなり
三 これ仇のこゑと惡きものの暴虐とのゆゑなり そはかれら不義をわれに負せ いきどほりて我におひせまるなり
四 わが心わがうちに憂ひ いたみ死のもろもろの恐懼わがうへにおちたり
五 おそれと戰慄とわれにのぞみ 甚だしき恐懼われをおほへり
六 われ云ねがはくは鴿のごとく羽翼のあらんことを さらば我とびさりて平安をえん
七 われ速かにのがれて野にすまん セラ
八 われ遠くさまよひ 荒野にやどらん
九 われ速かにのがれて暴風と狂風とをはなれん

ツ詩八六・一四 ラ詩五二・九
ネ詩一一八・七 ム詩五九・一〇、九二 ウ箴三八・一四 ノ詩一一六・三
ナ詩八九・四九 ヰ耶後一六・七、八、 オ耶六・七
一九・一九

一〇 をみたり 主よねがはくは彼等をほろぼしたまへ かれらの舌をわかれしめたまへ
二 うへをあるきて邑をめぐる 邑のうちには邪曲とあしき企圖とあり
三 欺詐とはその衢衢をはなるゝことなし 三 われを謗れるものは仇たりしものにあらず 若しかりしならば尚しの
一三 ばれしなるべし 我にむかひて己をたかくせし者はわれを恨みたりしならば身をかくし
一四 て彼をさけしなるべし 一三 されどこれ汝なり われとおなじきもの わが友われと親しきもの
一五 互にしたしき語らひをなし また會衆のなかに神の家にのぼりたりき 一五 死は忽然かれらにのぞみ
一六 その生るまゝにて陰府にくだらんことを そは惡事その住處にありその中にあればなり 一六 されど我はたゞ神を
一七 よばん エホバわれを救ひたまふべし 一七 夕にあしたに晝にわれなげき且かなしみうめかん エホバは我が聲をきゝ
一八 たまふべし 一八 エホバはわれを攻るもの多かりければなり 一九 太古よりいます者なる神はわが聲をきゝてかれらを惱めたまふべし セラ かれらに
一九 は變ることなく神をおそるゝことなし 二〇 かの人はおのれと睦みをりしものに手をのべてその契約をけがしたり
二〇 その口はなめらかにして乳酥のごとくなれどもその心はたゝかひなり その言はあぶらに勝りてやはらか
二一 なれどもぬきたる劍にことならず 二一 なんぢの荷をエホバにゆだねよさらば汝をさゝへたまはん たゞしき人の
二二 うごかさるゝことを常にゆるしたまふまじ 二二 かくて神よなんぢはかれらを亡の坑におとしいれたまはん たぐしき人の
二三 ながすものと詭計おほきものとは生ておのが日の半にもいたらざるべし 然はあれどわれは汝によりたのまん

イ 詩四一・九　耶九・四　三、九、三〇 撒前五　ヌ 詩二八・三、五七・一七
ロ 詩三五・二六、三八　ニ 詩四二・二　四、六二・四、六四・二　ホ 民一六・三〇
ハ 毎後一五・一二、一　ヘ 但六・一〇 路一八・六・一三 詩四一・九　ト 申三三・二七　チ 詩七・四　三 徴五・三、四、一二・一八　ル 詩三七・五　太六・二五　路一二・二二　一〇・二七　傳七・二〇・リ 徒一二・一　ヲ 詩三七・二四　ワ 詩五・六　カ 伯一五・三一　徴　彼前五・七　一七

ヨ詩五七・一　ソ詩一一八・六　賽　二一　ラ羅八・三一
タ詩五七・三　三一・三　來一三・六　ネ路七一・一〇　ム詩五六・四　牛伯三三・三〇
レ詩五六・一〇、一一　ツ詩五九・三、一四〇　ナ馬三・一八　ウ詩一一六・八

第五六篇

一 あゝ神よ　ダビデがガテにてペリシテ人にとらへられしとき詠て「遠きところにをる音をたてぬ鴿」の
二 わが仇ひねもす急喘てわれをのまんとす誇りたかぶりて我とたゝかふものおほし　三 われ
しらべにあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌
四 われ神によりてその聖言をほめまつらん　われ神に依頼みたればおそるゝことあらじ　肉體われ
五 かれらは終日わがことばを曲るなり　その思念はことごとくわれにわざはひをなす
六 かれらは群つどひて身をひそめ　わが歩に目をとめてわがたましひをうかゞひもとむ　七 かれら
は不義をもてのがれんとおもへり　神よねがはくは憤ほりてもろもろの民をたふしたまへ　八 汝わがあまたゝびの流離をかぞへたまへ　こは皆なんぢの革嚢にわが涙をたくはへたまへ　こは皆なんぢの冊にしるしあるにあらずや　九 わがよびもとむる日にはわが仇しりぞかん　われ神のわれを守りたまふことを知る　一〇 われ神によりてその聖言をほめまつらん　われ神によりてそのみことばを讃まつらん　一一 われ神によりたのみたればおそるゝことあらじ　人はわれに何をなしえんや　一二 神よわがなんぢにたてし誓はわれをまとへり　われ感謝のさゝげものを汝にさゝげん　一三 汝わが霊魂を死よりすくひたまへばなり　なんぢ我をたふさじとわが足をまもり生命の光のうちにて神のまへに我をあゆませ給ひしにあらずや

第五七篇

詩

一 我をあはれみたまへ神よわれをあはれみたまへ　わが靈魂はなんぢを避所とす　わが禍害のすぎさるまでは
(イ)つばさ　(ロ)

二 なんぢの翼のかげを避所とせん
(ハ)

三 我はいとたかき神によばはん　わがために百事をなしをへたまふ神によばはん
(ホ)かみ

四 その眞實をおくりたまはん　セラ　神はたすけを天よりおくりて我をのまんとする者のそしるときに我を救ひたまはん　セラ
(ヘ)

五 矢のごとくその舌はとき劍のごとき人の子のなかに我ふしぬ　わがたましひは群ねる獅のなかにあり　火のごとくもゆる者その齒は戈のごとく矢のごとくその舌はときつるぎのごとき人の子のなかに我ふしぬ　神よねがはくは
(チ)

六 みさかえを全地のうへに擧たまへ　かれらはわが足をとらへんとて網をまうくわが靈魂はうなたるかれらはわがまへに陷をほりたり而してみづからその中におちいれり　セラ
(ヌ)

七 定まれり　われ謳ひまつらん頌まつらん　わが心さだまれり神よわがこゝろ定まれり　われ謳ひまつらん頌まつらん　わが榮よさめよ　箏よ琴よさめよ　われ黎明をよびさまさん
(ル)

八 われもろもろの民のなかにてなんぢに感謝し　もろもろの國のなかにてなんぢに感謝し　もろもろの民のなかにてなんぢに感謝し　もろもろの國のなかにて汝をほめうたはん
(ヲ)

九 は大にして天にまでいたり　なんぢの眞實は雲にまでいたる　神よねがはくは自からを天よりも高くし　光榮を
(ワ)

一〇 あまねく地のうへに擧たまへ　主よ　セラ　そは汝のあはれみ
(カ)

第五八篇

一 ダビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムのうた

二 なんぢら默しゐて義をのべうるか　人の子よなんぢらなほき審判をおこなふや　否なんぢらは
(ヨ)

三 心のうちに惡事をおこなひ　その手の强暴をこの地にはかりいだすなり　あしきものは胎をはなるゝより背きとほざかり生れいづるより迷ひていつはりをいふ
(タ)

四 かれらの毒は蛇のどくのごとし　かれらは蠱術をおこなふ
(レ)

五 かれらの毒は蛇のどくのごとし　かれらは蠱術をおこなふ
(ソ)

イ詩五六・一　ロ寒二六・二〇　ハ詩一七・八、六三・七　ニ詩一三八・八　ホ詩一四四・五、七　ヘ詩五六・一　ト詩四〇・一二、四三・二、六一・七　チ箴三〇・一四　リ詩五五・二二、六四・三　ヌ詩五七・一一、一〇　ル詩七・一五、一六、九・一五　ヲ詩一〇八・一　ワ詩一六・九、一二、一〇八・四　カ詩一〇八・三　ヨ詩三六・五、七、一九、一〇三・一一、ソ詩五一・五　寒四八・八　タ詩五七・五　レ詩九四・二〇　寒一〇・一

ナ伯四・一〇 詩三・七　ム伯三・一六 傳六・三　一〇、一〇七・四二　ク詩六七・四、九六・　マ詩五六・六
ラ書七・五 詩一一二・　ウ敏一〇・二五　ノ詩六八・二三　・一三、九八・九　ケ毋前二四・一一
一〇　　キ詩五二・六、六四・　オ詩九二・一五　　ヤ詩一八・四八　フ詩三五・二三、四四　コ詩五九・一四
エ詩五七・四　敏一二　・二三
テ詩一〇・一一、一三、　ア毋前一九・一六　詩
六四・五、七三・一　二・四

六 ものの甚(いと)たくみにまじなふその聲(こゑ)をだにきかざる耳(み)ふさぐ聾(みし)ひの蝮(まむし)のごとし　六神(かみ)よ(ナ)

七 へ ヱホバよ壯獅(わかきし)、(ネ)の牙(きば)をぬきくだきたまへ　七願(ねがは)くはかれらを流(なが)れゆく水(みづ)のごとくに消(きえ)うせ

八 ときは折(を)られたるごとくなし給(たま)へ　八また融(とけ)てきえゆく蝸牛(かたつぶり)のごとく婦(をんな)(ム)のときならず産(うま)たる日(ひ)をみぬ嬰(こ)

九 ごとくならしめ給へ　九なんぢらの釜(かま)いまだ荊蘇(いばら)の火(ひ)をうけざるさきに靑(あを)きも燃(もえ)たるをもともに狂風(つむじ)(カ)にて吹(ふ)さり

一〇 たまはん　一〇たぎしきもの義者(にんじゃ)(井)は(ヒ)仇(あだ)の離(あた)かへさるゝを見(み)てよろこび その足(あし)(ツ)をあしきものの血(ち)のなかにてあらはん

一一 ニ かくて人(ひと)はいふべし實(げ)にたゞしきものに報賞(むくい)あり實(げ)に(ク)さばきをほどこしたまふ神(かみ)はましますなりと

第五九篇

サウル、ダビデを殺さんとし人をおくりてその家をうかゞはしめし時ダビデがよみて

「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長(うたのかみ)にうたはしめたるミクタム(ム)の歌

一 一 わが神(かみ)よねがはくは我(われ)(ヌ)をわが仇(あた)よりたすけいだし 二 邪曲(よこしま)をおこなふものより我(われ)をたすけいだし血(ち)をながす人(ひと)より我(われ)をすくひたまへ

二 三 れしめたまへ 二 邪曲(よこしま)をおこなふものより我(われ)をたすけいだし 三 視(み)よかれらは潛(ひそ)みかくれてわが靈魂(たましひ)をうかゞひ猛者(たけきもの)(マ)むれつどひて我(われ)をせむ ヱホバよ此(ここ)はわれに

三 四 は潛みかくれてわが靈魂をうかゞひ猛者むれつどひて我をせむ ヱホバよ此はわれに 四 かれら趨(はし)りまはりて過失(あやまち)なきに我(われ)をそこなはんとて備(そなへ)をなす ねがはくは

四 五 あるにあらず かれら趨りまはりて過失なきに我をそこなはんとて備をなす ねがはくは 五 なんぢヱホバ萬軍(ばんぐん)の神(かみ)イスラエルの神よ ねがはくは目(め)をさましてもろもろの國(くに)に

五 六 目をさまして見たまへ 五 なんぢヱホバ萬軍の神イスラエルの神よ ねがはくは目をさましてもろもろの國に 六 かれらは夕(ゆふべ)にかへりきたり犬(いぬ)のごとくほえて

六 七 のぞみたまへ あしき罪人(つみびと)にあはれみを加(くは)へたまふなかれ セラ 六 かれらは夕にかへりきたり犬のごとくほえて 七 かれらは口(くち)より惡(あく)をはく そのくちびる(エ)に劍(つるぎ)あり かれらおもへらく誰(たれ)(テ)ありてこの言(こと)をきかん

七 八 邑(まち)をへありく 七 視よかれらは口より惡をはく そのくちびるに劍あり かれらおもへらく誰ありてこの言をきか 八 われ汝(なんぢ)をまちまん

八 九 んやと 八 されどヱホバよ汝(なんぢ)(テ)はかれらをわらひ もろもろの國(くに)をあざわらひたまはん 九 わが力(ちから)よ われ汝(なんぢ)をまち

一〇 のぞまん 神はわがたかき櫓なり
一一 見させたまはん 願くはかれらを殺したまふなかれ わが民つひに忘れやはせん 主われらの盾よ 大能をもてかれらを散し また卑したまへ
一二 かれらがくちびるの言はその口のつみなり かれらは詛と虚偽とをいひいづるによりてその傲慢のために
一三 とらへられしめたまへ 憤恚をもてかれらをほろぼしたまへ ヤコブのなかに神いまして統治めたまふことを かれらに知しめて地の極まで
一四 ことなきまでに彼等をほろぼしたまへ セラ
一五 かれらは夕にかへりきたり 犬のごとくほえて邑をへありくべし
一六 かれらはゆきゝして食物をあさり もし飽ことなくば終夜ながらふるあげてなんぢの憐憫をうたひまつらん なんぢわが避所となりたまひたればなり
一七 わがちからよ我なんぢにむかひて頌辭をうたひまつらん 神はわがたかき櫓たまふ神なればなり

ダビデ、ナハライムのアラムおよびゾバのアラムとたゝかひをりしがヨアブかへりゆき鹽谷にてエドム人一萬二千をころしゝとき教訓をなさんとてダビデがよみて「證詞の百合花」といふ調に

第六〇篇

一 神よなんぢわれらを棄われらをちらし給へり ねがはくは再びわれらを歸したまへ
二 なんぢ國をふるはせてこれを裂たまへり ねがはくはその多くの隙をおぎなひたまへ そは國ゆりうごく
三 なり
四 なんぢはその民にたへがたきことをしめし 人をよろめかする酒をわれらに飲しめ給へり
五 なんぢは憤ほりたまへり ねがはくは再びわれらを歸したまへ
六 なんぢはその多くの隙をおぎなひたまへ そは國ゆりうごくなり
七 なんぢはその民にたへがたきことをしめし 人をよろめかする酒をわれらに飲しめ給へり
八 なんぢはその民にたへがたきことをしめし 人をよろめかする酒をわれらに飲しめ給へり

イ 詩五九・一七、六二・八　ロ 詩二一・三　ハ 詩五四・七、一一二・八　ニ 創四・一二、一五　ホ 詩七・九　ヘ 詩七九・九　ト 詩八三・一八　チ 詩五九・六　リ 伯一五・二三　ヌ 詩一八・一　ル 詩五九・九、一〇　ヲ 詩四四・九　ワ 代下七・一四　カ 詩七一・二〇　ヨ 賽五一・一七、二二　タ 詩二〇・五　レ 詩一〇八・六　ソ 詩八九・三五　耶二五・一五

眞理のために擧しめんとて汝をおそるゝものに一つの旗をあたへたまへり セラ
もて救をほどこし われらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ
へり われ甚くよろこばん われシケムをわかちスコテの谷をはからん
なり エフライムも亦わが首のまもりなり ユダはわが杖
ペリシテよわが故によりて聲をあげよと たれかわれを堅固なる邑にすゝましめん
エドムにゆきたるか 神よなんぢはわれらを棄たまひしにあらずや 神よなんぢはわれらの軍とともにいでゆきたまはず ねがはくは助をわれらに與へたまへ
らは神によりて勇しくはたらかん われらの敵をふみたまふものは神なればなり

第六一篇

琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 あゝ神よねがはくはわが祈にみこゝろをとめたまへ わが心くづほるるとき地のはてより汝をよばん なんぢ我をみちびきてわれよりたかき磐にのぼらせたまへ
三 ぢはわが避所われを仇よりのがれしむる堅固なる櫓なればなり
四 われ永遠になんぢの帷幄にすまはん我なんぢの翼の下にのがれん セラ
五 神よなんぢはわがもろもろの誓をきゝ名をおそるゝものにたまふ嗣業をわれにあたへたまへり
六 なんぢは王の生命をのばし その年を幾代にもいたらせたまはん
七 王はとこしへに神のうたひて日ごとにわがもろもろの誓をつくのひ果さん

ツ創一二・六 ラ申三三・一七
ネ書一・六 ム創四九・一〇
ナ書一三・二七 ウ母後八・二

キ母後八・一四 詩 オ詩四四・九、六〇・一、一〇八・九
ノ母後八・一 ク書七・一二
ヤ詩一一八・八、一四 ケ書六三・三
マ民二四・一八 代上 フ歴一八・一〇
コ詩二七・四 エ詩一七・八、五七・一、九一・四 テ詩二一・四 ア詩四〇・一一 歴 二〇・二八

第六二篇

一 わがたましひは默してたゞ神をまつ　わがすくひは神よりいづるなり
二 すくひなれ　またわが高き櫓にしあれば我いたくは動かされじ
三 なんぢらは何のときまで人におしせまるや　なんぢらみな傾ける籬のごとく　倒るる石垣のごとく　搖ぎうごけるなんとするか
四 かれらは人をたふさんとのみ謀り　いつはりをよろこび　またその口にてはいはひその心にてはのろふ　セラ
五 わがたましひよ默してたゞ神をまて　そはわがのぞみは神よりいづ
六 神こそはわが磐わがすくひなれ　又わが櫓にしあれば我はうごかされじ
七 わが救とわが榮とは神にあり　わがちからの磐わがさけどころは神にあり
八 民よいかなる時にも神によりたのめ　その前になんぢらの心をそゝぎいだせ　神はわれらの避所なり　セラ
九 實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり　すべてかれらを權衡におかば上にあがりて虛しきものよりも輕きなり
一〇 暴虐をもて恃とするなかれ　掠奪ふをもてほこるなかれ　富のますともこれに心をとめざれ
一一 かくるなかれ　ちからは神にあり　神ひとたび之をのたまへり　われ二次これをきけり
一二 亦なんぢにあり　なんぢは人おのおのの作にしたがひて報をなしたまへばなり

第六三篇

ユダの野にありしときに詠るダビデのうた

一 あゝ神よなんぢはわが神なり　われ切になんぢを戀したふ　わが靈魂はなんぢをたづねもとむ　水なき燥きおとろへたる地にあるごとくわが肉體はなんぢを戀したふ
二 曩にも我かくのごとく大權と榮光とをなんぢのぞみ　わが靈魂はかわきて汝をのぞみ

イ 詩三三・二〇　ヌ 詩三九・五、一一　寒四〇・一五、一七　ヨ 默一九・一　ロ 詩六二・六　ハ 詩三七・二四　ニ 寒三〇・一三　ホ 詩二八・三　ヘ 詩二六・一、二　ト 耶三・二三　チ 哥前一・一五　リ 詩一八・二　ル 伯三一・二五　詩四二・四　哀二・一九　ヲ 默一九・一　ワ 伯三三・一四　カ 詩八六・一五、一〇　詩三・四　五二・七　路一二・　タ 詩四二・二、八四・三　但九・九　レ 哥前四・二一　代上一六・二一　詩二七・一四　ソ 伯三四・一一　徴三・八　哥後五・一〇　弗六・八　酉三・二五　彼前一・一七　默二二・二二　ツ 伯三三・二〇　太一六・二七　羅二・六　哥前三・八　酉一四三・六　ネ 詩二・一四、七八・六一

三 みんことをねがひ聖所にありて目をなんぢより離れしめざりき
四 口唇はなんぢを讃まつらん　四斯われはわが生るあひだ汝を
五 六 て汝をおもひいで夜の更るまゝになんぢを深くおもはん
七 をえ　わが口はよろこびの口唇をもてなんぢを讃たゝへん
八 九 翼のかげに入てよろこびたのしまん　八わがたましひは
一〇 わがたましひを滅さんとて尋ねもとむるものは地のふかきところとなるべし　二しかれども王は神をよろこばん
一一 いふものの口はふさがるべければなり

第六四篇

一 神よわがなげくときわが聲をきゝたまへ　わが生命をまもりて仇のおそれより脱かれしめたまへ
二 ねがはくは汝われをかくして惡をなすものの陰かなる謀略よりまぬかれしめ不義をおこなふものの喧嘩より
三 かくれしめ給へ　三かれらは劍のごとくおのが舌をとぎ
四 隠れたるところにて全者を射んとす俄かにこれを射て
五 おそるゝことなし　五また彼此にあしき企圖をはげまし
六 共にはかりてひそかに羂をまうく斯ていふ誰かわれらを見んと　六かれらはさまざまの不義をたづねいだして
七 云われらは懇ろになしたづね終れりと　おのおのの衷のおもひと心とはふかし　七然はあれど神は矢にてかれらを射
八 たまふべし　かれらは俄かに傷をうけん　八斯てかれらの舌は其身にさからふがゆゑに遂にかれらは躓かん　これ

九 を見るものみな逃れさるべし
一〇 を考ふべし　一〇義者は(イ)ヱホバをよろこびて之によりたのまん　すべて心のなほきものは皆ほこることを得ん(ロ)

第六五篇

一 伶長にうたはしめたる歌　ダビデの讃美なり
二 あゝ神よさんびはシオンにて汝をまつ　人はみまへにて誓をはたさん(ハ)
三 諸人こぞりて汝にきたらん(ニ)　三不義のことば我にかてりたなんぢ我儕のもろもろの愆をきよめたまはん(ホ)
四 えらばれ汝にちかづけられて大庭にすまふ者はさいはひなり　われらはなんぢの家なんぢの宮のきよき處のめぐみにて飽ことをえん(ヘ)
五 われらが救のかみよ　地と海とのもろもろの極なるきはめて遠ものの恃とするなんぢは(ト)
六 かみは大能をおび　その權力によりてもろもろの山をかたくたゝしめ(チ)
七 海のひゞき狂瀾のひゞき　もろもろの民のかしがましきを鎭めたまへり(リ)
八 されば極遠にすめる人々もなんぢのくさぐさの豫兆をみておそるなんぢ朝夕のいづる處をよろこびて謳はしめたまふ(ヌ)
九 なんぢ地にのぞみて灌そぎおほいに之をゆたかにしたまへり　神のかはに水みちたり　なんぢ如此そなへをなして穀物をかれらにあたへたまへり(ル)
一〇 なんぢ畦をおほいにうるほし畝をたひらにし白雨にてこれをやはらかにし　その萌芽るを祝したまへり(ヲ)
一一 また恩惠をもて年の冕弁としたまへり　なんぢの途には膏したゝれり
一二 野の牧場をうるほし小山はみな歡びにかこまる
一三 牧場はみな羊のむれを衣もろもろの谷は穀物におほはれたり　かれらは皆よろこびてよばはりまた謳ふ

イ 詩四〇・三　ロ 耶五〇・二八、五一　ハ 詩三八・四、一一　ニ 賽六六・二三　ホ 詩三八・四、四〇・一一〇　ヘ 詩五一・二、七九・一一、五八・七　來九・四　ト 詩四・三　チ 詩三三・一二、八四・九　リ 詩三六・八　ヌ 詩三二・二七　ル 詩九三・一　ヲ 詩八九・九、一〇七・二九　太八・二六　ワ 詩七六・一〇　寒・二四　約卷一・七、一七・二二、一三　カ 申一一・一二　ヨ 詩六八・九、一〇四・一三　耶五　タ 詩四六・四　レ 賽五五・一二　ソ 詩一〇〇・一　ツ 詩六五・五　ネ 詩一八・四四　ナ 詩二二・二七、六七

第六六篇

全地よ神にむかひて歡びよばはれ 二
その名の榮光をうたへ その頌美をさかえしめよ 三
神はその大能をもてとこしへに統治め その目は諸國をみたまふ そむく者みづから高ぶる聲をきこえしめよ 九
神よなんぢはわれらを試錬たまひたればなり
われらの腰におもき荷をおきわれらは火のなか水のなかをすぎゆけり されど汝その中よりわれらをひきいだし豐盛なる處にいたらしめたまへり 一二
われ燔祭をもてなんぢの家にゆかん 迫りくるしみたるときにわが口唇のいひいでわが口ののべし誓をなんぢに償はん 一五
われ肥たる牲畜を燔祭とし牡羊を馨香として汝にさゝげ牡牛と牡山羊とをそなへまつらん セラ 一六
神をおそるゝ人よ みな來りてきけ われ神のわがために作たまへることをのべん 一七
われわが口をもて神によばはり また舌をもてあがむ 一八
然るにわが心にしれる不義あらば主はわれにきゝたまふまじ 一九
されどまことに神はきゝたまへり 聖意をわがいのりの聲にとめたまへり 二〇
神はほむべきかな わが祈をしりぞけず その憐憫をわれよりとりのぞきたまはざりき 二〇

詩篇 六六・一―二〇

一二三四五六七八九一〇一一一二一三一四一五一六一七一八一九二〇

三、一一七・一
ラ詩九六・一、二
ム詩四六・八

ウ出一四・二一
キ書三・一四・一六
ノ詩一一・四

オ詩一二一・三
ク詩一七・三 賽四八 一・六、七 哀一、一三
・一〇

ヤ亞一三・九 彼前 ケ賽五一・二三
フ賽四三・二一 九 六・一四、一七一
コ詩一〇〇・四、一一 エ傳五・四

テ詩三四・一一 一・一五 約九・三一
ア伯二七・九 徴一五 雅四・三
・二九・二八・九 賽 サ詩一一六・一、二

第六七篇

一 ねがはくは神われらをあはれみ われらをさきはひてその聖顔をわれらのうへに照したまはん セラ

二 ことを セラ 琴にあはせて伶長にうたはしめたる歌なり 讃美なり

三 かみよ庶民はなんぢの途のあまねく地にしられ なんぢの救のもろもろの國のうちに知れんがためなり

四 此はなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたゝへん

五 うたふべし なんぢは直をもて庶民をさばき 地のうへなるもろもろの國はたのしみ又よろこびたみらはなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたゝへん セラ

六 地は産物をいだせり 神わが神はわれらを

七 福ひたまはん 神われらをさきはひたまふべし かくて地のもろもろの極ことごとく神をおそれん

第六八篇

一 ねがはくは神おきたまへ その仇はことごとくちり神をにくむものは前よりにげさらんことを

二 烟のおひやらるゝごとくかれらを驅逐たまへ 惡きものは火のまへに蠟のとくるごとくに

三 べし されど義きものには歡喜あり かれら神の前にてよろこびをどれ

四 神のみまへにうたへ その名をほめたゝへよ 乘て野をすぐる者のために大道をきづけ かれの名をヤハとよぶ その前によろこびをどれ

五 きよき住居にまします神はみなしごの父やもめの審士なり

六 をらしめ囚人をときて福祉にみちびきたまふ されど悖逆者はうるほひなき地にすめり

七 にさきだちいでて野をすゝみゆきたまひき セラ 神よなんぢは民のとき地ふるひ天かみのみまへに漏る シナイの山すら神

八 その

イ 民六・二五　詩四八路二・三〇・三一　參ヘ 利二六・四　詩八五リ 箴九・一八　何一三ヲ 詩六六・四
六八、三一・一六、二・一一　二詩六六・四　ワ 出六・三
八〇・三、七、一九、一一九・一三五　ホ 詩九六・一〇、一三、　チ 民一〇・三五　箴　カ 詩一〇・一四、一八、
ロ 徒一八・二五　三三・三　ト 詩二二・二七　ヌ 詩九七・五　米一・四　一四六・九
ル 詩三二・一一、五八　ヨ 撒前二・五　詩一一
・一〇、六四・一〇　レ 詩一〇七・三四、
タ 詩一〇七・一〇、一　三・九
四、一四六・七　徒　一二・六、七
ソ 出一三・二一　士四　一、三
・二四　哈三・一三
ツ 出一九・一六、一八　士五・四　箴六四・

九 イスラエルの神の前にふるひうごけり　神よなんぢの嗣業の地のつかれおとろへたる
一〇 て之をかたくしたまへり　一〇曩になんぢの公會はその中にとどまれり　神よなんぢは惠をもて貧きもののために
一一 預備をなしたまひき　一一主みことばを賜ふ　その佳音をのぶる婦女はおほくして群をなせり　二
一二 の王たちはにげさる　逃去りたれば家なる婦女はその掠物をわかつ　一三なんぢら羊の牢のうちにふすときは鴿の
一四 つばさの白銀におほはれその毛の黃金におほはるゝがごとくなりき　一四全能者かしこにて列王をちらし給へるときはサ
一五 ルモンの山に雪ふりたるがごとくなりき　一五バシャンのやまは神の山なりバシャンのやまは峰かさなれる山なり
一六 峰かさなれるもろもろの山よ　なんぢら何なれば神のねたみ見るや　然れヱホバはこの山にとこしへに
一七 永遠にこの山にすみたまはん　一七神の戰車はよろづづに萬をかさね千にちぢをくはふ　主その中にいませり　聖所
一八 にいますがごとくシナイの山にいましゝがごとし　一八なんぢ高處にのぼり虜者をとりこにしてひきゐ禮物を人の
一九 なかよりも叛逆者のなかよりも受たまへりヤハの神こゝに住たまはんが爲なり　一九日々にわれらの荷を
二〇 おひたまふ主われらの救ひなる神はほむべきかな　セラ　二〇神はしばしばわれらを助けたまへる神なり　死より
二一 のがれうるは主ヱホバに由る　二一神はその仇のかうべを擊やぶりたまはん　愆のなかにとゞまるものの髮おほき
二二 顱頂をうちやぶりたまはん　二二主いへらく我バシャンより歸らん　二三斯てなんぢの足をそのあたの血にひたし之をなんぢの犬の舌になめしめん　二四神よすべての人は
二三 なんぢの進行きたまふをみたり　わが神わが王の聖所にすゝみゆきたまふを見たり　二五謳うつ童女のなかに

ネ申一一・一一、一二　書一〇・一六、一七　但七・一三
結三四・二六　ナ申二六・五、九　詩ム詩一〇五・三七　ウ民二一・三　ラ民三一・八、九、五四　ノ申三三・二　王下六・一二、一三　ク士五・一一　ヤ詩七八・六〇　マ申三二・三九　詩四上九・三　ケ詩一一〇・六　哈三・一三　フ詩五五・二三　コ民二一・二三　エ出一四・二二　テ詩五八・一〇　ア王上二一・一九　サ代上一三・八、一五　詩四七・五

二六 ありて謳ふものは前にゆき琴ひくものは後にしたがへり　二六 なんぢらすべての會にて神をほめよ　イスラエルの
二七 みなもとより出るなんぢらよ　主をほめまつれ　二七 彼處にかれらを統るとしわかきベニヤミンあり　ユダの諸侯と
二八 その群衆とありまたゼブルンのきみたちナフタリの諸侯あり　二八 なんぢの神はなんぢの力をたてたまへり
二九 神よなんぢ我儕のためになしたまひし事をかたくしたまへ　二九 エルサレムなるなんぢの宮のために列王なんぢに
三〇 禮物をさゝげん　三〇 ねがはくは葦間の獸むらがれる牯犢のごときもろもろの民をいましめてかれらに白銀を
たづさへきたりみづから服ふことを爲しめたまへ　神はたゝかひを好むもろもろの民をちらしたまへり
三一 諸侯はエジプトよりきたりエテオピアはあわたゞしく神にむかひて手をのべん　三一 地のもろもろのくによ
三二 神のまへにうたへセラ　三二 上古よりの天の天にのりたまふ者にむかひてうたへ　みよ主はみこゑ
三三 を發したまふ勢力ある聲をいだしたまふ　三三 なんぢらちからを神に歸せよ　その稜威はイスラエルの上に
三四 とゞまりその大能は雲のなかにあり　三四 神のおそるべき狀はきよき所よりあらはる　イスラエルの神はその民に
三五 ちからと勢力とをあたへたまふ　神はほむべきかな

第六九篇

ダビデのうた

一 神よねがはくは我をすくひたまへ　大水なんぢの靈魂にまでおよべり
二 われ深き泥の中にしづめり　われ立止なきふかき水におちいる　おほみづわが上をあふれすぐ
三 われ呼はりてつかれたり　わが喉はかわき　わが目はわが神をまちわびておとろへぬ
四 故なくしてわれをにくむ者わがかしらの毛よりおほし　われを滅さんとする者強くしてわが敵となり

イ申三三・二八　寒一五・二五
ロ詩前九・二一　寒六〇　チ詩七二・九　寒四五　代下三二　ヘ詩前八・二、六　ト寒一九・一九、二一　リ詩四四・二〇　ヌ詩一八・一〇、六八　ル詩二九・三　ヲ詩二九・一
四、二五　詩七二・一〇、七六・一一　・四、一〇四・三　ワ詩四五・四、六五・五、六六・五、七六　カ詩六九・二、一四、一五　サ詩四〇・二　タ詩六・六　レ詩一一九・八二、一二三　寒三八・一四　ソ詩三五・一九　約一五・二五　ツ詩三一・一一　寒五三・三　約一一、七・五
・一一　・二六、一二七　ホ詩三二・一二　ニ王上一〇・一〇、一二　ヨ詩四〇・二　・一二　・一二　・一

の髪よりもおほく謂なくして わが仇となり我をほろぼさんとするものの勢力つよし われ掠めざりしものをもつくのはせらる　五 神よなんぢはわが愚なるをしりたまふ わがもろもろの罪はなんぢにかくれざるなり　六 エホバ主よ ねがはくは汝をまちのぞむ者をわが故によりて恥をおはしめらるゝことなからしめたまへ イスラエルの神よねがはくはなんぢを求むる者をわが故によりて辱かしめらるゝことなからしめたまへ　七 われわが兄弟には旅人のごとく わが母の子には外人のごとくなれり　八 そはなんぢの家をおもふ熱心われをくらひ汝をそしるものの謗われにおよべり　九 われ食をたち わが霊魂をなげかすれば反てこれによりて謗をうく　一〇 われ麁布をころもとなしゝにかれらが諺語となりぬ　一一 門にすわる者はわがうへをかたる われは酔狂たるものに謳ひはやされたり　一二 われは恵のときに汝にいのる ねがはくは神よなんぢの憐憫のおほきによりて汝のすくひの眞實をもて我にこたへたまへ ねがはくは泥のなかより我をたすけいだしてしづまざらしめたまへ 我をにくむものより深水よりたすけいだしたまへ　一三 大水われを淹ふことなく淵われをのむことなく坑その口をわがうへに閉ることなからしめたまへ　一四 エホバよねがはくは我にこたへたまへ なんぢの仁慈うるはしければなり なんぢの憐憫のおほきによりてわれに面をむけたまへ　一五 面をなんぢの僕にかくしたまふなかれ われ迫りくるしめりねがはくは速かに我にこたへたまへ　一六 わが仇のゆゑに我をすくひたまへ　一七 汝はわがうくる譏謗わが心をくだきぬれば我いたくわづらへり わが敵はみな汝のみまへにあり　一八 わがたましひに近くよりて之をあがなひ わが仇のゆゑに我をすくひたまへ　一九 汝はわがうくる譏謗わが心をくだきぬれば我いたくわづらへり われ憐憫をあたふる者をまちたれど一人だになく 慰むるものを俟たれど一人をもみざりき　二〇 かれらは

二三 苦草をわがくひものにあたへ わが渇けるときに醋をのませたり
二四 そのたのむ安逸はつひに網となれ
二五 はなんぢの忿恚をかれらのうへにそゝぎ汝のいかりの猛烈をかれらに追及せたまへ
二六 せよ その幕屋に人をすまはするなかれ
二七 ものの痛をかたりふるればなり ねがはくはかれらの不義に不義をくはへてなんぢの義にあづからせ給ふ
二八 なかれ かれらを生命の冊よりけして義きものとともに記さるゝことなからしめたまへ
二九 み且うれひあり 神よねがはくはなんぢの救われを高處におかんことを
三〇 感謝をもて神をあがめまつらん
三一 はん 謙遜者はこれを見てよろこべり 神をしたふ者よなんぢらの心はいくべし
三二 をきゝ その俘囚をかろしめたまはざればなり 天地はヱホバをほめ蒼海とその中にうごくあらゆるものとはをほめまつるべし
三三 ヱホバを讃まつるべし 神はシオンをすくひユダのもろもろの邑を建たまふべければなり かれらは其處にすみ且これをおのが有とせん
三四 その僕のするも亦これを嗣その名をいつくしむ者その中にすまん

第七〇篇

一 神よねがはくは我をすくひたまへ ヱホバよ速きたりて我をたすけたまへ
二 わが靈魂をたづぬるものの恥あわてんことを わが害はるゝをよろこぶものの後にしりぞきて恥をおはんことを
三 あゝ視よや

イ 太二七・三四、四八　可一五・二三　約一九・二九
ロ 羅一一・九、一〇　哥後三・一〇　約一一・一〇　一四
ハ 賽六・九、一〇　約ホ 太二三・三八　徒一・二八
ニ 撒前二・一六　三・一三　ヲ詩五〇・一三、一四、二三
ホ 太二三・三九　ヘ 賽五三・四　ト 代下二八・九　啞一・二五
チ 羅一・二八　リ 賽二六・一〇　ヌ 出三二・三二　三三・五、八
ル 結一三・九　路一〇・二〇　ヲ 詩三四・二　二〇　來一二・二三　ヨ 詩二二・二六　タ 弗三・一
レ 詩九六・一一、一四　ソ 賽五五・一二　ツ 詩五一・一八　寨　ラ 詩三五・四、二六、七一・一三
ム 詩四〇・一五　ナ 詩四〇・一三、七一・一二

四 視よやといふものの おのが恥によりて後にしりぞかんことを
五 樂みよろこばんことを なんぢの救をしたふものの つねに神は大なるかなと となへんことを

一 二 第七一篇 ヱホバよ我なんぢに依頼む ねがはくは何の日までも恥うくることなからしめ給へ
二 義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへ なんぢの耳をわれに傾けて我をすくひたまへ
三 がはくは汝わがすまひの磐となりたまへ われ恒にそのところに往ことを得ん なんぢ我をすくはんとて勅命をいだしたまへり そは汝はわが磐わが城なり
四 わが神よあしきものの手より不義殘忍なる人のてより 我をまぬかれしめたまへ
五 主ヱホバよ なんぢはわが望なり わが幼少よりの恃なり
六 われ胎をはなるゝより汝にまもられ母の腹にありしときより汝をほめたゝへん
七 我おほくの人にあやしまるゝごとき者となれり 然どなんぢはわが堅固なる避所なり
八 なんぢの頌辭となんぢの頌美とは終日わが口にみちん
九 わが年老ぬるとき我をすてたまふなかれ わが力おとろふるとき我をはなれたまふなかれ
一〇 わが敵はわがことを論らひ わが靈魂をうかゞふ者はたがひに議ていふ
一一 神かれを離れたり彼をたすけよ 追てとらへよ 救ふものなければなり
一二 神よわれに遠ざかりたまふなかれ わが神よ速に來りて我をたすけたまへ
一三 わがたましひの敵ははぢ且おとろへ 我をそこなはんとするものは謗と辱とにおほはれよ
一四 されど我はたえず望をいだきていやますます汝をほめたゝへん
一五 わが口はひねもす汝の義となんぢの救とをかたらん わが

ウ詩四〇・一七 キ詩一四一・一 ノ詩二五・二、三、三一 オ詩三一・一 ク詩一七・六 ヤ詩三一、二、三 マ詩四四・四 ケ詩一四〇・一、四 フ耶一七・七、一七 コ詩二二・九、一〇 寒 ア詩七一・一八 サ再後一七・一 太 ユ詩七〇・一 エ寒八・一八 亞三・八 キ詩二二・一一、一九、 メ詩三五・四、二六、 シ詩四〇・五、一三九 哥前四・九 テ詩三五・二八 四六・三 二七・一 四〇・一四、七〇・ 二、七一・二四 三五・二二、三八・ 二、七、一八

一六 なり　一六 われは主エホバの大能の事跡をたづさへゆかん
一七 われを幼少より教へたまへり　われ今にいたるまで汝の
一八 われ老て頭髪しろくなるとも我がなんぢの力を次代にの
一九 宣傳ふるまで我をはなれ給ふなかれ　一九 神よなんぢの義もまた甚たかし　なんぢは大
二〇 神よたれか汝にひとしき者あらんや　二〇 汝われらを多のおもき苦難にあはせたまへり
二一 われらを地の深所よりあげたまはん　二一 ねがはくは我をいよいよ大ならしめ歸りきたりて我をなぐさめ給へ
二二 わが神よさらばわれ等をもて汝をほめ　なんぢの眞實をほめたゝへん　イスラエルの聖者よわれ琴をもて
二三 なんぢを讃うたはん　二三 われ聖前にうたふときわが口唇よろこびなんぢの贖ひたまへるわが靈魂おほいに喜ばん
二四 わが舌もまた終日なんぢの義をかたらん　われを害はんとするもの愧惶つればなり

第七二篇

ソロモンのうた

一 神よねがはくは汝のもろもろの審判を王にあたへ　なんぢの義をわうの子にあたへたまへ　二 かれは義をもてなんぢの民をさばき公平をもて苦しむものを鞫かん　三 義により山と岡とは民に平康をあたふべし　四 かれは民のくるしむ者のために審判をなし乏しきものの子輩をすくひ虐ぐるものを壞きたまはん　五 かれらは日と月とのあらんかぎり世々おしなべて汝をおそるべし　六 かれは刈とれる牧にふる雨のごとく地をうるほす白雨のごとくのぞまん　七 かれの世にたゞしき者はさかえ平和は月のうするまで豐かならん　八 またその政治は

イ詩七一・九　ロ詩五七・一〇　ハ詩三五・一〇、八六・八、八九・六、八　ニ詩六〇・三　ホ何六・一、二　ヘ詩九二・一―三、一〇五・三　ト王下一九・二二　チ詩一〇三・四　リ詩七一・八、一五　ヌ詩七一・一三　ル箴一一・二―四、三　ヲ詩八五・一〇　箴三二・一七、五二・七　ワ箴一一・四　カ詩七二・七、一七、八九・三六、三七　ヨ拂後二三・四　何六・三　タ箴二・四　但二・四四　路一・三三　レ出二三・三一　王上四・二一、二四　詩二・八、八〇・一一、八九・二五　歷九・一〇　ソ詩七四・一四　ツ箴四九・二三　米七・一七　ネ代下九・二一　詩四五・一二、六八・二九　箴四九・七、六〇・六、九　ナ箴四九・二一、二三

海より海にいたり河より地のはてにおよぶべし
シシおよび島々の王たちは貢ををさめシバとセバの王たちは禮物をさゝげん
俯伏しもろもろの國はかれにつかへん　二
弱きものと乏しき者とをあはれみ乏しきものの靈魂をすくひ　一四
あがなひたまふ　その血はみまへに貴かるべし　一五
恒にいのり終日かれをいはゝん　國のうち五穀ゆたかにしてその實はレバノンのごとく山のいたゞきにそよぎ
邑の人々は地の草のごとく榮ゆべし　一七
人はかれによりて福祉をえん　もろもろの國はかれをさいはひなる者ととなへん
のみ奇しき事跡をなしたまへり　神エホバはほむべきかな　二〇
榮光にて滿べし　アーメン　アーメン
ダビデの祈はをはりぬ

第七三篇　アサフのうた

神はイスラエルにむかひ心のきよきものに對ひてまことに恵あり
つまづくばかり　わが歩すべるばかりにてありき　三
かれらは死るに苦しみなくそのちからは反てかたし　四
患難にあふことなし　五
かれら肥ふとりてその目とびいで心の欲にまさりて物をうるなり　七
傲慢は粧飾のごとくその頸をめぐり　強暴はころもの
また嘲笑をなし惡をもて暴虐のことばを

九 いだし高ぶりてものいふ　九 その口を天におき その舌を地にあまねく往しむ　一〇 このゆゑにかれの民はこゝに
一一 かへり水のみちたる杯をしぼりいだして　二 いへらく 神いかで知たまはんや 至上者に知識あらんやと　三 視よ
一二 かれらは悪きものなるに常にやすらかにしてその富ましくはゝれり　一三 誠に我はいたづらに心をきよめ罪をかさずして手をあらひたりけしなり　一四 そはわれ終日なやみにあひ朝ごとに責をうけしなり　一五 われもし斯ることを述んとせば
一六 いひしならば我なんぢが子輩の代をあやまらせしならん　一七 われこれらの道理をしらんとして思ひめぐらしゝに
一八 わが眼いたく痛たり　一九 われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふかく思へるまでは然りき　二〇 誠になんぢはかれらを滑かなるところにおき かれらを滅亡におとしいれ給ふ　二一 かれらは瞬間にやぶれたるかな 彼等は恐怖をもてことごとく滅びたり　二二 主よなんぢ目をさましてかれらが像をかろしめたまはん ときは夢みし人の目さめたるがごとし　二三 わが心はうれへ わが腎はさゝれたり
二四 かりき　二三 されど我つねになんぢとともにあり 汝わが右手をたもちたまへり　二五 汝のほかに我たれをか天にもたん 地にはなんぢのみちびき後またわれをうけて栄光のうちに入たまはん　二六 わが身とわが心とはおとろふ されど神はわがこゝろの磐わがとこしへの嗣業なり
二七 他にわが慕ふものなし　二七 視よなんぢに遠きものは滅びん 汝をはなれて姦淫をおこなふ者はみなほろぼしたまひたり
二八 神にちかづき奉るは我によきことなり われは主エホバを避所としてそのもろもろの事跡をのべつたへん

第七四篇

アサフの教訓のうた

イ 彼後二・一八　錯 二詩七三・三　ロ 詩七五・八　ハ 伯二一・一五、三四　ニ 馬 一六　ホ 伯二一・九、三五・三　ヘ 伯二三・一三　詩 三・一四　ト 傳八・一七　チ 詩七七・一三　リ 詩三七・三八　ヌ 詩三五・六　ル 詩七八・六五　ヲ 伯二〇・八　詩九〇・五　ワ 詩七三・三　カ 詩九二・六　錯三〇　レ 詩八四・二、一一九　ソ 詩一六・五、一一九　ナ 來一〇・二二　ラ 詩一〇七・二三、一一八・一七

ム詩四四・九、二三、六〇・一、一〇、七七・七　耶三一・三七、三三・二四　ウ詩九五・七、一〇〇・二六　オ哀二・七　ク何六・二七　ヤ王上六・一八、二九、三二、三三五　マ王下二五・九　ケ詩八九・三九　フ詩八三・四　コ毋創三・一　エ哀二・三　テ詩四四・四　ア出一四・二一　サ蓼五一・九、一〇結　二九・三、三二・二　キ詩七二・九　ユ民一四・九　メ出一七・五、六　民二〇・一一詩一〇五・四一　蓼四八・二一　シ創一・一四　ヱ徒一七・二六　ヒ創八・二二　モ詩七四・二三　歎一六・一九　ス歌二・一四　イ詩六八・一〇　セ詩三九・八

一　神よいかなれば汝われらをかぎりなく棄たまひしや　奈何ばなんぢの怒（ム）煙羊の群にむかひて發（ホ）るや

二　ねがはくは往昔（ヘ）なんぢが買求めたまへる公會（ワ）ゆづりの支派となさんとて贖ひたまへるものを思ひいでたまへ　又なんぢが住たまふシオンの山をおもひいで給へ（ノ）

三　とこしへの滅亡（チ）の跡にみあしを向たまへ　仇は聖所にてもろもろの惡きわざをおこなへり

四　なんぢの敵はなんぢの集會のなかに吼たけびおのが旗をたてて誌（カ）とせり

五　かれらは林のしげみにて斧をあぐる人の狀にみゆ

六　いま鉞と鎚とをもて聖所のなかなる彫刻（ヨ）めるものをことごとく毀ちおとせり

七　かれら聖所に火をかけ名の居所をけがして地におとしたり

八　かれら心のうちに謂ふ　われらはなんぢの聖會堂をやきつくせり　國内なる神のもろもろの會堂をことごとく誌（ラ）はみえず預言者も今はなし　斯ていくその時をかふべき　われらのいふ　われらことごとく之を知るものなし

九　神よ敵はいくその時をかふべき　われらのうちに知るものなし

一〇　神よ敵はいくその時をかふべき　仇はなんぢの名をとこしへに汚すならんか　二　いかなれば汝そのみ手をひきたまふや　ねがはくは手をふところよりいだしてかれらを滅したまへ

一一　神はいにしへよりわが王なり　すくひを世の中におこなひたまへり

一二　なんぢその力をもて海をわかち水のなかなる龍の首をくだき　一三　鰐のかうべをうちくだき野の民にあたへて食となしたまへり

一四　なんぢは泉と水流とをひらき　又もろもろの大河をからしたまへり　一五　晝はなんぢのもの夜も又汝のものなり　なんぢは光と日とをそなへ

一六　あまねく地のもろもろの界をたて夏と冬とをつくりたまへり　一八　ヱホバよ仇はなんぢをそしり愚かなる民はなんぢの名をけがせりこの事をおもひいでたまへ　一九　願くはなんぢの鴿のたましひを野のあらき獸にわたしたまふなかれ　苦しむものの命を

二〇 とこしへに忘れたまふなかれ 二〇契約をかへりみたまへ 地
二一 のくらきところは強暴の宅にて充たればなり 二一
二二 がはくは虐げらるゝものを慚退かしめ給ふなかれ 悩る
二三 ものと苦しむものとに聖名をほめたゝへしめたまへ
二三 神よおきてなんぢの訟をあげつらひ愚かなるものの終日
敵の聲をわすれたまふなかれ 汝にさからひて起りたつ者の
(イ)(ロ)
なんぢを誹るをみこゝろに記たまへ 二三 なんぢの
(ハ)
かしがましき聲はたえずあがれり

第七五篇

一 神よわれら汝にかんしやす われら感謝す
なんぢの名はちかく坐せばなり もろもろの人はなん
二 ぢの奇しき事跡をかたりあへり 二定りたる期いたらば我
三 地とすべての之にすむものと
消去しとき我そのもろもろの柱をたてたり セラ
四 われ誇れるものに誇りかにおこなふなかれといひ 悪きもの
に角をあぐるなかれといへり 五なんぢらの角をたかく擧るなかれ頸をかたくしてたかく
(ニ)
擧ることなかれ 六たゞ神のみ審士にましませば此をさげ彼を
は東よりにあらず 西よりにあらず また南よりにもあらざるなり
(ホ)
あげたまふ 八エホバの手にさかづきありて酒あわだてり その中にものまじりてみつ 神これをそゝぎいだせり
(ヘ)
誠にその滓は地のすべてのあしき者しぼりて飲むべし
九 されど我はヤコブの神をのべつたへん とこしへに
(ト)
讃うたはん 一〇われ悪きものゝすべての角をきりはなたん 義きものゝ角はあげらるべし
(チ)

第七六篇

一 神はユダにしられたまへり その名はイスラエルに大なり 二
その居所はシオンにあり 三彼所にてかれは弓の火矢をを
(リ)
り盾と剣と戦陣とをやぶりたまひき セラ 四なんぢ
琴にあはせて伶長にうたはしめたるアサフの歌なり 讃美なり

イ創一七・七、八 利 三三・二一 ホ申前二・七 但二・六〇・三 ヘ詩一七・二一 二詩七四・一八、八九 ト詩四八・一―三 チ詩七三・一〇 リ詩一〇一・八 ヌ詩八九・一七、一四 ル詩四八・一四 ヲ詩四六・九 結三九・九 ワ詩五〇・六、 五八・一一 カ伯二一・二〇 詩一〇六・四五 耶二五・一五 默一四・一〇、一六・一九

榮光あり掠めうばふ山よりもたふとし　五 心のつよきものは掠めらる　かれらは睡にしづみ勇ましきものは皆
六 その手を見うしなへり　六 ヤコブの神よなんぢの叱咤により　深睡につけり　七 神よなんぢ天より宣告をのりたまへり
七 ぢこそ懼るべきものなれ　一たび怒りたまふときは誰かみまへに立えんや　八 なんぢ地よりくだる者をみなすくはんとて神のさばきに立たまへるとき
八 地のへりくだる者をみなすくはんとて神のさばきに立たまへるとき　九 地はおそれて默したり　セラ　一〇 實に人の
九 いかりは汝をほむべし　怒のあまりは汝おのれの帶とし　一〇 實に人の
一〇 絕たまはん　ヱホバは地の王たちのおそるべき者なり
一一 そのまはりなるすべての者はおそるべきヱホバに禮物をさゝぐべし　一一 なんぢの神ヱホバにちかひをたてて償へ
一二 ヱホバはもろもろの諸侯のたましひをたつとぶアサフのうた

第七七篇

エドトンの體にしたがひて伶長にうたはしめたるアサフのうた

一 我われ聲を神にあげて呼ばはん　我われ聲を神にあげて呼ばはん　神われに耳をかたぶけたまはん
二 わがなやみの日にわれ主をたづねまつれり　夜わが手をのべてゆるむることなかりき　わがたましひは慰められ
三 るをいなみたり　三 われ神をおもひいでて打なやむ　われ思ひなげきてわが靈魂おとろへぬ　セラ
四 わが眼をさゝへて閉がしめたまはず　我はものいふこと能はぬほどに惱みたり　四 なんぢは
五 年をおもへり　六 われ夜わが歌をおもひいづ　我わが心にてふかくおもひ　わが靈はのこりなく永遠にさり　そのちかひは
六 七 主はとこしへに棄たまふや　再びめぐみを垂たまはざるや　八 その憐憫はのこりなく永遠にさり　そのちかひは
七 八 世々ながく廢れたるや　九 神は恩をほどこすことを忘れたまふや　怒をもてその憐みを縅たまふや　セラ

ワ結三八・一二、一三、タ出一五・一、二　ラ傳五・四—六　ム代下三二・二二、二三　詩一四五・一三　ソ結三八・二〇　ツ詩九・七—九、七三
ネ代下二〇・二九、三〇　ナ出九・一六、一八・　ヰ詩三・四　ノ詩五〇・一五　オ賽二六・九、一六　ク詩一四二・三、一四　ヤ詩三八・二九、三九
カ賽四六・一二　レ歌一・六　ヨ詩一三・三　耶五一　ソ結三八・二〇　ツ詩九・七—九、七三　ネ代下二〇・二九、三〇　ナ出九・一六、一八・　ヰ詩三・四　ノ詩五〇・一五　オ賽二六・九、一六　ク詩一四二・三、一四　ヤ詩三八・二九、三九
ワ結三八・一二、一三、タ出一五・一、二　ラ傳五・四—六　ム代下三二・二二、二三　詩一四五・一三　ソ結三八・二〇　ツ詩九・七—九、七三　ネ代下二〇・二九、三〇　ナ出九・一六、一八・　ヰ詩三・四　ノ詩五〇・一五　オ賽二六・九、一六　ク詩一四二・三、一四　ヤ詩三八・二九、三九
カ賽四六・一二　レ歌一・六　ヨ詩一三・三　耶五一　ソ結三八・二〇　ツ詩九・七—九、七三　ネ代下二〇・二九、三〇　ナ出九・一六、一八・　ヰ詩三・四　ノ詩五〇・一五　オ賽二六・九、一六　ク詩一四二・三、一四　ヤ詩三八・二九、三九
ワ結三八・一二、一三、タ出一五・一、二　ラ傳五・四—六　ム代下三二・二二、二三　詩一四五・一三　ソ結三八・二〇　ツ詩九・七—九、七三　ネ代下二〇・二九、三〇　ナ出九・一六、一八・　ヰ詩三・四　ノ詩五〇・一五　オ賽二六・九、一六　ク詩一四二・三、一四　ヤ詩三八・二九、三九
カ賽四六・一二　レ歌一・六　ヨ詩一三・三　耶五一　ソ結三八・二〇　ツ詩九・七—九、七三　ネ代下二〇・二九、三〇　ナ出九・一六、一八・　ヰ詩三・四　ノ詩五〇・一五　オ賽二六・九、一六　ク詩一四二・三、一四　ヤ詩三八・二九、三九

一〇 斯るときに我いへらく此はたゞわが弱きがゆゑのみ
(イ)
一一 われヤハの作爲をのべとなへん われ往古よりありし汝がくすしきみわざを思ひいで
(ロ)
一二 すべての作爲をおもひいで汝のなしたまへることを深くおもはん
一三 神よなんぢの途はいときよし 神のごとく大なる神はたれぞや
(ハ)
一四 なんぢは奇きみわざをなしたまへる神なり もろもろの民のあひだにその大能をしめし
(ニ)
一五 その臂をもてヤコブ、ヨセフの子輩なんぢの民をあがなひたまへり セラ
(ホ)
一六 なんぢ水よ汝をみて汝をみてをの〳〵きふるへり 淵もまたふるへり
一七 雲はみづをそゝぎいだし 空はひゞきをいだし なんぢの矢はなんぢの雷鳴のこゑは暴風のうちにありき 電光は世をてらし地はふるひうごけり
(ヘ)
一八 はしりいでたり
(ト)
一九 なんぢの大道は海のなかにあり なんぢの徑はおほみづの中にあり なんぢの蹤跡はたづねがたかりき
(チ)
二〇 民をモーセとアロンとの手によりて羊の群のごとくみちびきたまへり

第七八篇

アサフの教訓のうた

一 わが民よわが教訓をきゝ わが口のことばになんぢらの耳をかたぶけよ
(ヌ)
二 譬喩をまうけ いにしへの玄幽なる語をかたりいでん
三 是われらが曩にきゝしところ知しところ又われらが
(ヨ)
四 列祖のかたりつたへし所なり われら之をその子孫にかくさずヱホバのもろもろの頌美と能力とそのなしたまへる奇しき事跡とをきたらんとする世につげん
(タ)
五 そはヱホバ證詞をヤコブのうちにたて律法をイスラエルのうちに定めてその子孫にしらすべきことをわれらの列祖におほせたまひたればなり
(ソ)
六 これ來らんとする代のちに

イ詩三一・二三　ロ詩一四三・五　ハ詩七三・一七　ニ出一五・一一　ホ出六・六　申九・二九　ヘ出一四・二一、一五、一六　詩一一・一　ト詩七七・一九　チ詩九七・四　リ申後二二・八　ヌ哈三・一五　ル出一四・二八　ヲ出一三・二一、一四・二　ワ箴五一・四　カ詩四九・四　太一三　レ出一二・二六、二七、一三・八、一四　書　ネ詩一〇二・一八　ヨ詩四四・一　タ申四・九、六・七　耳　ソ詩一四七・一九　ツ申四・九、六・七、一一・二　一九　詩七八・五二、八〇・一　箴六三・一一、一二　何一二　申後二二・一五　哈　ル出一四・二八　ヲ箴五一・四

ナ王下一七・一四　結　詩六八・六
二〇・一八　ム代下二〇・三
ラ出三二・九、三三・　七八・三七
三、三四・九　申九・　ウ王下一七・一
六、一三、三一・二七　キ詩一〇六・一
ノ出七・一二・　ク出一四・二一
三九　ヤ出一五・八　詩三三
ケ出一七・六　民二〇　コ申九・二三　詩九五
・二一　詩一〇五・　・八　來三・一六
四一　哥前一〇・四　エ出一六・二
フ申九・二一　詩一〇　テ民一一・四
五・四一　ア出一七・六　民二〇
メ出一六・四、一四　詩
一〇五・四〇　約六
・三一　哥前一〇・三

七　生る子孫がこれを知みづから起りてそのまた子孫につたへ
八　ずその誠命をまもらしめん爲なり　八　またその列祖のごとく頑固にしてそむくものの類となりらず　そのたましひ神に忠ならざる類とならざらん爲なり　エフライムのこらは武具と弓をたづさへしに戰ひの日にうしろをそむけたり　一〇　かれら神のちかひをまもらずそのおきてを履ことをいなみ
一一　なしたまへることとかれらに示したまへる奇しき事跡とをわすれたり　一二　神はエジプトの國にてゾアンの野にて
一三　妙なる事をかれらの列祖のまへになしたまへり　一三　すなはち海をさきてかれらを過ぎしめ水をつみて堆かくし
一四　たまへり　一四　ひるは雲をもてかれらをみちびき夜はよもすがら火の光をもてこれを導きたまへり
一五　一六　にて磐をさき大なる淵より汲がごとくにかれらに飲しめ
一七　たまへり　一七　然るにかれら尙たえまなく罪ををかして神にそむき
一八　ために食をもとめてその心のうちに神をこゝろみたり
一九　一九　然のみならずかれらは神にさからひていへり　神は
二〇　荒野にて筵をまうけたまふを得んや　二〇　みよ神いはを擊たまへば水ほどばしりいで流あぶれたり　糧をもあたへ
二一　たまふを得んや神はその民のために肉をそなへたまはんやと　二一　この故にヱホバこれを聞ていきどほりたまひ
二二　火はヤコブにむかひてもえあがり怒はイスラエルにむかひて立騰れり　二二　こはかれら神を信ぜずその救にたのま
二三　ざりし故なり　二三　されどなほ神はうへなる雲に命じて天の戸をひらき
二四　二四　彼等のうへにマナをふらせて食はしめ
二五　天の穀物をあたへたまへり　二五　人みな勇士の糧をくらへ　神はかれらに食物をおくりて飽足らしめたまふ

二六 神は天に東風をふかせ 大能もて南の風をみちびきたまへり
二七 (イ)海の沙のごとく翼ある鳥をふらせて
二八 その營のなかその住所のまはりに落したまへり
二九 飽たりぬ 神はこれにその欲みしものを與へたまへり
三〇 かれらが未だその慾をはなれず食物のなほ口のうちに
三一 あるほどに 神のいかり既かれらに對ひてたちのぼり
彼等のうちにて最もこえたる者をころしイスラエルの
三二 これらの事ありしかど彼等はなほ罪をかしてその奇しきみわざを信ぜざり
三三 わかき男をうちたふしたまへり
三四 しかば 神かれらを殺したまへるに
三五 かくて神はおのれの磐いとたかき神はおのれの
三六 時かれら神をたづね歸りきたりて懇ろに神をもとめたり
三七 然はあれど彼等はたゞその口をもて神にへつらひ
その舌をもて神にいつはりをいひたりしのみ
三八 そはかれらのこゝろは神にむかひて堅からず その契約をまもるに忠信ならざりき
三九 贖主なることをおもひいでたり 又かれがたゞ肉にして過去ばふたゝび歸りこぬ風なるをおもひいで給へり
四〇 くは忿恚をふりおこし給はざりき
四一 かれらは野にて神にそむき荒野にて神をうれへしめしこと幾次ぞや
四二 イスラエルの聖者をはづかしめたり
四三 かれらは神の手をも敵より贖ひたまひし日をもおもひいでざりき
四四 神はそのもろもろの豫兆をエジプトにあらはしその奇しき事をゾアンの野にあらはし
四五 また蠅の群をおくりてかれらをくはしめ蛙をおくりてかれらを亡させ
かはらせてその流を飲あたはざらしめ

イ民一一・三一　ロ民一一・二〇　ハ民一一・三三　ニ民一四・一六、一七、　ホ詩七八・二二　ヘ民一四・二九、三五、　ト何五・一五　チ申三二・四、一五、　リ出一五・一三　申七・二六　ヌ結三三・三一　ル詩七八・八　ヲ民一四・一八、二〇　ワ賽四八・九　カ王上二一・二九　ヨ創六・三　約三・六　タ詩一〇三・一四、一六　レ詩七八・一七、九五　ソ民一四・二二　申六・九、一〇　賽七・二六　ツ詩七八・二〇　弗四・三〇　來三・一三　ネ詩七八・一二、一〇　五・三一　ナ出七・二〇　詩一〇五・二七　ラ出八・二四　詩一〇五・二九　ム出八・六　詩一〇五・三〇　ウ出一〇・一三、一五

詩一〇五・三四、三五　詩一〇五・三二　ヤ詩七七・二〇　コ詩四四・三
キ出九・二三、二五　詩一〇五・三三、一〇六・二　マ出一四・一九、二〇　エ詩四四・二
ノ出九・二三―二五　ク詩一〇六・二二　ケ出一四・二七、二八、一五・一〇　テ書一三・七、一九・五一　詩一三六・二〇
フ出一五・一七　ユ申一二・二、四　王上　ミ母前四・一一　耶七　ヒ耶七・三四、一六・　ア士二・一一、一二　サ詩七八・四一　結二　メ申三二・一六、二一　ヒ耶七・三四、一六・　ア士二・一一、一二、一四、二六・　サ詩七八・四一　結二　メ申三二・一六、二一　士二・一二、二〇　結　シ士一八・三〇　エ母前四・一〇　セ伯二七・一五　結二　ヒ耶七・三四、一六・　ア士二・一一、一二、一四、二六・　サ詩七八・四一　結二　メ申三二・一六、二一　士二・一二、二〇　結　シ士一八・三〇　エ母前四・一〇　セ伯二七・一五　結二　ヒ耶七・三四、一六・　ア士二・一一、一二、一四、二六・　サ詩七八・四一　結二　メ申三二・一六、二一　士二・一二、二〇　結　シ士一八・三〇　エ母前四・一〇　セ伯二七・一五　結二　ヒ耶七・三四、一六・

四六 四七　たまへり　四六神はかれらの田産を蝥賊にわたし　かれら
四八　の葡萄の樹をからし霜をもてかれらの桑の樹をからし
四九　四九　かれらの上にはげしき怒といきどほりと怨恨となや
五〇　みと禍害のつかひの群とをなげいだし給へり　五〇神は
五一　その怒をもらす道をまうけ　かれらのたましひを死よりま
五二　ぬかれしめず　そのいのちを疫癘にわたし　五一エジプト
五三　にてすべての初子をうちかれらの力の始をうちたまへり　五二
五三　引いだし　かれらを曠野にてけだものの群のごとくにみちびき
五四　給へり　されど海はかれらの仇をおほへり　五四神はその聖所
五五　携へたまへり　五五又かれらの前にてもろもろの國人をおもひいだし準繩をもちゐ
五六　イスラエルの族をかれらの幕屋にすまはせたまへり　五六然はあれど彼等はいとたかき神をこゝろみ之にそむきて
五七　そのもろもろの證詞をまもらず　五七叛きしりぞきてその列祖の如く眞實をうしなひ
五八　へりて逸ゆけり　五八高處をまうけて神のいきどほりをひき刻める像にて神の嫉妬をおこしたり
五九　ひて甚だしくいかり大にイスラエルを憎みたまひしかば　五九神きゝたまひ
六〇　棄さり　六一その力をとりことならしめ　その榮光を敵の手にわたし
六一　甚だしく怒りたまへり　六二火はかれらのわかき男をやきつくし　かれらの處女はその婚姻の歌によりて譽らるゝ
六二　ことなく　六四かれらの祭司はつるぎにて仆れ　かれらの寡婦は喪のなげきだにせざりき　六五斯るときに主は

六六 ねぶりし者のさめしごとく勇士の酒によりてさけぶがごとく目さめたまひて
六七 六八 へのほをかれらに負せとこしへの辱をかれらに負せたまへり
六七 またヨセフの幕屋をいなみエフライムの族をえらばず
六八 ユダの族その聖所を山のごとく永遠にさだめたまへる地のごとくに立
六九 いつくしみたまふシオンの山をえらびたまへり
七〇 七一 またその僕ダビデをえらびて羊の牢のなかよりとり
七一 七二 乳をあたふる牝羊にしたがひゆく勤のうちより携へきたりてその民ヤコブその嗣業イスラエルを牧はせたまへり
七二 七三 斯てダビデはそのこゝろの完全にしたがひてかれらを牧ひ その手のたくみをもて之をみちびけり

第七九篇

アサフのうた

一 あゝ神よ もろもろの異邦人はなんぢの嗣業の地ををかし なんぢの聖宮をけがしエルサレムを
二 こぼちて礫堆となし
三 その血をエルサレムのめぐりに水のごとく流したり されど之をはうむる人なし
四 われらは隣人にあたへ
五 そしられ四周のひとびとに侮られ嘲けらるゝものとなれり
六 エホバよ斯て幾何時をへたまふや 汝とこしへに怒たまふや なんぢのねたみは火のごとく燃るか
七 願くはなんぢを識ざることくにびと聖名をよばざるもろもろの國のうへに烈怒をそゝぎたまへ
八 かれらはヤコブを呑その住處をあらしたればなり
九 われらにむかひて先祖のよこしまなるわざを記念したまふなかれ願くはなんぢの憐憫をもて速かにわれらを迎へたまへ われらは貶されて甚だしく卑くなりたればなり
一〇 われらの救の神よ名のえいくわうのために我儕をたすけ名のために

イ 詩四四・二三　ロ 賽四二・二三　ハ 出前五・六、一二、六・四　ニ 詩八七・二　ホ 王上六・一一、一二　ヘ 出前一六・一一、一二　ト 創三三・一三　賽四〇・一一　チ 出後五・二　一一・二二　リ 王上九・四　ヌ 出一五・一七　詩七四・二一　ル 詩七四・七　ヲ 王下二五・九、一〇　代下三六・一九　米　ワ 耶七・三三、一六・　ヨ 詩四四・二三、八〇　レ 番一・一八、三・八　カ 詩一四一・七　耶一四・七、一六・四　默一一・九　タ 詩七四・一、九、一〇、八五・五、八九・四六　ソ 賽四五・四、五　撒後一・八　ツ 詩五三・四　ネ 耶一〇・二五　默　ナ 賽六四・九　ラ 申二八・四三　詩一四二・六　ム 代下一四・一一　ウ 耶一四・七、二二　ヰ 詩八七・二　ノ 出一五・一七　オ 出三二・一二　ク 詩七九・一〇　ヤ 出三二・一二　マ 詩七九・一〇　ケ 詩七九・一〇　フ 詩七九・一〇　コ 詩七九・一〇　エ 詩七九・一〇

一〇 にわれらを救ひ われらの罪をのぞきたまへ 一〇 いかなれば異邦人はいふ かれらの神はいづくにありやと 願くは
一一 はなんぢの僕等がながされし血の報をわれらの目前になして 一一 ねがはくは汝のみまへに
一二 にとらはれびとの嘆息のとゞかんことを なんぢの大なる能力により死にさだめられし者をまもりて存へしめ
一三 たまへ 一二 主よわれらの隣人のなんぢをそしりたる謗を七倍ましてその懐にむくいかへしたまへ 一三 然ばわれら
なんぢの民なんぢの草苑のひつじは 永遠になんぢに感謝しその頌辭を世々あらはさん

第八〇篇

一 アサフの歌 一 イスラエルの牧者よひつじの群のごとくヨセフを導きたまふものよ 耳をかたぶけたまへ ケルビ
二 ムのうへに坐したまふものよ 光をはなちたまへ 二 エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんぢの力をふりおこし來りてわれらを救ひたまへ 三 神よふたゝびわれらを復し なんぢの聖顔のひかりをてらしたまへ 然ばわれ
三 ら救をえん
四 四 ばんぐんの神ヱホバよなんぢその民の祈にむかひて何のときまで怒りたまふや 五 汝わ
五 になみだの糧をくらはせ涙を量器にみちみつるほどあたへて飲しめ給へり 六 汝かれら
六 種料となしたまふ われらの仇はたがひにあざわらへり 七 萬軍の神よふたゝびわれらを復したまへ 汝のみかほ
七 の光をてらしたまへ さらばわれら救をえん 八 汝そのまへに地をきよめ 八 なんぢ葡萄の樹をエジプトより携へ
八 おひしりぞけて之をうゑたまへり 九 なんぢ 九 萬軍の神よふたゝびわれらを復したまへ 汝のみかほ
一〇 影はもろもろの山をおほひ そのえだは神の香柏のごとくにてありき 一〇 その樹はえだを海にまでのべ その若枝

申詩四二・一〇、一一　五・二一　ノ詩一〇二・二〇　オ詩七四・一八、九五・六、七、一〇〇・三　ク創四・一五　マ賽四三・二一　ヤ詩七四・一、九五・七、一〇〇・三　ケ詩七七・二〇　フ出二五・二〇、二二　コ申三三・二　詩五〇　ア民六・二五　詩四・二、九四・一　ハ路六・三八　エ民二・一八―二三　詩八〇・七、一九哀四・二一　詩九九・一　賽六五　マ賽四三・二一　サ詩四二・三、一〇二　メ賽五・一、七　耶二・九　賽三〇・二〇　キ詩四四・一三、七九　ユ詩八〇・三、一九　シ出二三・二八　誓　ミ詩四四・二、七八・五五　ヱ詩七二・八

を河にまでのべたり　一三 汝いかなればその垣をくづして路ゆくすべての人に摘取らせたまふや　一三 はやしの猪は
これをあらし野のあらき獣はこれをくらふ　一四 萬軍の神よねがはくは歸りたまへ
樹をかへりみ　一五 なんぢが右の手にてうゑたまへるもの自己のために強くなしたまへる
その樹は火にて燒れまた斫たふさるかれらは聖顏のいかりにて亡ぶ　一七 ねがはくはなんぢの手をその右の
手の人のうへにおきなんぢの自己のために強くなしたまへる人の子のうへにおきたまへ　一八 さらばわれら汝をしりぞき
離るゝことなからん　願くはわれらを活したまへ　一九 あゝ萬軍の神ヱホバよふたゝび我儕を
かへしたまへ　なんぢの聖顏のひかりを照したまへ　然ばわれら救をえん

第八一篇

ギテトの琴にあはせて伶長にうたはしめたるアサフのうた

一 われらの力なる神をよばれらの力なる神にむかひて高らかにうたひヤコブの神にむかひてよろこびの聲をあげよ
二 歌をうたひ鼓とよき音のことと箏とをもちきたれ　三 新月と滿月とわれらの節會の日とにラッパをふきならせ
四 これイスラエルの律法ヤコブのかみの格なり　五 神さきにエジプトを攻たまひしときヨセフのなかに之をたて
て證となしたまへり 我かしこにて未だしらざりし方言をきけり　六 われかれの肩より重荷をのぞき かれの手を
籃よりまぬかれしめたり　七 汝なやめるとき呼しかば我なんぢをすくへり われ雷鳴のかくれたるところにて汝
にこたへメリバの水のほとりにて汝をこゝろみたり　セラ　八 わが民よきけ我なんぢに證せん イスラエルよ汝が
われに從はんことをもとむ　九 汝のうちに他神あるべからず なんぢ他神ををがむべからず　一〇 われはエジプト
の國よりなんぢを携へいでたる汝の神ヱホバなり なんぢの口をひろくあけよ われ物をみたしめん　一一 されど

イ詩八九・四〇、四一　ハ詩三九・一一、七六　ホ詩八〇・三、七　ヘ利二三・二四　民一〇・二七　ト詩一一四・一　チ賽九・四、一〇　リ出一・一四
ロ賽六三・一五　ニ詩八九・二一　ヌ出二・二三、一四・一　ル出一九・一九　ヲ出一七・六、七　民二〇・一三　ワ詩五〇・七
ヽ詩五〇・一七　ヽ出二〇・三、五　カ出二〇・三、五　ヨ申三二・一二　タ出二〇・二　レ詩三七・三、四　約四三・一二　一五・七

一三 わが民はわが聲にしたがはず イスラエルは我をこのまず
一三 彼等がその任意にゆくにまかせたり
一四 さらば我すみやかにかれらの仇をしたがへ わが手をかれらの敵にむけん
一五 かれらに從ひ かれらの時はとこしへにつゞかん
一六 神はむぎの最嘉をもてかれらをやしなひ 磐よりいでたる
蜜をもて汝をあかしむべし

第八二篇 一

アサフのうた

一 かみは神のつどひの中にたちたまふ 神はもろもろの神のなかに審判をなしたまふ
二 いつまで汝らは不義をなし あしきものの身をかたよりみて幾何時をへんとするや セラ
三 よわきものと孤兒とのために公平をほどこせ 四 弱きものと貧しきものとのためにさばき苦しむものと乏しきものとのとをすくひ彼等をあしきものの手よりたすけいだせ 五 かれらは知ることなく悟ることなくして暗中をゆきめぐりぬ 地のもろもろの基はうごきたり
六 我いへらく なんぢらは神なり なんぢらはみな至上者の子なりと 七 然どなんぢらは人のごとくに死もろもろの侯のなかの一人のごとく仆れん
八 神よおきて全地をさばきたまへ 汝もろもろの國を嗣たまふべければなり

第八三篇 一

アサフの歌なり 讃美なり

一 神よもだしたまふなかれ 神よものいはで寂靜たまふなかれ 二 視よなんぢの仇はかしがましき

ソ徒七・四二、一四・一 ネ詩一八・四五 羅一・八 ノ耶三二・三 ハ羅一・二四、二六 ウ出二一・六、二二・二一 オ伯二九・一 ク申五・二九・一〇・一 ヤ申三二・一三、二一 ケ伯二一・三一 詩二八・一、三五・二 コ詩二八・一、三四・二、一三、三二・二九 サ申一・一七 代下 シ米三・一 ス伯二九・六 セ申一・二七 代下 タ米七・二、七 チ詩二八・一、一〇九・一 ツ申五・二九・一〇・一 テ伯二一・三一 詩 ト出三二・九、二八 詩 ナ申三二・一三、二四・一二 ニ詩二八・一、三五・二 ヌ伯二九・六 ヒ詩一一・三、七五・三 フ出二一・一 約一〇・ ヘ詩一八・五 ホ詩一一・三、四九・一二 結三一 マ出三二・九、二八 詩 ミ伯二九・一 ム代下一九・六 メ詩一一・三 モ徒四・二五

三 聲をあげ汝をにくむものは首をあげたり (イ)
四 汝のかくれたる者にむかふ かれらはたくみなる謀略をもてなんぢの民にむかひ相共にはかりて
五 スラエルの名をふたゝび人にしられざらしめんと (ロ)
六 七 なんぢに逆ふ 六 こはエドムの幕屋にすめる人イシマエル人 モアブ、ハガル人 七 ゲバル、アンモン、アマレク、
八 ペリシテおよびツロの民などなり 八 アッスリヤも亦かれらにくみせり 斯てロトの子輩の
九 なんぢ曩にミデアンになしたまへる如くキションの河にてシセラとヤビンとに作たまへるごとく (ハ)
一〇 一一 たまへ 一〇 かれらはエンドルにてほろび地のために肥料となれり (ニ)
一二 そのもろもろの侯をゼバ、ザルムンナのごとくなしたまへ (ホ)
一三 一四 一三 べしと 一三 わが神よかれらをまきあげらるる塵のごとく風のまへの藁のごとくならしめたまへ (ヘ)
一五 一四 ごとく山をもやす焔のごとく 一五 なんぢの暴風をもてかれらを (ト)
一六 一七 一六 かれらの面に恥をみたしめたまへ (チ) 一七 かれらはいへり われら神の草苑をえてわが有とすと
一八 れしめ惶てまどひて亡びうせしめたまへ 一八 然ばかれらはエホバてふ名をもちたまふ汝のみ全地をしろしめす
至上者なることを知るべし (リ)

第八四篇

ギテテの琴にあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 萬軍のエホバよなんぢの帷幄はいかに愛すべきかな
二 わが靈魂はたえいるばかりにエホバの大庭をしたひ わが心わが身はいける神にむかひて呼ふ
三 誠やすゞめは窩をえ燕子はその雛をいるる巣をえたり

イ 詩八一・一五　ハ 船三・六、九　耶一一・一一　ニ 詩三七・五、三一・三六　ホ 民三一・七　士七・二一
ロ 詩二七・五、三一・二〇、二一〇　ヘ 士四・一五、二四、五・二七　チ 士七・二五　ト 士八・二二、二二
ヌ 賽一七・一三、一四　ル 詩三五・五　リ 申三二・二二　ワ 伯九・一七　カ 詩三五・四、二六　ヨ 詩五九・一三
タ 出六・三　レ 詩九二・八　ソ 詩二七・四

ッ詩四二・一、二六三
・二、七三・二六、
一一九・二〇

ネ詩六五・四　ム創一五・一　詩一一九・一一　詩一四・七　耶三〇　マ詩七四・一、七九・　エ彼後二・二〇、二一
ナ箴四・一八　哥後三　四　箴二・七　五、八〇・四
・一八　・二一　ウ賽六〇・一九　・二八、三一・二三
ラ申一六・一六　亞　ヰ創一五・一　詩八四　結三九・二五　耳三　ケ哈三・二
一四・一六　詩八四　オ詩三・一二　・一　フ哈二・一
ク剛一・一二、二・一　ヤ詩三二・一　コ亞九・一〇

四 萬軍のエホバわが王わが神よ　これなんぢの祭壇なり
五 をたゝへまつらん　セラ　五 その力なんぢにあり　その心シオンの大路にある者はさいはひなり
六 谷をすぐれども其處をおほくの泉あるところとなす　六 かれらは涙の
七 は力より力にすゝみ遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ　七 かれら
八 ヤコブの神よ耳をかたぶけたまへ　セラ　八 ばんぐんの神エホバよわが祈をきゝたまへ
九 たまへ　九 われらの盾なる神よ　みそなはしてなんぢの受膏者の顏をかへりみ
一〇 なんぢの大庭にすまふ一日は千日にもまされり　われは惡の幕屋にをらんよりは　寧ろわが神のいへの
一一 門守とならんことを欲ふなり　一一 そは神エホバは日なり盾なり　エホバはめぐみと榮とを與へ
一二 ものに善物をこばみたまふことなし　一二 萬軍のエホバよなんぢに依賴むものはさいはひなり

第八五篇

伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 エホバよなんぢはその地をめぐみ　ヤコブの俘囚をかへしたまひき　一 な
二 んぢおのが民の不義をゆるし　そのもろもろの罪をおほひたまひき　セラ　二 汝すべての怒をやめ
三 どほりを遠けたまへり　四 われらのすくひの神よかへりきたり我儕にむかひて忿怒をすてその烈しきいき
四 われらをいかり萬世にみいかりをひきのべたまふやめ　五 なんぢ永遠へ
五 にわれらをいかりをひきのべたまふや　六 汝によりてなんぢの民の喜悅をえんが爲に我儕を活しし
六 たまはざるか　七 エホバよなんぢの憐憫をわれらにしめし汝のすくひを我儕にあたへたまへ　八 わが神エホバの
七 かたりたまふ事をきかん　エホバはその民その聖徒に平和をかたりたまへばなり　されば
八 かれらは愚かなる行爲に

ふたゝび歸るなかれ　九
一〇　あはれみと眞實とともにあひ義と平和とたがひに接吻せり　一一
一一　ヱホバ善物をあたへたまへばわれらの國は物產をいださん　一二
一二　義はヱホバのまへにゆきヱホバのあゆみをわれに踏しめん

第八六篇

ダビデの祈禱

一　ヱホバよなんぢ耳をかたぶけて我にこたへたまへ　我はくるしみかつ乏しければなり　二
二　わが靈魂をまもりたまへ　われ神をうやまふ者なればなり　わが神よなんぢに依賴める汝のしもべを救ひ給へ　三
三　主よわれを憐みたまへ　われ終日なんぢによばふ　四
四　なんぢの僕のたましひを悅ばせたまへ　主よわが靈魂はなんぢを仰ぎのぞむ　五
五　主よなんぢは恵ふかくまた赦をこのみたまふ　汝によばふ凡てのものを豐かにあはれみたまふ　六
六　ヱホバよわがいのりに耳をかたぶけ　わが懇求のこゑをきゝたまへ　七
七　われ患難の日になんぢによばはんとなんぢは我にこたへたまふべし　八
八　主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく　汝のみわざにひとしきものはなし　九
九　主よなんぢの造れるもろもろの國はなんぢの前にきたりて伏拜まん　かれらは聖名をあがめむべし　一〇
一〇　なんぢは大なり　奇しき事跡をなしたまふ　唯なんぢのみ神にましませり
一一　ヱホバよなんぢの道をおしへたまへ　我はなんぢの眞理をあゆまん　ねがはくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまへ　一二
一二　わが神よ我心をつくして汝をほめたゝへ　とこしへに聖名をあがめまつらん　一三
一三　そはなんぢの憐憫はわれに大なり

イ 賽四六・一三　ロ 亞二・五　約一・一　ハ 詩八四・一一　雅一・一七　ニ 賽四五・八　ホ 詩八四・一一　ヘ 詩六七・六　ト 詩八九・一四　チ 賽二六・三　リ 詩五六・一、五七・一　ヌ 詩二五・一、一四三・八　ル 詩八六・一五、一三　ヲ 出一五・一一　詩九・六　ワ 出一五・一一　詩九・一七　カ 申三二・二四　ヨ 詩二二・三一、一〇　レ 申六・四、三二・三九　賽三七・一六、四四・六　哥前八・四　弗四・六　ソ 詩三五・四、二七・一、一一九・三三、一四三・八　ツ 詩二五・一四　ネ 詩八六・一、五　ナ 詩八六・一五　ラ 詩八六・一五　ム 詩八六・一三　ウ 詩八六・一三　ヰ 詩八六・一三　ノ 詩八六・一三　オ 詩八六・一三　ク 詩八六・一三　ヤ 詩八六・一三　マ 詩八六・一三　ケ 詩八六・一三　フ 詩八六・一三　コ 詩八六・一三　エ 詩八六・一三　テ 詩八六・一三　ア 詩八六・一三　サ 詩八六・一三　キ 詩八六・一三　ユ 詩八六・一三　メ 詩八六・一三　ミ 詩八六・一三　シ 詩八六・一三　ヱ 詩八六・一三　ヒ 詩八六・一三　モ 詩八六・一三　セ 詩八六・一三　ス 詩八六・一三

ッ詩五六・一三、一一　ナ出三四・六　民一四　八、一一・四、一三　ラ詩三五・一六、六九　ム詩一一六・一六
六、八　ネ詩五四・三　ニ八　尼九・一七　〇・四、七、一四五・　ウ詩四八・一　オ詩八九・一〇　寒
詩八六・五、一〇三・　八　耳三・一三　ム詩一一六・一六　キ詩七八・六七、六八　五一・九　ヤ詩二二・三〇　ケ路一八・七
ノ寒六〇・　ク結一三・九　マ詩二七・九、五一・　フ詩一〇七・一八
一四

一四　わがたましひを陰府（ツ）のふかき處より助けいだしたまへり
一五　ぶる人の會はわがたましひをもとめ　斯てなんぢを己がまへに置ざりき　一五　されど主よなんぢは憐憫とめぐみと
一六　にとみ怒をおそくし愛しみと眞實とにゆたかなる神にましませり　一六　我をかへりみ我をあはれみたまへ　ねがは
一七　くは汝のしもべに能力を與へ汝のはしため（ト）の子をすくひたまへ　一七　我にめぐみの憑據をあらはしたまへ然ばわれ
をにくむ者これをみて恥をいだかん　そはヱホバよなんぢ我をたすけ我をなぐさめあたまへばなり

第八七篇

一　コラの子のうたなり　讃美なり
二　ヱホバの基はきよき山にあり　二　ヱホバはヤコブのすべての住居にまさりてシオンのもろもろの
三　門を愛したまふ　三　神の都よなんぢにつきておほくの榮光のことを語りはやせり　セラ
四　四　われはラハブ、バビロンをも我をしるものの中にあげん　ペリシテ、ツロ、エテオピアを視よこの人はかしこに生れたりといはん
五　五　シオンにつきては如此いはん　此もの彼ものその中にうまれたり至上者みづからシオンを立たまはんと　六　ヱホバ
六　もろもろの民をしるしたまふ時このものは彼處にうまれたりと算へあげたまはん　セラ
七　七　うたふもの踊るもの皆いはん　わがもろもろの泉はなんぢの中にありと

第八八篇

一　マハラテ、レアノテの調にあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のうたなり　讃美なり、エズラ人ヘマンのをしへの歌なり
二　ヱホバわが救の神よ　われ晝も夜もなんぢの前にさけべり　二　願くはわが祈をみまへにいたらせ汝のみゝをわが號呼のこゑにかたぶけたまへ
三　三　わがたましひは患難にてみち我が生命は陰府にちかづけり

四 われは穴にいるものとともにかぞへられ依仗なき人のごとくなれり
五 (イ)
六 死者のうちにすてらる汝かれらを再びこゝろに記たまはずかれらは御手より斷滅されしものなり
七 我をいとふかき穴くらき處ふかき淵におきたまひき
八 もろもろの浪をもて我をくるしめ給へりセラ
九 われは錮閉されていづることあたはず わが眼はなやみの故をもておとろへぬ われ日ごとに汝をよべり
一〇 (ホ) (ヘ) (ト)
一一 パよなんぢに向ひてわが兩手をのべたり
一二 なんぢ死者にくすしき事跡をあらはしたまはんや亡にしもの立てなんぢを讃たゝへんや セラ
一三 (チ) (リ)
一四 のくすしきみわざは墓のうちに汝のいつくしみは滅亡のなかに宣傳へられんや
一五 さけべり わがいのりは朝にみまへに達らん
一六 (ヌ) (ル)
一七 に面をかくしたまふや
一八 汝のはげしき怒わがうへをすぐ汝のおびやかし我をほろぼせり
一九 めぐり ことごとく來りて我をかこみ ふさげり
二〇 ものを幽暗にいれたまへり
二一 (ワ)

第八九篇

一 エズラ人エタンのをしへの歌

二 われエホバの憐憫をとこしへにうたはん われ口もてエホバの眞實をよろづ代につげしらせん

イ 詩二八・一　ロ 箴五三・八　ハ 詩四二・七　ニ 伯一九・一三、一九　詩三一・一一、一四　ホ 哀三・四　ヘ 詩三八・七、一〇　ト 詩八六・三　チ 伯一一・一三　詩一四三・六　リ 詩六・五、三〇・九、一一五・一七、一一八・一七　ヌ 伯一〇・二一　詩一四三・三　ル 詩三一・一二、八八・一〇、九　ヲ 詩五・三、一一九・一四七　ワ 詩四三・二　カ 伯一三・二四　詩一三一・一　ヨ 伯六・四　タ 詩三二・一六　レ 伯一九・一三　詩一一・一一、三八・一一　ソ 詩一〇一・一

二 われいふ あはれみは永遠にたてらる 汝はその眞實をかたく天にさだめたまはんと
三 われなんぢの裔をとこしへに固うし なんぢの座位をたてて
四 代々におよばしめんと 汝のしもべダビデにちかひたり
五 エホバよもろもろの天はなんぢの奇しき事跡をほめん なんぢの眞實もまた潔きものの會にてほめらるべし
六 蒼天にてたれかエホバに類ふものあらんや 神の子のなかに誰かエホバのごとき者あらんや
七 神はきよきものの公會のなかにて畏むべきものなり その四周にあるすべての者にまさりて懼るべきものなり
八 萬軍の神エホバよヤハよ 汝のごとく大能あるものは誰ぞや なんぢの眞實はなんぢをめぐりたり
九 なんぢ海のあるゝををさめ その浪のたちあがらんときは之をしづめたまふなり
一〇 なんぢラハブを殺されしものごとく擊碎きおのれの仇どもを力ある腕をもて打散したまへり
一一 もろもろの天はなんぢのものなり 世界とその中にみつるものとはなんぢ造りたまへり
一二 北と南はなんぢの名によりて歡びよばふ タボルとヘルモンはなんぢの名によりて歡びよばふ
一三 なんぢは大能のみうでをもちたまふ なんぢの手はつよく汝の右はたかくあげられたり
一四 義と公平はなんぢの寶座のもとゐなり あはれみと眞實とは聖顏のまへにあらはれゆく
一五 よろこびの音をしる民はさいはひなり エホバよかれらはみかほの光のなかをあゆめり
一六 かれらは終日なんぢの名によりて歡びよろこび 汝の義によりて高くあげられたり
一七 かれらの力の榮光はなんぢなり 汝のめぐみによりてわれらの角はたかくあげられん
一八 そはわれらの盾はエホバに屬われらの王はイスラエルの聖者につけり
一九 その時なんぢの聖徒につげたまはく われ佑助をちからあるものに委ねたり わが民のなかより一人をときに異象をもてなんぢの眞實をかたく天にさだめたまはんと

ツ詩一一九・八九　三四・二三　何三・五　キ詩八九・七
ネ王上八・一六　祭　ラ詩八九・二九、三六　ノ詩四〇・五、七一・二
四二・一　路一・　ム詩八九・一　九、八六・八、一一三　ヤ詩六五・七、九三・　ク出一五・一一　詩三五・一　ケ創一・一　代上二九・一一　詩二四・一、二、五〇・一二　ア詩八五・一三　サ民一〇・一〇、一三　メ詩八九・一九・一、九七・六　オ詩七六・七、一一　マ出一四・二六―二八　フ伯二六・七　ヨ書一九・二二　詩前　詩八七・四　ユ詩七五・一〇、八九・四、九二・一七　エ書一二・一　テ詩九七・二　ミ詩一〇七・二九　ヤ民一〇・一〇、一一　詩九八・六　キ詩四・六、四四・三

えらびて高くあげたり　二〇　われわが僕ダビデをえて之にわが聖膏をそゝげり　二一　わがかひなはかれを強くせん　二二　仇かれをしへたぐることなし悪の子かれを苦しむることなからん　二三　われその敵をたふし彼をにくめるものを撃ん　二四　されどわが眞實とわが憐憫とはダビデとともに居りわが名によりてその角はたかくあげられん　二五　われ亦かれの手を海のうへにおきその右の手を河のうへにおかん　二六　ダビデ我にむかひて汝はわが父わが神わがすくひの岩なりとよばん　二七　われまた彼をわが初子となし地の王たちのうち最もたかき者となさん　二八　われとこしへにかれがために憐憫をかれがためにたもちわれとかれとの契約はかはることなかるべし　二九　われまたその裔をとこしへに存へそのくらゐを天の日數のごとくなさん　三〇　もしその子わが法をはなれわが審判にしたがひて歩まず　三一　わが律法をやぶりわが誡命をまもらずば　三二　われ杖をもてかれらの愆をたゞすべし鞭をもてその邪曲をたゞすべし　三三　されど彼よりわが憐憫をことごとくはとりさらずわが眞實をおとろへしむることなからん　三四　われおのれの契約をやぶらずわが口より出しことをかへじ　三五　われ一たびわが聖名をさして誓へりわれダビデに虚僞をいはじ　三六　その裔はとこしへにつゞき恒にわが前にあらん　三七　また月のごとく永遠にたてられん空にある證人はまことなりセラ　三八　されどその受膏者をとほざけて棄たまへりなんぢ之をいきどほりたまへり　三九　なんぢ己がしもべの契約をいみ其かんむりをけがして地にまでおとし給へり　四〇　またその垣をことごとく倒しその保砦をあれすたれしめたまへり　四一　そのみち道をすぐるすべての者にかすめられ隣人にのゝしらるる　四二　なんぢかれが敵のみぎの手をたかく擧そのもろもろの

イ 申前一六・一、一二　ト 詩七二・八、八〇・　五、一八　ル 民二四・七　七 耶三三・一七　ロ 詩八〇・一七　一一　ネ 申後七・一三　ナ 撒四・二一　一一・三一　ハ 申後七・一三　代上　ヲ 賽五五・三　タ 申一一・二一　一一・三二　ニ 申後七・一四　ワ 詩八九・三四　レ 申後七・一四　ホ 詩六一・七　カ 詩八九・四、三六　ソ 詩一一九・五三　ラ 申後七・一六　詩八九・四、二九　ツ 申後七・一四　ヘ 詩八九・一七　ヨ 詩二・七　西一・一　タ 申一一・二一　詩一一九・一九　ム 詩七二・五、一七　耶三三・二〇　ウ 代上二八・九　詩四四・九、六〇・一、一〇　ヰ 申三二・一九　詩

四三 仇をよろこばしめたまへり
四四 四三 なんぢかれの劍の刃をふりかへして戰闘にたつに堪へざらしめたまひき
四五 四四 その光輝をけしその座位を地になげおとし
四六 四五 その年若き日をちゞめ恥をそのうへに覆たまへり セラ
四七 四六 よかくて幾何時をへたまふや 自己をとこしへに隱したまふや 忿怒は火のもゆるごとくなるべきか
四八 四七 はわが時のいかに短かきかを思ひたまへ 汝いたづらにすべての人の子をつくりたまはんや
四九 四八 みず又おのがたましひを陰府より救ひうるものあらんや セラ
五〇 四九 主よなんぢが眞實をもてダビデに誓ひたまへる昔日のあはれみはいづこにありや
五一 五〇 主よねがはくはなんぢの僕のうくる謗をみこゝろにとめたまへ ヱホバの受膏者のあしあとをそしれり
五二 五一 我もろもろの民のそしりをわが懷中にいだく
五三 五二 ヱホバは永遠にほむべきかな アーメン アーメン

第九〇篇

神の人モーセの祈禱

一 主よなんぢは往古より世々われらの居所にてましませり
二 山いまだ生いでず汝いまだ地と世界とをつくりたまはざりしとき 永遠よりとこしへまでなんぢは神なり
三 なんぢ人を塵にかへらしめて宣はく 人の子よなんぢら歸れと
四 なんぢの目前には千年もすでにすぐる昨日のごとく また夜間のひとゝきにおなじ
五 なんぢこれらを大水のごとく流去らしめたまふ われらは一夜の寢のごとく朝にはえいづる青草のごとし
六 朝にはえいでてさかえ夕にはかられて枯るなり
七 われらはなんぢの怒によりて消うせ 汝のいきどほりによりて怖まどふ
八 汝われらの不義をみまへに置 われらの隱れたるつみを聖顏のひかりのなかにおきたまへり
九 われらがすべての年のつくるは一息のごとし
一〇 われらのもろもろの日はなんぢの怒によりて過去り われらがすべての年のつくるは一息のごとし

年をふる日は七十歳にすぎず あるひは壯やかにして八十歳にいたらん されどその誇るところはたゞ勤勞とかなしみとのみ その去ゆくこと速かにしてわれらもまた飛去れり
二 誰かなんぢの怒のちからを知らんや たれかなんぢをおそるゝ畏にたくらべて汝のいきどほりをしらんや
三 願くはわれらにおのが日をかぞふることをしへて智慧のこゝろを得しめたまへ
一三 ヱホバよ歸りたまへ斯てわれらを汝のあはれみにてあきたらしめ世をはるまで喜びに係れるみこゝろを變へたまへ
一四 ねがはくは朝にわれらを汝のいつくしみにて滿たしめたまへ
一五 さらば汝がわれらを苦しめたまへるもろもろの日と われらが禍害にかゝれるもろもろの年とにたのしませたまへ
一六 願くはなんぢの僕等になんぢの榮光をその子等にあらはしたくらべて我儕をたのしませたまへ
一七 願くはわれらの神ヱホバの佳美をわれらのうへにのぞましめ われらの手のわざを確からしめたまへ 願くはわれらの手のわざを確からしめたまへ

第九一篇

一 至上者のもとなる隱れたるところにすまふその人は全能者の蔭にやどらん
二 われヱホバのことを宣てヱホバはわが避所わが城わがよりたのむ神なりといはん
三 そは神なんぢを獵人のわなと毒をながす疫癘よりたすけいだしたまふべければなり
四 かれその翎をもてなんぢを庇ひたまはん なんぢその翼の下にかくれん その眞實は盾なり干なり
五 夜はおどろくべきこと とあり 晝は飛來る箭にも
六 幽暗には行めく疫癘にも あゆむ疫癘あり日午には荒す破壞にも
七 千人はなんぢの左にたふれ萬人はなんぢの右にたふる されどその災害はなんぢに近づくことなからん
八 なんぢの眼はたゞこの事をみるのみ なんぢ惡者のむくいを見ん
九 なんぢ曩にいへりヱホバはわが避所なりと

イ 詩三九・四　ロ 申三二・三六　詩一三五・一四　ハ 詩八五・六、一四九　ホ 詩二七・四　ヘ 賽二六・一二　ト 詩二七・五、三一・リ 詩一四二・五　ヌ 詩一二四・七　ル 詩一七・八、五七・一、六一・四　ヲ 伯五・一九　詩二〇、三二・七　ワ 詩三七・三四　カ 詩九一・二　ヨ 詩七一・三、九〇・一　タ 詩二一・六　レ 詩二一・二四　ソ 詩四三・二　ツ 詩三七・三四　馬一　チ 詩一七・八　リ 詩一四二・五

一〇 たれば 一〇災害(わざはひ)なんぢにいたらず苦難(なやみ)なんぢの幕屋(まくや)に近(ちか)づかじ 二
一一 せて 汝(なんぢ)があゆむもろの道(みち)になんぢを守(まも)らせ給(たま)へばなり 三
一二 一三 に汝(なんぢ)をさゝへん 一三 なんぢは獅(し)と蝮(まむし)とをふみ壮獅(わかきし)と蛇(へび)とを足(あし)の下(した)にふみにじらん
一四 一五 がゆゑに我(われ)これを助(たす)けん かれわが名(な)をしるがゆゑに我(われ)これを高處(たかきところ)におかん 一四
一六 その苦難(なやみ)のときに偕(とも)にをりて之(これ)をたすけ之(これ)をあがめん 一五
一六 われ長壽(ながきいのち)をもてかれを足(たら)はしめ且(かつ)わが救(すくひ)をしめさん

第九一篇

安息日(あんそくにち)にもちゐる歌(うた)なり 讃美(きんび)なり

一 いとたかき者(もの)よヱホバにかんしやし聖名(みな)をほめたゝふるは善(よき)かな 二
二 あらはし夜々(よな〳〵)なんぢの眞實(まこと)をあらはすに 三
三 十絃(とをを)のなりものと箏(きう)とをもちゐ 琴(こと)の妙(たへ)なる音(ね)をもちゐるはいと善(よき)かな 四
四 そはヱホバよなんぢ我(われ)をたのしませたまへり 我(われ)なんぢの手(みて)のわざをよろこびほこらん 五
五 ヱホバよ汝(なんぢ)のみわざは大(おほい)なるかな汝(なんぢ)のもろもろの思念(おもひ)はいとふかし 六
六 無知者(しれもの)はしることなく愚(おろか)なるものは之(これ)をさとらず 七
七 惡(あし)きものは草(くさ)のごとくもえいで 不義(ふぎ)をおこなふ衆庶(もろ〳〵)はさかゆるとも 遂(つひ)にはとこしへにほろびん 八
八 されどヱホバよ汝(なんぢ)はとこしへに高處(たかきところ)にましませり 九
九 ヱホバよ吁(あゝ)なんぢの仇(あた)なんぢの仇(あた)はほろびん 不義(ふぎ)をおこなふ者(もの)はことごとく散(ちら)されん 一〇
一〇 されど汝(なんぢ)わが角(つの)をたかくあげて 野(の)の牛(うし)のつのごとくならしめたまへり 一一
一一 我(われ)はあたらしき膏(あぶら)をそゝがれたり 又(また)わが目(め)はわが仇(あた)につきて願(ねが)へることを見(み)わが耳(みゝ)はわれにさからひておこなふ惡人(あく)につきて願(ねが)へることをきゝたり 一二
一二 義(たゞ)しきものは椶櫚(しゆろ)の樹(き)のごとく榮(さか)え レバノンの香柏(かうはく)の

タ詩一二・二一 レ詩三四・七、七一・三 太四・六、一一 來一・一四 ソ伯五・二三 ツ詩九・一〇 路四・一 ネ詩五〇・一五 ナ賽四三・二 ラ毋前二・三〇 ム詩一四七・一 ウ詩八九・一 キ代上二三・五 詩三三・二 ノ詩四〇・五、一三九・ オ賽二八・二九 羅一一・三三、三四 ク詩七三・二二、九四 ヤ伯一二・六、二一・七 詩三七・一、二、三 ケ詩六八・一、八九・ 五、三八 耶一二・一〇 マ詩五六・二、八三・ フ詩八九・一七、二四 コ詩二三・五 エ詩五四・七、五九・一〇、一二二・八 賽六五・二二 何一四・五、六 テ詩五二・八

一三 ごとくそだつべし
一四 むすび豐かにうるほひ
一五 には不義なし

第九三篇

一 エホバは統御たまふ エホバは稜威をきたまへり
二 さればまた世界もかたくたちて動かざることなし
三 汝はとこしへより在せり
四 エホバは高處にいましてその威力はおほくの水のこゑ海のさかまくにまさりて盛んなり
五 エホバよ聖潔はなんぢの家にとこしへまでも適應なり

第九四篇

一 エホバよ仇をかへすは汝にあり神よあたを報すはなんぢにあり ねがはくは光をはなちたまへ
二 世をさばきたまふものよ 願くは起てたかぶる者にそのうくべき報をなしたまへ
三 エホバよ惡きもの幾何のときを經んとするや あしきもの勝誇りていくそのときを經るや
四 かれらはみだりに言をいだして誇りものいふ すべて不義をおこなふ者はみづから高ぶれり
五 エホバよ彼等はなんぢの民をうちくだき なんぢの業をそこなふ
六 かれらは寡婦と旅人との生命をうしなひ孤子をころす
七 かれらはいふ ヤハは見ずヤコブの神はさとらざるべしと
八 民のなかなる無知よ をろかなる者よ 汝ら愚かなるべし
九 みゝを植るものきくことをせざらんや 目をつくれるもの見ることをせざらんや
一〇 もろもろの國をしふる者 人に知識をあたふる者しることなからんや
一一 エホバは人の思念のむなしきを知り

イ詩一〇〇・四、一三　ハ羅九・一四　ト詩九六・一〇　ル創一八・二五
二 詩九六・一〇、九七・七　ニ 詩一〇四・一　チ 詩四五・六　ヲ 詩七・六
五・二一　ホ 詩一〇四・一　ヘ 詩六五・六　リ 詩六五・七、八九・九　ワ 伯二〇・五
一、九九・一　ヌ 申三二・三五　ヨ 詩一〇・一一、一三、
一 詩九・一 ヘ 詩六五・六　カ 詩三一・一八　タ 詩七三・二二、九二・六
ヨ 申三二・四　ヨ 詩一〇・一一、一三、
一五

一二 たまふ ニ ヤハよなんぢの懲めたまふ人 なんぢの法をを(ま)
一三 しへら(ま)るゝ人は さいはひなるかな
一四 はひの日よりのがれしめ 惡きもののために坑のほらるゝまで これに平安をあたへたまはん
一五 民をすてたまはず その嗣業をはなれたまはざるなり 一五 審判はたゞしきにかへり 心のなほき者はみなその後に
一六 したがはん 一六 誰かわがために起りたちて惡きものを責んや 誰か我がために立て不義をおこなふ者をせめんや
一七 一七 もしヱホバ我をたすけたまはざりせば わが靈魂はとくに幽寂ところに住ひしならん
一八 (ラ) 一八 されどわが足すべり
一九 ぬといひしとき ヱホバよなんぢの憐憫われをさゝへたまへり 一九 わがうちに憂慮のみつる時 なんぢの安慰
二〇 わがたましひを喜ばせたまふ 二〇 律法をもて害ふことをはかる惡の位はなんぢに親むことを得んや
二一 (ワ) (ヲ) 二一 (ヤ) (カ) 二一 (ヨ) (タ) (レ) 二一 (ソ) (ツ) (ネ) (ナ)
二二 あひかたらひて 義人のたましひをせめ罪なき血をつみに定む 二三 然はあれどヱホバはわがたかき櫓 わが神は
二三 わが避所の磐なりき 二三 神はかれらの邪曲をその身におはしめ かれらをその惡き事のなかに滅したまはん われ
二三 らの神ヱホバはこれを滅したまはん (ヤ) (ム) (ラ) (ヲ) (ヒ) (ヘ) (ホ) (ン) (ム) (ヒ) (ヘ) (ホ) (ン)

第九五篇

一 一 率われらヱホバにむかひてうたひ すくひの磐にむかひてよろこばしき聲をあげん (ク) (ヤ) (ヒ) (ヒ) (ヒ

八 なり 今日なんぢらがその聲をきかんことをのぞむ
九 し日の如くその心をかたくなにするなかれ
一〇 みたり われそのの代のためにうれへて四十年を歴
一一 このゆゑに我いきどほりて彼等はわが安息にいる
一二

第九六篇

一 あたらしき歌をヱホバにむかひてうたへ 全地よ
二 ヱホバにむかひてうたへ その名をほめよ 日ごとにその救をのべつたへよ
三 もろもろの國のなかにその榮光をあらはしもろもろの民のなかにその奇しきみわざを顯すべし
四 そはヱホバはおほいなり もろもろの神にまさりて畏るべきものなり
五 もろもろの國のすべての神はことごとく虚し されどヱホバは天をつくりたまへり
六 尊貴と稜威とはその前にあり 能と善美とはその聖所にあり
七 もろもろの民のやからよ榮光と能とをヱホバにあたへよ
八 その聖名にあたへよ 獻物をたづさへてその大庭にきたれ
九 きよき美しきものをもてヱホバををがめ 全地よその前にをのゝけ
一〇 もろもろの國のなかにいへ ヱホバは統べをさめたまふ 世界もかたくたちて動かさるゝことなし ヱホバは正直をもてすべての民をさばきたまはんと
一一 天はよろこび地はたのしみ 海とそのなかに盈るものとはなりどよみ
一二 田畑とその中のすべての物とはよろこぶべし かくて林のもろもろの樹もまたヱホバの前によろこびうたはん
一三 ヱホバ來りたまふ 地をさばかんとて來りたまふ 義をもて世界をさばきその眞實をもてもろもろの民をさばき

イ 來三・七、一五、四・八詩七八・一八、四〇、五六 哥前一〇・九 ロ出一七・二、七 民一四・二二 ハ詩七八・一〇、一七 ニ民一四・二三 ホ來三・一〇、一一、一三 申六・一六 ヘ民一四・二三、二八、チ詩一四五・三 三〇 來三・一一、一二 リ詩一八・三一、四・三、五 ヌ詩九五・三 ル耶一〇・一一、一五 賽三・三 ヲ詩一一五・一五 賽四二・五 ワ詩二九・二 カ詩二九・一、二 ヨ詩二九・二、一一〇 レ詩六七・四、九六・一〇 ソ詩六九・三四 タ詩九三・一、九七・一 ツ詩九八・七 ネ詩六七・四 默一九・一一 ナ詩九六・一〇 ラ賽六〇・九 ム王上八・一二 詩

たまはん

第九七篇

ヱホバは統御たまふ 全地はたのしみ多くの島々はよろこぶべし

一 ヱホバは統御たまふ 全地はたのしみ多くの島々はよろこぶべし

二 雲と暗らきとはその周圍にあり 義と公平とはその寶座のもとゐなり

三 火ありその御まへにすゝみ その四周の敵をやきつくす

四 その電光は世界をてらす 地これを見てふるへり

五 もろもろの山はヱホバのみまへ 全地の主のみまへにて蠟のごとくとけぬ

六 もろもろの天はその義をあらはし よろづの民はその榮光をみたり

七 すべてきざめる像につかへ虚しきものによりてみづから誇るものは恥辱をうくべし もろもろの神よみなヱホバをふしをがめ

八 ヱホバよなんぢの審判のゆゑによりシオンはきゝてよろこびユダの女輩はみな樂しめり

九 ヱホバよなんぢ全地のうへにましまして至高くなんぢもろもろの神のうへにましまして至貴とし

一〇 ヱホバを愛しむものよ惡をにくめヱホバはその聖徒のたましひをまもり之をあしきものの手より助けいだしたまふ

一一 光は義人のために播かれ 欣喜はこゝろ直きものののために播かれたり

一二 義人よヱホバによりて喜べ そのきよき名に感謝せよ

第九八篇

歌なり

一 あたらしき歌をヱホバにむかひてうたへ そは妙なる事をおこなひその右の手そのきよき臂をもて己のために救をなし畢たまへり

二 ヱホバはその救をしらしめ その義をもろもろの國人の目のまへにあらはし給へり

三 又その憐憫と眞實とをイスラエルの家にむかひて記念したまふ 地の極もことごとくわが神の救を見たり

四 すくひを見たり　四全地よヱホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ
五 もてヱホバをほめうたへ　琴(イ)の音と歌のこゑとをもてせよ
六 ラッパ(ロ)と角笛をふきならしつゝ王ヱホバのみまへによろこばしき聲をあげよ
七 海(ハ)とそのなかに盈るもの　世界とせかいにすむものと鳴響むべし
八 うちもろもろの山はあひともにヱホバの前によろこびうたふべし
九 ヱホバ地をさばきたまはん　ヱホバ義をもて世界をさばき　公平をもてもろもろの民をさばきたまはん

第九九篇

一 ヱホバは統(ヘ)べをさめたまふ　もろもろの民はをの〳〵くべし　ヱホバはケルビム(ト)の間にいますゆゑに地ふるはん
二 ヱホバはシオンにましまして大なり　もろもろの民にすぐれてたかし
三 かれらは汝(リ)のおほいなる畏るべき名をほめたゝふべし　ヱホバは聖(ヌ)なるかな
四 王のちからは審判をこのみたまふ　汝はかたく公平をたてヤコブのなかに審判と公義とをおこなひたまふ
五 われらの神ヱホバを崇めヱホバの足(ヨ)のもとにてその承足のもとにてその祭司のなかにモーセとアロンとあり　その祭司のなかにサムエルあり　かれらヱホバをよびしに應へたまへり
六 ヱホバ雲の柱のうちにましてかれらに語りたまへり　かれらはその證詞とその賜はりたる律法とを守りたり
七 われらの神ヱホバよなんぢ彼等にこたへたまへる神にてましませり　かれらのなしゝ事にむくいたまひたれど　また赦免をあたへたまへる神にてましませり
八 われらの神ヱホバを崇めそのきよき山にてをがみまつれ　そはわれらの神ヱホバは聖なるなり
九

第一〇〇篇

感謝のうた

イ 詩九五・一、一〇〇・一　ロ 民一〇・一〇　代上一五・二八　ハ 詩九六・一一　ニ 箴五五・一二　ホ 詩九六・一〇、一三　リ 申二八・五八　獻一五・四　ヘ 詩九三・一　代下二九・二七　ト 出二五・二二　チ 詩九七・九　ヌ 伯三六・五—七　ル 詩九九・九　ヲ 代上二八・二　詩一三二・七　ワ 利一九・二　カ 耶一五・一　ヨ 出一四・一五、一五・二五　撒前七・九、一二・一八　タ 出三三・九　レ 出三二・二一—一四　ソ 民一四・二〇　四六・二八　番三・七　耶一五・四　ツ 出一五・二　詩三四・三、九九・五、一一八・二八　ネ 詩九五・一、九八・四　ナ 詩一一九・七三、一三九・一三、一四九・二一　弗二・一〇　ラ 詩九五・七　結三四・三一

ム詩六六・一三、一一　キ詩八九・一　ク書二三・六　毋前一　ヤ詩九七・一〇
六・一七―一九　ノ毋前八・一四　二・二〇、二一　詩　マ太七・二三
ウ詩一三六・一　オ王上九・四、一一・四　四〇・四、一二五・五　ニ・一九

一 二 三 四 五

一 全地よヱホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ
二 (ネ) 欣喜をいだきてヱホバに事へ
三 (シ) 知れヱホバこそ神にますなれ われらを造りたまへるものはヱホバにましませば我儕はその屬なりわれら
四 (タ) はその民その草苑のひつじなり 四 (カンシヤ) 感謝しつゝその門にいり ほめたゝへつゝその大庭にいれ 感謝してその名を
五 ほめたゝへよ 五 ヱホバはめぐみふかくその憐憫かぎりなく その眞實よろづ世におよぶべければなり

ダビデのうた

第一〇一篇

一 二 三 四 五

一 (ヒ) われ憐憫と審判とをうたはん ニ ヱホバよ我なんぢを讃うたはん
二 (ヘ) をまもらん なんぢいづれの時われにきたりたまふや 我なほき心をもてわが家のうちを
三 (ホ) 眼前にいやしき事をおかず われ叛くものの業をにくむ そのわざは我につかじ
四 (マ) ん 惡きものを知ることをこのまず 五 隱にその友をそしるものは我これをほろぼさん
五 (ク) 高ぶる眼また驕れる心の ものは我これをしのばじ 六 わが眼は國のうちの忠なる者をみて之をわれとともに住はせん 全き道をあゆむ人
六 (ア) はわれに事へん 七 欺くことをなす者はわが家のうちに住むことをえず 虛僞をいふものは
七 (ヤ) を得じ 八 われ朝な朝なこの國のあしき者をことごとく滅し ヱホバの邑より不義をおこなふ者をことごとく
八 (ツ) 絶除かん

第一〇二篇

一 二 三

一 みかほを蔽ひたまふなかれ なんぢの耳をわれにかたぶけ 我がよぶ日にすみやかに我にこたへたまへ
二 (テ) ヱホバよわが祈をきゝたまへ 願くはわが號呼のこゑの御前にいたらんことを
三 (エ) なやみたる者おもひくづほれてその歎息をヱホバの前にそゝぎいだせるときの祈禱 三 わが窮苦の日

四 もろもろの日は煙のごとくきえ わが骨はたきゞのごと
五 たり われ糧をくらふを忘れしによる (イ)
六 ごとく荒たる跡のふくろふのごとくになりぬ
七 わが仇はひねもす我をそしる (ロ)猖狂ひて我をせむるもの
八 (ハ)我をさして誓ふ
九 われは糧をくらふごとくに灰をく
一〇 らひ わが飲ものには涙をまじへたり
一一 (ニ)こは皆なんぢの怒と忿恚とによりてなり
一二 給へり わが(ホ)齢はかたぶける日影のごとし またわ
一三 れは草のごとく萎れたり
一四 永遠にながらへ (ヘ)なんぢ起てシオンをあはれみたまはん そはシオンに恩恵を
一五 (ト)その名はよろづ世にながらへん
一六 へ愛しむ (チ)そのさだまれる期すでに來れり
一七 もろもろの國はエホバの名をおそれ 地のもろもろの王はその榮光をおそれん
一八 (リ)來らんとするのちの世のためにこの事をしるさん 新しくつくられたる民はヤハ
一九 (ヌ)きづき榮光をもてあらはれたまへり
二〇 (ル)こは俘囚のなげきをきゝ死にさだまれる者をときはなち
二一 (ヲ)人々のシオンにてエホバの名をあらはしエルサレムにてその頌美をあらはさん
二二 (ワ)もろもろの民もろもろの國つどひあつまりてエホバに事へまつらん
二三 (カ)にもろもろの民もろもろの國つどひあつまりてエホバに事へまつらん
二四 (ヨ)ろへしめ わが齢をみじかからしめ給へり 我いへ

イ伯三〇・二九 詩三一・一〇 哀一・一三 ホ番二・二四 ロ詩三七・二 詩一〇二・二 ヘ徒二六・一一 ト徒二三・一一 チ詩四二・三、八〇・五 リ詩三〇・七 ヌ伯一四・二 詩一〇二・一九 ル詩九・七、一〇二・二〇 レ王上八・四三 詩一四四・四 ヲ詩九・一、一〇二・一三 ワ詩一三五・一三 カ賽六〇・一〇 ヨ賽四〇・二 タ詩七九・一 ソ賽六〇・一、二 ツ尼一・六、一一、二・ ネ羅一五・四 哥前一・一〇 ナ詩二三・三一 ラ申二六・一五 ム詩七九・一一 ウ詩二三・二三 ノ賽三八・一〇 オ詩九〇・二 哈一・一二

ク創一・二、二・一 來 二〇 彼後三・七、一・一〇 ヲ詩六九・三六 三三・二四
十箴三四・四、五一・一〇 マ詩一〇二・一二 コ詩一〇三・二二 太九・二、六、一四 可二・五、一 ア詩三四・二二、五六 メ詩一四七・一九 ユ詩一四六・七
六、六五、一七、 ケ馬三・六 一〇四・一、一四六 ミ出三四・六、七 民一・一 シ詩三〇・五 賽五七・一六 ヱ蝋九・一三
六六・二三 羅八・ 雅一・一七 ・一 テ出一五・二六 詩 耶一七 モ賽四三・二五 雅七・一八
エ詩一三〇・八 賽 キ箴四〇・三一 ヒ詩五七・一〇 弗三・一八
一四七・三 尼九・一七 詩八六 ・一八 ミ詩一四七・一 ・一八 ・一八 ・一八

一五 つくられし狀をしり われらの塵なることを念ひ給へばなり (イ)
一六 人のよはひは草のごとく その榮はのの花のごと
一七 し 一六風すぐれば失てあとなくその生いでし處にとへど尙しらざるなり (ロ)(ハ)
一八 然はあれど ヱホバの憐憫はとこしへより永遠まで (ホ) ヱホバをおそるるものにいたり その公義は子孫のまた子孫にいたらん
一九 訓諭を心にとめて行ふものにおよぶ (ヘ)
二〇 ヱホバはその寶座をもろもろの天にかたく置たまへり その政權はよろづのもののうへにあり (ト)
二一 ヱホバにつかふる使者よ 一九ヱホバをほめまつれ (チ) 勇士よ (リ) ヱホバをほめまつれ
二二 ヱホバをほめまつれ その萬軍よ (ヌ) その聖旨をおこなふ僕等よ (ル) ヱホバをほめまつれ
二三 よ ヱホバの政權の下になるすべての處にて (ヲ) ヱホバをほめまつれ (ワ) わがたましひよ ヱホバをほめよ

第一〇四篇

一 わが靈魂よ (カ) ヱホバをほめまつれ ヱホバよなんぢは至大にして (ヨ) 尊貴と稜威とを衣たまへり
二 なんぢ光をころものごとくにまとひ天を幕のごとくにはり (タ)
三 水のなかにおのれの殿の (レ) 棟梁をおき 雲をおのれの車となし 風の翼にのりあるき (ソ)
四 かぜを使者となし 焰のいづる火を僕となしたまふ (ツ)
五 ヱホバは地をその基のうへにおきて 永遠にうごくことなからしめたまふ (ネ)
六 衣におほふがごとく大水にて地をおほひたまへり 水たゝへて山のうへをこゆ (ナ)
七 なんぢ叱咤すれば水しりぞき 汝いかづちの聲をはなてば水たちまち去ぬ (ラ)
八 あるひは山にのぼり或ひは谷にくだりて (ム) 汝のさだめたまへる所にゆけり
九 なんぢ界をたてて之をこえしめず ふたゝび地をおほふことなからしむ (ウ)
一〇 ヱホバはいづみを谷にわきいだし給ふ その流は山のあひだにはしる
一一 かくて野のもろもろの獸にのましむ 野の驢馬もその渴をやむ (ヰ)
一二 空の鳥もそのほとりにすみ 樹梢

イ 詩七八・三九　ロ 創三・一九　傳一二・七　ハ 詩九〇・五、六　彼前一・二四　ニ 伯一四・一、二　但四・一一、一二、二五、三四、三五　ホ 伯七・一〇、二〇・九　ヘ 出二〇・六　ト 申七・九　チ 詩一一・四　リ 詩四七・二　ヌ 太六・一〇　來一・一四　ル 詩一四八・二　ヲ 創三二・二　書五・一四　詩六八・一七　ワ 但七・九、一〇　來一・二四　カ 詩一四五・一〇　ヨ 詩一〇三・一　タ 詩一〇三・一、四、六　詩二四・二、四　レ 詩九三・一　ソ 但七・九　ツ 申四〇・二三、四五　ネ 歷九・六　ナ 雅一九・一　ラ 詩一八・一〇　ム 來一・七　ウ 王下二・一一、一七　ヰ 伯二六・七、三八・四、六　詩二四・二　ノ 創七・一九　オ 創八・二一　ク 創八・五　ヤ 伯三八・一〇、一一　マ 伯二六・一〇　詩三・七　耶五・二二　ケ 創九・一一、一五

一三 の間よりさえづりうたふ 一三 ヱホバはその殿よりもろもろの山に灌漑たまふ 地はなんぢのみわざの實によりて
一四 飽足ぬ 一四 ヱホバは草をはえしめて家畜にあたへ 田産をはえしめて人の使用にそなへたまふ かく地より食物を
一五 いだしたまふ 一五 人のこゝろを歡ばしむる葡萄酒 ひとの顏をつやゝかならしむるあぶら 人のこゝろを强からしむる糧どもなり
一六 一七 一六 ヱホバの樹とその植たまへるレバノンの香柏とは飽足ぬべし 一七 鳥はそのなかに巢をつくり
一八 一九 鶴は松をその棲とせり 一八 たかき山は山羊のすまひ磐石は山鼠のかくるる所なり
二〇 つかさどらせたまへり 日はその西にいることをしる 二〇 なんぢ黑暗をつくりたまへば夜あり そのとき林のけもの
二一 二二 のは皆しのびに出きたる 二一 わかき獅ほえて餌をもとめ神にくひものをもとむ 二二 日いづれば退きてその
二三 二四 穴にふす 二三 人はいでて工をとりその勤勞はゆふべにまでいたる 二四 ヱホバよなんぢの事跡はいかに多なることぞ
二五 れらは皆なんぢの智慧にてつくりたまへり 汝のもろもろの富は地にみつ かしこに大なるひろき海あり その
二六 なかに數しられぬ甫ふもの小なる大なる生るものあり 二六 舟そのうへをはしり汝のつくりたまへる鱷そのうちに
二七 二八 あそびたはぶる 二七 彼ら皆なんぢを俟望む なんぢ宜時にくひものを之にあたへたまふ 二八 彼等はなんぢの予へ
二九 たまふ物をひろふ なんぢ手をひらきたまへばかれら嘉物にあきたりぬ 二九 なんぢ面をおほひたまへば彼等はあわてふためく なんぢ
三〇 汝かれらの氣息をとりたまへばかれらは死て塵にかへる 三〇 なんぢ靈をいだしたまへば百物みなつくらる
三一 造らるなんぢ地のおもてを新にしたまふ 三一 願くはヱホバの榮光とこしへにあらんことを ヱホバそのみわざを
三二 三三 喜びたまはんことを 三二 ヱホバ地をみたまへば地ふるひ 山にふれたまへば山は煙をいだす
三三 生るかぎりは

三四 エホバに向ひてうたひ我ながらふるほどはわが神をほめうたはん 三四
三五 らん われエホバによりて喜ぶべし 三五 罪人は地より絶滅され あしきものは復あらざるべし
わが霊魂よエホバをほめまつれエホバを讃稱へよ

第一〇五篇

一 エホバに感謝してその名をよび その(一)なしたまへる事をもろもろの民輩のなかにしらしめよ
二 エホバにむかひてうたへ エホバをほめうたへ そのもろもろの妙なる事跡をかたれ 三
三 きよき名をほこれ エホバをたづぬるものの心はよろこぶべし 四 エホバとその
四 つねにその聖顔をたづねよ 五 その僕アブラハムの裔よ ヤコブの子輩よ そのえらびたまひし所のものよ その
五 なしたまへる妙なるみわざと奇しき事跡とその口のさばきとを心にとむれ 七 彼はわれらの神エホバなり その
六 みさばきは全地にあり 八 エホバはたえずその契約をみこゝろに記たまへり 此はよろづ代に命じたまひし
七 聖言なり 九 アブラハムとなしたまひたる誓言 一〇 之をかたくしヤコブのために律法
八 となしイスラエルのためにとこしへの契約となして 一一 言たまひけるは我なんぢにカナンの地をたまひてなんぢ
九 らの嗣業の分となさん 一二 この時かれらの數おほからず甚すくなくしてかしこにて旅人となり 一三 この國より
一〇 かの國にゆきこの國よりほかの民にゆけり 一四 人のかれらを虐ぐるをゆるし給はず 一五 王たちを懲しめて
一一 宣給くわが受膏者たちにふるゝなかれわが預言者たちをそこなふなかれ 一六 エホバは饑饉を地に
一二 まねき人の杖とする糧をことごとく碎きたまへり 一七 又かれらの前にひとりを遣したまへり ヨセフはうられて

イ詩三七・三八 ロ詩一〇四・一 ハ代上一六・八―二二 ニ詩一四五・四、五、一一 ホ詩七七・一二、一五 ヘ詩二七・八
ト詩七七・一一 チ箴二六・九 リ路一・七二 ヌ創一七・二、二三・一 ル創一三・一五、一八・二七 ヲ創三四・三〇 ワ來一一・九 カ創三五・五 ヨ創二二・一七、二〇・ 二八 タ創四一・五四 レ利二六・二六 箴三・一 結四・一六 ソ創四五・五、五〇・二〇

一八 僕となりぬ 一八 かれら(キ)足械をもてヨセフの足をそこなひ
一九 ことばの驗をうるまでに及ぶ ヱホバのみことば彼をこゝろみたまへり
二〇 もろの民の長はこれをゆるし 二〇 王は人をつかはしてこれを解き もろ
二一 國のきみたちを縛しめ 長老たちに智慧ををしへしむ 二一 之(ト)をその家司となし その財寶をことごとく司どらせ
二二 やどれり 二四 ヱホバはその民を大にましくはへ 二二 イスラエルも亦エジプトにゆきヤコブはハムの地に
二三 おのれの民をにくましめ おのれの僕輩をあざむき待さしめたまへり 二三 之(ト)をその敵よりも強くしたまへり
二四 るアロンとを遣したまへり 二五 かれらはヱホバの預兆をその敵のこゝろをかへて
二五 へり 二八 ヱホバは闇をつかはして暗くしたまへり かれらその聖言にそむくことをせざりき
二六 水を血にかへてその魚をころしたまへり 三〇 かれらの國は蛙むれいでて王の殿のうちにまでみちふさがりぬ
二七 ヱホバいひたまへば蠅むらがり蚤そのすべての境にいりきたりぬ 三三 また雨にかへて雹をかれらに與へ
二八 もゆる火をかれらの國にふらし 三三 かれらの葡萄の樹とをうちその境のもろもろの樹ををりくだ
二九 きたまへり 三四 ヱホバいひたまへば蝗と蟲無數にいりきたり
三〇 その地のすべての實を食つくせり 三六 ヱホバはかれらの國のすべての首出者をうち かれらの
三一 なかりき 三八 エジプトはかれらの出るをよろこべり

三九 三九 エホバは雲をしきて蓋となし夜は火をもて照したまへり
四〇 (イ)
四一 にてかれらを飽しめたまへり 四一 磐をひらきたまへば水ほとばしりいで 潤ひなきところに川をなして流れいで
四二 たり 四二 エホバその
四三 きよき聖言とその僕アブラハムとをおもひいでたまひたればなり 四三 その民をみちびきて
四四 歓びつゝいでしめ そのえらべる民をみちびきて謳ひつゝいでしめ 四四 もろもろの國人の地をかれらに
四五 與へたまひしかば 彼等もろもろのたみの勤勞をおのが有とせり 四五 こは彼等がその律にしたがひその法をまもらんが爲なり エホバをほめたゝへよ

第一〇六篇

一 エホバをほめたゝへ エホバに感謝せよ そのめぐみはふかくその憐憫はかぎりなし 二 たれかエホバの力ある事跡をかたり その讃べきことを悉とくいひあらはし得んや 三 審判をまもる人々つねに正義をおこなふ者はさいはひなり 四 エホバよなんぢの民にたまふ恵をもて我をおぼえ なんぢの救をもてわれに臨みたまへ 五 さらば我なんぢの撰びたまへる者のさいはひを見なんぢの國の歓喜をよろこびなんぢの嗣業とともに誇ることをせん 六 われらの列祖はなんぢがエジプトにてなしたまへる奇しき事跡をさとらず 汝のあはれみの豊かなるを心にとめず 海のほとり即ち紅海のほとりにて逆きたり 七 されどエホバはその名のゆゑをもて彼等をすくひ 大能をしらしめんとてなり 八 また紅海を叱咤したまひたれば乾きたり かくて民をみちびきて野をこは大なる能力をしらしめんとてなり 九 ゆくがごとくに淵をすぎしめ 一〇 恨むるものの手よりかれらをすくひ 仇の手よりかれらを贖ひたまへり 一一 水

イ出一三・二一 民九 三出一七・六 ヘ申六・一〇、一一 番 チ代上一六・三四 詩一〇六・一 詩七八・一 詩一三・七—三三 詩一〇七・一、一一八・ ヲ利二六・四〇 王上八・五五 詩一〇七・一、一三六・一 ワ出一四・一一、一二 レ賽六三・一一—一四 ソ出一四・三〇
ロ出一六・一二、一三 詩七八・一五、一六 哥前一〇・四 ト申四・一、四〇、六・ リ詩四〇・五 カ結二〇・一四
ハ詩七八・二四、二五 ホ創一五・一四 ヌ詩一五・二 タ出一四・二一 詩一八・一五 撒一・四 ツ出一四・二七、二八、一五・五 ネ出一四・三一、一五・一

その敵をおほひたればその一人だにのこりし者なかりき
一三 彼等しばしがほどにその事跡をわすれその訓誨をまたず
一四 一五 たりき エホバは荒野にて神をこゝろみ
一六 一七 モーセを嫉みエホバの聖者アロンをねたみしかば
一八 地ひらけてダタンを呑みアビラムの黨類をおほひ
一九 このともがらの中にもえおこり焰はあしき者をやきつくせり
二〇 かれらはホレブの山にて犢をつくり鑄たる像をがみたり
二一 二二 かくの如くおのが榮光をかへて草をくらふ牛のかたちに似す
二三 救主なる神はエジプトにて大なるわざをなし
ハムの地にて奇しき事跡をなし紅海のほとりにて懼るべきことを爲たまへり
二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三

二三 このとき彼等そのみことばを信じその頌美をうたへり
二四 野にていたくむさぼり荒野にて神をこゝろみ
二五 その靈魂をやせしめたまへり
二六 たみは營のうちにて
二七 モーセおよびエホバの聖者アロンにねたみ
二八 火はかれらの願欲をかなへたまひしかど
二九 地ひらけてダタンを呑みアビラムの黨類をおほひ
三〇 火はかれらはホレブの山にて犢をつくり鑄たる像を
三一 拜したり 救主なる神はエジプトにて大なるわざをなし
三二 ハムの地にて奇しき事跡をなし紅海のほとりにて懼るべきことを爲たまへり
三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三

二四 かれらは美しき地を蔑しそのみことばを信ぜず
二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三

二五 剩さへその幕屋にてつぶやきエホバの聲をもきかざりき
二六 この故に手をあげて彼等にむかひたまへりこれ野にてかれらを斃れしめんとし
二七 又もろもろの國のうちにてその裔をたふれしめもろもろの地にかれらを散さんとしたまへるなり
二八 彼らはバアルペオルにつきて死るものの祭物をくらひたり
二九 斯のごとくその行爲をもてエホバの烈怒をひきいだしければえやみ侵しいりたり
三〇 そのときピネハスたちて裁判をなせりえやみぬ
三一 ピネハスは萬代までとこしへにこのことを義とせられたり
三二 民メリバの水のほとりにてエホバの烈怒をひきおこししかばかれらの故によりてモーセも禍害にあへり
三三

三四 しかばモーセその口唇にて妄にものいひたればなり
三五 もろの民をほろぼさず 三六 反てもろもろの國人とまじりをりてその行爲にならひ
三七 につかへたり 三七 かれらはその子 女を鬼にさゝぐ
三八 罪なき血すなはちカナンの偶像にさゝげたる己がむすこ
三九 むすめの血をながしぬ 斯てくには血にてけがされたり
四〇 姦淫なり 四〇 このゆゑにヱホバの怒その民にむかひて起り
四一 にわたしたまへり 四一 彼等はおのれを恨むるものに制へられ
四二 られたり 四二 ヱホバはしばしば助けたまひしかどかれらは謀略をまうけて逆きそのよこしまに卑くせられたり
四三 四四 されどヱホバはかれらの哭聲をきゝたまひしときそ
四四 四五 の患難をかへりみ 四五 その契約をかれらの爲におもひ
四六 いだしその憐憫のゆたかなるにより聖意をかへさせ給ひて
四七 るゝことを得しめたまへり 四七 われらの神ヱホバよ われらを
四八 は聖名に謝しなんぢのほむべき事をほこらん 四八 イスラエルの神ヱホバはとこしへより永遠までほむべき
かなすべての民はアーメンととなふべし ヱホバを讃稱へよ

第一〇七篇

一 ぶ 二 ヱホバに感謝せよ ヱホバは恵ふかくましましてその憐憫かぎりなし
三 りとりあつめたまへり 三 ヱホバは敵の手よりかれらを贖ひもろもろの地より東西北南よ
四 かれら野にてあれはてたる路にさまよひその住ふべき邑にあはざりき 四 五
五

イ申七・二、一六 士 二出二三・三三 申七・二、一六 士 二・三、二・二 士一・二一、二七 一四、一五 ロ士二・一三、一四 ハ士二・一二、一三、一九、三・六、七 ニ申三二・二九 ホ士二・一三、一五 ヘ士二・二、三・五、六 ト利一七・七 申三二 チ民三五・三三 リ結二〇・一八、三〇、三一 ヌ利一七・七 民一五・三九 結二〇・三〇 ル士二・一四、一五 詩 哥前五・六 ヲ申九・二九 ワ士二・一四 尼九・二七—三〇 カ士二・二六 尼九・一五 哥前一〇・二〇 ヨ士三・九、四・三、六・七、一〇・一〇 タ利二六・四一、四二 レ詩五一・一、六九・一六 賽六三・七 ソ士二・一八 ツ撒九・九 耶四二・一二 ネ代上一六・三五、三六 ナ詩四一・一三 ラ詩一〇六・一、一一 ム詩一一九・六八 太一九・一七 ウ詩一〇六・一〇

六 飢また渇きそのうちの靈魂おとろへたり
七 斯てその困苦のうちにてヱホバをよばはりたれば
八 ヱホバこれを患難よりたすけいだし
七 住ふべき邑にゆかしめんとて直き路にみちびきたまへり
八 願くはヱホバの恵により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバをほめたゝへよ
九 ヱホバは渇きしたふ靈魂をたらはせ飢たるたましひを嘉物にてあかしめ給へばなり
一〇 くらきと死の蔭とに居るもの患難と くろがねとに縛しめらるゝものもなかりき
一一 神の言にそむき至高者のをしへを蔑しめければ
一二 斯てその困苦のうちにてヱホバをよばはりたれば
一三 ヱホバこれを患難よりたすけいだし
一四 くらきと死の蔭より彼等をみちびき出してその械をこぼちたまへり
一五 願くはすべての人はヱホバの恵により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバを讃稱へんことを
一六 ヱホバは銅の門をこぼちちくろがねの關木をたちきりたまへり
一七 愚かなる者はおのが愆の道により己がよこしまによりて惱めり
一八 かれらの靈魂はすべての食物をきらひて死の門にちかづく
一九 かくてその困苦のうちにてヱホバをよばはりたれば
二〇 その聖言をつかはして之をいやし之をその滅亡よりたすけいだしたまふ
二一 願くはすべての人ヱホバの恵とその人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバをほめたゝへよ
二二 かれらは感謝のそなへものをさゝげ喜びうたひてその事跡をいひあらはすべし
二三 舟にて海にうかびて大洋にて事をいとなむ者は
二四 ヱホバのみわざを見また淵にてその奇しき事跡をみる
二五 ヱホバ命じたまへば

ヰ詩一〇七・六、一九、二八　ノ申三二・一〇　オ詩一〇七・四〇　ク詩五〇・一五、一〇　ケ詩三四・一〇　路一　ア詩二二・一一　コ伯三六・八　エ哀三・四二　テ詩七三・二四　路七・三〇　ヤ剌八・二一　マ詩一〇七・一五、二一、三一　ケ詩三四・一〇　路一　ア詩二二・一一　コ伯三六・八　エ哀三・四二　テ詩七三・二四、一一　路七・三〇　ヤ剌八・二一　マ詩一〇七・一五、二一、三一　ケ詩三四・一〇　路一　ア詩二二・一一　五三

サ詩一〇七・六、一九、二八　キ詩六八・六、一四六、七　徒一二・七―一　ユ詩一〇七・八、二一、三一　メ箴四五・二　ミ哀三・三九　シ伯三三・二〇　エ伯三三・二二　詩九・一三、八八・三　ヒ詩一〇七・六、一三、二八　モ王下二〇・四、五　詩一四七・一五、一八　イ詩一〇七・八、一五、三一　ロ利七・一二　詩五〇・一四、一一六・一七　來一三・一五　詩九・一一、七三・二八、一一八・一七　太八・八　セ詩三〇・二、一〇三・　ス伯三三・二八、三〇　詩三〇・三、四九・一五、五六・一三、一〇三・四　ヘ詩一〇七・八、一五、

二六 あらき風おこりてその浪をあぐ かれら天にのぼりまた淵にくだり 患難によりてその靈魂とけさり
二七 (イ)右たにかたぶき醉たる者のごとく踉蹌てなす所をしらず
二八 これを患難よりたづさへいで 狂風をしづめて浪をおだやかになし給へり かれらはおのが靜かなるをよろ
二九 こぶ 斯てヱホバはかれらをその望むところの湊にみちびきたまふ
三〇 ヱホバをほめたゝへんことを かれら民の會にてこれをあがめ長老の座
三一 にてこれを讃稱ふべし
三二 ヱホバは河を野にかはらせ泉をかわける地に變らせ
三三 るものを住はせたまふ されば彼らは己がすまひの邑をたてゝ
三四 實をえたり
三五 民の惡によりてそこを鹵の地にかはらせ給ふ 野を池にかはらせ乾ける地をいづみにかはらせ
三六 ヱホバはかれらの甚くふえひろごれるまでに恵をあたへ その牲畜のへることをも許したまはず
三七 畠にたねをまき葡萄園をまうけてそのむすべる
三八
三九 されどまた虐待くるしみ悲哀によりて減ゆき且うなたれたり
四〇 ヱホバもろもろの君に侮辱をそゝぎ道なき
四一 荒地にさまよはせたまふ 然はあれど貧しきものを患難のうちより擧てその家族をひつじの群のごとくならし
四二 めたまふ 直きものは之をみて喜びもろもろの不義はその口をふさがん
四三 よせヱホバの憐憫をさとるべし すべて慧者はこれらのことに心を

第一〇八篇

一 神よわが心はさだまれり われ謳ひまつらん 稱まつらん わが榮をもてたゝへまつらん
二 ダビデの歌なり 讃美なり
三 よ琴よさむべし われ黎明をよびさまさん 三 ヱホバよ我もろもろの民のなかにてなんぢに感謝し もろもろの國

(イ)詩一〇七・六、一三、二六 ホ詩一〇七・八、一五、二一 ヘ詩二二・二三、二五、チ創一三・一〇、一四・三、一九・二五 リ詩一一四・八 ヌ詩一一一・一 ル出一・七 ヲ王下一〇・三一 ワ伯一二・二一、二四 カ撒前二・八 詩一一三・七、八 ヨ詩七八・五二
(ロ)詩二二・一四、一一九・九、太八・ ニ詩八九・九 ホ詩二・一〇 ヘ詩一一一・一 ト王上一七・一、七 チ詩一一四・八 ヌ創一二・二、一七・一六、二〇

詩篇　一〇八・四―一〇九・一〇

のなかにてなんぢをほめうたはん　四　そは汝のあはれみは大にして天のうへにあがり　五　神よ　おほいなるかな　ねがはくはみづからを天よりもたかくし榮光を全地のうへに擧たまへ　六　ねがはくは右の手をもて救をほどこし　われらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ　七　神はその聖をもていひたまへり　われ甚くよろこばん我シケムをわかちスコテの谷をはからん　八　ギレアデはわがものマナセはわが有なりエフライムも亦わが首のまもりなりユダはわが杖　九　モアブはわが足盥なりエドムにはわが履をなげんペリシテよわがために聲をあげよと　一〇　誰かわれを堅固なる邑にすゝましめんや　誰かわれをエドムにゆきしめんや　一一　神よなんぢはわれらを棄たまひしにあらずや　神よなんぢはわれらの軍とともに出ゆきたまはず　一二　ねがはくは助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ　人のたすけは空しければなり　一三　われらは神によりて勇しくはたらかん　われらの敵をふみたまふものは神なればなり

第一〇九篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一　わが讃たゝふる神よもだしたまふなかれ　二　うらみの言をもて我にかたり　三　かひ　いつはりの舌をもて我をかこみ　四　われ愛するにかれら反りてわが敵となる　われたゞ祈るなり　五　かれらは惡をもてわが善にむくい　われを愛するにかれらは惡をもてわが愛にむくいたり　六　ねがはくは彼のうへに惡人をたてその右方に敵をたゝしめたまへ　七　かれが鞫かるゝときはその罪をあらはにせられ又そのいのりは罪となり　八　その日はすくなくその職はほかの人にえられ　九　その子輩はみなしごとなりその妻はやもめとなり　一〇　その子輩はさすらひて乞丐そのあれたる處よりいできたりて

一一 食をもとむべし　一一彼のもてるすべてのものは債主にうばはれ　かれの勤労は外人にかすめらるべし
一二 恵をあたふる人ひとりだになく　一三かれの孤子をあはれむ者もなく
一三 その裔はたえその名はつぎの世にきえうすべし　一四その父等のよこしまはヱホバのみこゝろに記されその母のつみはきえざるべし　一五かれらは恒にヱホバの前におかれ　その名は地より断るべし　一六かゝる人はあはれみを施すことをおもはず反りて貧しきもの乏しきもの心のいためる者をころさんとして攻たりき　一七かゝる人は詛ふことをこのむ　この故にのろひ己にいたる
一八 恵むことをたのしまず　この故にめぐみ己にとほざかれり　一八かゝる人はころものごとくに詛をきる　この故にのろひ水のごとくにおのれの衷にいり油のごとくにおのれの骨にいれり　一九ねがはくは詛おのれをおほふ衣のごとく帯のごとくなして恒にみづから纏はんことを　二〇これらの事はわが敵とわが霊魂にさからひて悪言をいふ者とにヱホバのあたへたまふ報なり　二一されど主ヱホバよなんぢの名のゆゑをもて我をたすけたまへ　なんぢの憐憫はいとふかしねがはくは我をたすけたまへ　二二われは貧しくしてともしく　わが心うちにて傷をうく　二三わがゆく状はゆふ日の影のごとく　また蝗のごとく吹さらるゝなり　二四わが膝は断食によりてよろめき　わが肉はやせおとろふ　二五われは彼等にそしらるゝ者となれり　かれらは我をみるときは首をふる　二六われをたすけたまへ　二七ヱホバよこれらは皆なんぢの手よりいで　汝のなしたまは我をたすけその憐憫にしたがひて我をすくひたまへ　二八かれらは詛へどもなんぢはめぐみたまふ　かれらの立ときは恥かしめらるれどもなんぢの僕はよろこばん　二九わがもろもろの敵はあなどりを衣おのが恥を外袍のごとくにまとふべし

イ伯五・五、一八・九　ロ伯一八・一九　詩三七・二八　ハ箴一〇・七　ニ出二〇・五　ホ尼四・五　ヘ伯一八・一七　詩二三・六、七　ト詩三四・一六　チ箴一四・一四　リ民五・二二　ヌ詩一〇二・一二、一　ル來一二・一二　ヲ詩二二・六、七　ワ太二七・三九　カ伯三七・七　ヨ撰後一六・一一、　タ賽六五・一四　レ詩三五・二六、一三　ソ一八

ソ詩三五・一八、一一　ネ太二二・四四　可一　二二　詩四五・六、七　七・一七、二一
一・一　二・三六　路二〇・　ナ士五・二　六・一三
ッ詩一六・八、七三・　四二　ラ詩九六・九　キ詩一六・八
二三、一一〇・五、　哥前一五・二五　來　ム民二三・一九　ノ詩二・五、一二
一二一・五　彼前三・　ウ來五・六、六・二〇、　二・五　默一一・一三　班　オ詩六八・二一　略三　五、一〇七・三二、
一一三　ク士七・五、六　一〇九・三〇、一一四　フ
九・一　ヤ賽五三・一二　ケ伯三八・一―四一・　一四　默一五・三　八　テ太六・二六、三三
詩九二・五、一三九　エ　コ詩一四五・四、五、一　ヘ詩八六・五、一〇三・

三〇　われはわが口をもて大にヱホバに謝しおほくの人のなかにて讃まつらむ　三一　ヱホバはまづしきものの右にたちてその靈魂を罪せんとする者より之をすくひたまへり

ダビデのうた

第一一〇篇

一　ヱホバわが主にのたまふ　我なんぢの仇をなんぢの承足とするまではわが右にざすべし　二　ヱホバはなんぢのちからの杖をシオンよりつきいださしめたまはん　汝はもろもろの仇のなかに王となるべし　三　なんぢのいきほひの日になんぢの民は聖なるうるはしき衣をつけ　心よりよろこびて己をさゝげん　なんぢは朝の胎よりいづる壯きものの露をもてり　四　ヱホバ誓をたてて聖意をかへさせたまふことなし　汝はメルキセデクの狀にひとしくとこしへに祭司たり　五　主はなんぢの右にありてそのいかりの日に王等をうちたまへり　六　もろもろの國のなかにて審判をおこなひたまはん　此處にも彼處にも屍をみたしめ　寛濶なる地をすぶる首領をうちたまへり　七　かれ道のほとりの川より汲てのみ斯てかうべを擧ん

第一一一篇

一　ヱホバを讃たゝへよ　我はなほきもろもろの會あるひは公會にて心をつくしてヱホバに感謝せん　二　ヱホバのみわざは大なり　すべてその事跡をしたふものは之をかんがへ究む　三　その行ひたまふことは榮光ありまた稜威あり　その公義はとこしへに失することなし　四　ヱホバはその奇しきみわざを人のこゝろに記しめたまへり　ヱホバはめぐみと憐憫とにて充たまふ　五　ヱホバはもろもろの國の所領をおのれの民にあたへてまへりまたその契約をとこしへに心にとめたまはん　六

その作爲のちからを之にあらはしたまへり
七 その手のみわざは眞實なり公義なり
八 しかれらは世々かぎりなく堅くたち眞實と正直とにてなれり
九 ヱホバはその民のために救贖をほどこし その
一〇 契約をとこしへに立たまへり ヱホバの名は聖にしてあがむべきなり
これらを行ふものは皆あきらかなる聰ある人なり ヱホバの頌美はとこしへに失るることなし

第一一二篇

一 ヱホバを讃まつれ ヱホバを畏れてそのもろもろの誡命をいたく喜ぶものはさいはひなり
二 かゝる人のすゑは地にてつよく直きものの類はさいはひを得ん
三 富と財とはその家にあり その公義はとこしへにうすることなし
四 直き者のために暗きなかにも光あらはる 彼は惠ゆたかに憐憫にみつ
五 る義しきものなり 惠をほどこし貸ことをなす者はさいはひなり かゝる人は審判をうくるときおのが訴をさ
六 さへうべし 又とこしへまで動かさるゝことなかるべし 彼はあし
七 き音信によりて畏れず その心ヱホバに依賴みてさだまれり
八 その心かたくたちて懼るゝことなく敵につきて
九 の願望をつひに見ん 彼はちらして貧者にあたふ その正義はとこしへにうすることなし その角はあがめを
一〇 うけて擧られん 惡者はこれを見てうれへもだえ切齒しつゝ消さらん また惡きものの願望はほろぶべし

第一一三篇

一 ヱホバをほめまつれ 汝等ヱホバの僕よほめまつれヱホバの名をほめまつれ
二 今より永遠にいたるまでヱホバの名はほむべきかな
三 日のいづる處より日のいる處までヱホバの名はほめらるべし
四 ヱホバはもろもろの國の上にありてたかくわれらの神ヱホバにたぐふ
五 その榮光は天よりもたかし

イ 獻一五・三 ロ 詩一九・七 ハ 箴四〇・八 一八 路一・四九 ニ 詩一九・九 三 太五・六 伯二八・七、九・ 獻一五 二八 傳一二・一三 ホ 太一一・二一 路一・七 チ 詩一二八・一 リ 詩一一九・一六、三 五、四七、七〇、一四 ヌ 詩二五・一三、三七・ 二六、一〇二・二八 ル 太六・三三 ヲ 伯一一・一七 九七・一一 ワ 詩三七・二六 三五 カ 詩一五・五 ヨ 獻一〇・七 タ 獻一・三三 レ 詩五七・七 ソ 詩六四・一〇 ツ 獻一・三三 ネ 詩五九・一〇、一一 ナ 哥後九・九 ラ 申二四・一三 一一二・三 ム 詩七五・一〇 ウ 路一三・二八 ヰ 詩三七・三 ノ 詩五八・七、八 オ 獻一〇・二八、一一 ク 詩一三五・一 ヤ 但二・二〇 マ 賽五九・一九 馬一一・二一 ケ 詩九七・九、九九・二 フ 詩八・二 コ 詩八九・六

エ詩一一・四、一三八・六　サ毋前二・五　シ書三・一三、一六　ス詩四二・三、一〇・七　ヒ哈三・八　フ詩八一・五

七 べき者はたれぞや 寶座をその高處にする己をひくゝして
八 天と地とをかへりみ給ふ
九 乏しきものを糞土よりあげて
一〇 もろもろの諸侯とともにすわらせ
一一 その民のきみたちと共にすわらせたまはん
一二 又はらみなき婦に家をまもらせ おほくの子女のよろこばしき母たらしめたまふ ヱホバを讃まつれ

第一一四篇

一 イスラエルの民エジプトをいでヤコブのいへ異言の民をはなれしとき
二 聖所となりイスラエルはヱホバの所領となれり
三 海はこれを見てにげヨルダンは後にしりぞき
四 山は牡羊のごとくをどり小山はこひつじのごとく躍れり
五 海よなんぢ何とてにげしりぞくやヨルダンよなんぢ何とて後にしりぞくや
六 山よなにとて牡羊のごとくをどるや小山よなにとて小羊のごとく躍るや
七 地よ主のみまへヤコブの神の前にをのゝけ
八 主はいはを池にかはらせ石をいづみに變らせたまへり

第一一五篇

一 ヱホバよ榮光をわれらに歸するなかれ われらに歸するなかれ なんぢの慈愛によりてたゞ名にのみ歸したまへ
二 もろもろの國人はいかなればいふ 今かれらの神はいづくにありやと
三 然どわれらの神は天にいます 神はみこゝろのまゝにすべての事をおこなひ給へり
四 かれらの偶像は金にして人の手のわざなり
五 その偶像は口あれどいはず目あれどみず
六 耳あれどきかず鼻あれどかゞず
七 手あれどとらず脚あれどあゆまず喉より聲をいだすことなし
八 此をつくる者とこれに依賴むものとは皆これにひとしからん
九 イスラエルよなんぢヱホバに依賴めヱホバはかれらの助かれらの盾なり
一〇 アロンの家よなんぢヱホバに依賴めヱホバはかれらの助かれらの盾なり

エ詩一一・四、一三八・六　サ毋前二・五　シ書三・一三、一六　ス詩四二・三、一〇・七　ヒ哈三・八　フ詩八一・五　ヘ出六・七、一九・六、二五・八、二九・四　ホ詩二九・六、六八・三五　マ詩一〇七・三六・三二　ミ出一四・二一　詩七七・一六　ム詩六八・三五　メ出六・七、一九・六、二五・八、二九・四　モ出一七・六　ヤ申三二・一五　ユ詩八一・五　ヨ詩一一五・一二　ラ毋前二・八　詩一〇七・三六・三二　リ出一五・一七　ル代上一六・二六　詩九六・五　レ詩一一五・一　ロ申四・二八　詩一一三・三　ワ詩四二・三、一〇・七　ヰ出一三・三　ノ詩一一八・一四　オ詩二九・六、六八・三五　ク哈三・六　ヤ詩一〇七・三六　マ詩一一八・一四　ケ詩一一五・一　フ詩一一五・一　コ詩一一五・一　エ詩一一五・一　テ詩一一五・一　ア伯三六・七　サ毋前二・五　キ出一三・三　ユ詩八一・五

二 ヱホバに依頼めり ヱホバはかれらの助かれらの盾なり
三 スラエルの家をめぐみアロンのいへをめぐみ
一四 願くはヱホバなんぢらを增加へ なんぢらとなんぢら
一五 をつくりたまへるヱホバに惠まるゝ者なり 一六 天は ヱ
一七 死人も幽寂ところに下れるものもヤハを讃稱ふること
一八 を讃まつらむ 汝等ヱホバをほめたゝへよ

第一一六篇

一 われヱホバを愛しむ そはわが聲とわが願望とをきゝたまへばなり
二 ぶけたまひしが故に われ世にあらんかぎりヱホバを呼まつらむ 三 死の繩われをまとひ陰府の
四 くるしみ我にのぞめり われは患難とうれへとにあへり その時われヱホバの名をよべり
五 靈魂をすくひたまへと ヱホバは恩惠ゆたかにして公義ましませり ヱホバよ願くはわが
六 愚かなるものを護りたまふ われ卑くせられしがヱホバ我をすくひたまへり
七 われ 汝はわがたましひを死より わが
八 れヱホバは豐かに待ひたまへばなり 九 われは活るものの國にてヱホバの前にあゆまん
一〇 顚蹶よりたすけいだしたまひき
一一 つゝもなほ信じをれり 一二 われ惶てしときに云らく すべての人はいつはりなりと
一三 ろもろの恩惠をヱホバにむくいんや 一四 われ救のさかづきをとりてヱホバの名をよび
一五 のまへにてヱホバにわが誓をつくのはん 一五 ヱホバの聖徒の死はそのみまへにて貴とし
一六 一六 ヱホバよ誠にわれは

イ詩一二八・二、四　ロ創一・二　詩九六・五　ハ創一四・一九
ニ詩六・五、八八・一〇　ホ詩一一三・二　但二　ヘ詩一一二　賽三八・一
ト詩一八・四―六　チ詩一〇三・八　リ歌九・一五　ヌ耶六・一六　太一一
ヘ詩一八・一　詩一一九・一三七、一四五・一七　ル詩一三・六、一一九　ヲ詩五六・一三
ワ詩二七・一三　カ哥後四・一三　ヨ詩三一・二二　タ羅三・四　レ詩二二・二五、一一

一七 なんぢの僕（しもべ）なり われはなんぢの婢女（はしため）の子（こ）にして汝（なんぢ）のしもべなり
一八 そなへものとして汝（なんぢ）にさゝげん われヱホバの名（な）をよばん
一九 はん エルサレムよ汝（なんぢ）のなかにてヱホバのいへの大庭（おほには）のなかにて此（これ）をつくのふべし ヱホバを讃まつれ

第一一七篇

一 もろもろの國（くに）よなんぢらヱホバを讃（ほめ）まつれ もろもろの民（たみ）よなんぢらヱホバを讃まつれ
二 そはわれらに賜ふその憐憫（あはれみ）はおほいなり ヱホバの眞實（まこと）はとこしへに絶（たゆ）ることなしヱホバを讃まつれ

第一一八篇

一 ヱホバに感謝（かんしや）せよヱホバは恩惠（めぐみ）ふかくその憐憫（あはれみ）とこしへに絶ることなし
二 イスラエルはいざ言ふべし その憐憫はとこしへにたゆることなしと
三 アロンの家はいざ言ふべし そのあはれみはとこしへにたゆることなしと
四 ヱホバを畏るゝものはいざ言ふべし その憐憫はとこしへにたゆることなしと
五 われ患難（なやみ）のなかよりヱホバをよべばヱホバこたへて我（われ）をひろき處におきたまへり
六 ヱホバわが方にいませばわれ懼れず 人われに何をなしえんや
七 ヱホバはわれを助くるものとともに我がかたに坐す この故にわれを憎（にく）むものにつきての願望（ねがひ）をわれ見（み）ることをえん
八 ヱホバに依賴むは人にたよるよりも勝りてよし
九 ヱホバに依賴むは牧伯にたよるよりも勝りてよし
一〇 もろもろの國はわれを圍めり われヱホバの名によりてかれらを滅さん
一一 かれらは我をかこめり我をかこめり ヱホバの名によりてかれらを滅さん
一二 かれらは蜂のごとく我（われ）をかこめり かれらは荊（いばら）の火のごとく消（きえ）たり われはヱホバの名によりてかれらを滅さん
一三 汝われ

ネ詩八六・一六 四、一一、一四六・五 ヨ詩四〇・四、六二・ ア申一・四四
ナ利七・一二 詩五〇 ウ羅一五・一一 八、九 耶一七・五、 サ傳七・六 創一・一〇
詩一一五・九―一八 一三・六 七
オ詩一一五・一二 衆 エ詩一四六・三
ク詩一二〇・一 ケ詩五四・四 テ詩八八・一七
ヤ詩一八・一九 フ詩五九・一〇
マ詩二七・一、五六・
ム詩九六・八、一〇〇・ 四、一三五・二
ノ代上一六・八、三四 詩一〇六・一、一〇
ラ詩一一六・一四
詩一一九・一二五、
一四三・一二
ソ詩七二・一四
ツ詩一一九・一二五、
一四三・一二
六・一八 拿二・九

一四 を倒さんとしていたく刺つれど ヱホバわれを助けたまへり
一五 歡喜(よろこび)とすくひとの聲はたゞしきものの幕屋にあり ヱホバのみぎの手はいさましき動作をなしたまふ
一六 ヱホバのみぎの手はたかくあがり ヱホバの右の手はいさましき動作をなしたまふ
一七 われは死ることなかりき(ロ)存(ながら)へてヤハの事跡をいひあらはさん
一八 ヤハはいたく我をこらしたまひしかど死には付したまはざりき
一九 わがために義(ゑ)の門をひらけ 我そのうちにいりてヤハに感謝せん
二〇 こはヱホバの門なり たゞしきものはこれにいるべし
二一 われ汝に感謝せん なんぢ我にこたへてわが救となれり
二二 石はすみの首石となれり
二三 これヱホバの成たまへる事にしてわれらの目にあやしとする所なり
二四 この日はヱホバの設けたまへる日なり われらはこの日によろこびたのしまん
二五 ヱホバよねがはくは我儕をいま榮えしめたまへ ヱホバよねがはくはわれらを今すくひたまへ
二六 ヱホバの名によりて來るものは福ひなり われらヱホバの家よりなんぢらを祝せり
二七 ヱホバは神なり われらに光をあたへたまへり 繩をもて祭壇の角にいけにへをつなげせよ
二八 なんぢはわが神なり我なんぢに感謝せん なんぢはわが神なり我なんぢを崇めまつらん
二九 ヱホバは恩惠ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし

第一一九篇

アレフ

一 おのが道をなほくしてヱホバの律法をあゆむ者はさいはひなり
二 まもり心をつくしてヱホバを尋求むるものは福ひなり
三 かゝる人は不義をおこなはずして ヱホバの道をあゆむ者はさいはひなり
四 ヱホバはわが力わが歌にしてわが救となりたまへり
五 ヱホバのみぎの手はいさましき動作をなしたまふ
六 われは死ることなかりき
七 われはヤハの事跡をいひあらはさん
八 ヤハはいたく我をこらしたまひしかど死には付したまはざりき
九 わがために義の門をひらけ 我そのうちにいりてヤハに感謝せん
一〇 こはヱホバの門なり たゞしきものはこれにいるべし
一一 われ汝に感謝せん なんぢ我にこたへてわが救となりたまへり
一二 石はすみの首石となれり
一三 これヱホバの成たまへる事にしてわれらの目にあやしとする所なり
一四 この日はヱホバの設けたまへる日なり われらはこの日によろこびたのしまん
一五 ヱホバよねがはくは我儕をいま榮えしめたまへ
一六 ヱホバよねがはくはわれらを今すくひたまへ ヱホバの名によりて來るものは福ひなり われらヱホバの家よりなんぢらを祝せり
一七 ヱホバは神なり われらに光をあたへたまへり 繩をもて祭壇の角にいけにへをつなげせよ
一八 なんぢはわが神なり我なんぢに感謝せん なんぢはわが神なり我なんぢを崇めまつらん
一九 ヱホバは恩惠ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし

アレフ

一 おのが道をなほくしてヱホバの律法をあゆむ者はさいはひなり
二 まもり心をつくしてヱホバを尋求むるものは福ひなり
三 かゝる人は不義をおこなはずして ヱホバの道を

イ 出一五・二　賽一二・二　水哥後六・九
ロ 出一五・六　詩二四・七　賽三五・八　默二一・二七、二二・一四、
ハ 詩六・五　哈一・一二　チ 賽三・一〇　路二〇・一七　徒四・一一　弗二・二〇　彼前二・四、七
ヌ 詩一一八・一四　リ 詩一一六・一　ル 太二一・四二　可一二・一〇　ヲ 太二一・九、二三・三九　可一一・九
ワ 帖八・一六　彼前二・九　ヨ 詩一一八・一　タ 詩一二八・一　レ 約壹三・九、五・一八　カ 出一五・二　賽二五・九　路一九・三八　約一二・一三
ソ 伯二二・二六　約壹二・二八　ツ 詩一一九・一七一　ネ 代下一五・一五

四 あゆむなり　ヱホバよなんぢ訓諭をわれらに命じてねんごろに守らせたまふ　五
六 その律法をまもらせたまはんことを　六 われ汝のもろもろの誡命にこゝろをとむるときは恥ることあらじ　七
七 (ソ)れ汝のたゞしき審判をまなばゞ 直き心をもてなんぢに感謝せん　八
八 なかれ　われは律法をまもらん　われを棄はてたまふ

九 ○ ベテ

九 わかき人はなににによりてかその道をきよめん　聖言にしたがひて愼むのほかぞなき　一〇
一〇 をたづねもとめたり　願くはなんぢの誡命より迷ひいださしめ給ふなかれ　一一 われ汝にむかひて罪ををかすまじきために汝のことばをわが心のうちに藏へたり　一二 讃べきかなヱホバよねがはくは律法をわれに教へたまへ　一三
一三 わが口唇をもてなんぢの口よりいでしもろもろの審判をのべつたへたり　一四 我もろもろの財貨をよろこぶごとくに汝のあかしの道をよろこべり　一五 我なんぢの訓諭をおもひ汝のみちに心をとめん
一五 聖言をわするゝことなからん　一六 われは律法をよろこびなんぢわが道をかたくたてて

一七 ○ ギメル

一七 ねがはくは汝のしもべを豐にあしらひて存へしめたまへ　一八 なんぢわが眼をひらきなんぢの法のうちなる奇しきことを我にみせたまへ　一九
一八 われは世にある旅客なり　我になんぢの誡命をかくしたまふなれ　二〇 斷るときなくなんぢの審判をしたふが故にわが靈魂はくだくるなり　二一 汝はたかぶる
一九 者をせめたまへり　なんぢの誡命よりまよひいづる者はのろはる　二二 我なんぢの證詞をまもりたり　我より謗と

ナ詩一一九・二一、一一八　ラ詩三七・三一　踏二　ム詩二五・四、一一九・二六、三三、六四、六　ウ詩三四・一一　ノ詩一・二、一一九・三　ク創四七・九　代上二九、五一　ヤ詩一一九・二一、一一九・一三五　オ詩一一六・七　ケ詩三九・八　マ詩一一九・一〇、一一〇、一一八　コ詩四二・一、二、六三　エ詩一一九・一〇八、一二四、一二三、四八、七八　ヨ詩二五・四、一一九・一二　哥後五・六　ク創四七・九　代上二九　來一一・一三　十詩四二・一、二、六三　ヤ詩一一九・一〇、一一、八四・二、一一　一〇、一一八　九・四〇、一三一　ケ詩三九・八

二三 あなどりとを取去たまへ 二三 又もろもろの侯は坐して相語りわれをそこなはんとせり 然はあれど汝のしもべは
二四 律法をふかく思へり(イ) 二四 汝のもろもろの證詞はわれをよろこばせわれをさとす者なり(ロ)

二五 ○ ダレテ

二五 わが靈魂は塵につきぬ(ハ) なんぢの言にしたがひて我をいかしたまへ(ニ)
二六 汝こたへを我になしたまへり なんぢの律法をわれに教へたまへ(ホ)
二七 汝こたへを我になしたまへり なんぢの律法をわれに教へたまへ 二七 なんぢの訓諭のみちを我にわきまへしめたまへ
二八 まへ われ汝のくすしき事跡をふかく思はん(ヘ) 二八 わがたましひ痛めるによりてとけゆく ねがはくは聖言にしたがひて我にたちからを予へたまへ
二九 ひて我にちからを予へたまへ 二九 願くはいつはりの道をわれより遠ざけ なんぢの法をもて我をめぐみたまへ
三〇 われは眞實のみちをえらび 恒になんぢのもろもろの審判をわが前におけり 三〇 われは眞實のみちをえらび 恒になんぢのもろもろの審判をわが前におけり
三一 心をひろく爲たまふべし 三一 われ汝のいましめの道をはしらんかしこ 我はくは我をはづかしめ給ふなかれ
三二 離れず ヱホバよねがはくは なんぢの律法のみちを我にをしへたまへ われ終にいたるまで之をまもらん(ヌ)

三三 ○ ヘ 三三 ヱホバよ願くはなんぢの律法のみちを我にをしへたまへ われ終にいたるまで之をまもらん(リ)
三四 智慧をあたへ給へ さらば我なんぢの法をまもり 心をつくして之にしたがはん 三四 われに智慧をあたへ給へ さらば我なんぢの法をまもり 心をつくして之にしたがはん
三五 ふましめたまへ われその道をたのしめばなり(ヲ) 三五 われに汝のいましめの道をふましめたまへ われその道をたのしめばなり
三六 わが心をなんぢの證詞にかたぶかしめて 貪利にかたぶかしめ 三六 わが心をなんぢの證詞にかたぶかしめて 貪利にかたぶかしめ
三七 給ふなかれ 三七 わが眼をほかにむけて虚しきことを見ざらしめ 我をなんぢの途にて活し給へ(ワ)
三八 わが眼をほかにむけて虚しきことを見ざらしめ 我をなんぢの途にて活し給へ 三八 ひたすらに汝をおそるる者にあたへて汝のしもべにたてしめ給へ(カ)

イ 詩一一九・一五　ロ 詩一一九・七七、九二　ハ 詩四四・二五　ニ 詩一一九・四〇、ヘ 詩一一九・五、六　ト 詩一〇七・二六　チ 王上四・二九　撒六・一一　リ 詩一一九・一二　ヌ 詩一一九・一一二　ル 詩一一九・七三　ヲ 結三三・三一　可七・三七　ワ 結三三・二一、三二　路一二・四〇　カ 撒三三・一五　ヨ 徴二三・五　タ 詩一一九・四〇　レ 母後七・二五　ソ 來一三・五　太一〇・二二　獄二・二六　ツ 詩一一九・一六　ネ 詩一一九・一六　ナ 撒三三・一五

三九 おそるゝ汝のしもべに 聖言をかたくしたまへ
四〇 善し 我なんぢの訓諭をしたへり 願くはなんぢの義をもて我をいかしたまへ

ワウ

四一 エホバよ聖言にしたがひてなんぢの憐憫なんぢの
四二 拯救を我にのぞみたまへ
四三 に答ふることをえん われ聖言によりたのめばなり
四四 われなんぢの審判をのぞみたればなり
四五 われたえずいや永久になんぢの法をまもらん
四六 もとめたるにより障なくしてあゆまん われまた王たちの前になんぢの證詞をかたりて恥ることあらじ
四七 我わが愛するなんぢの誡命をもて己をたのしましめん
四八 をふかく思はん われ手をわがあいする汝のいましめに擧げ なんぢの律法

ザイン

四九 ねがはくは汝のしもべに宣ひたる聖言をおもひいだしたまへ 汝われに之をのぞましめ給へり
五〇 の聖言はわれを活しゝがゆゑに 今もなほわが艱難のときの安慰なり
五一 高ぶる者おほいに我をあざわらへり さ
五二 れど我なんぢの法をはなれざりき
五三 なんぢの法をすつる惡者のゆゑによりて 我はげしき怒をおこしたり
五四 エホバよわれ汝がふるき往昔よりの審判をおもひいだして 自から慰めたり
五五 歌となれり なんぢの律法はわが旅の家にてわが
五六 守りしによりてこの事をえたるなり われ汝のさとしを

ソ詩一一九・二〇 四九、一五六、一五 九・七七 二六・一、二
ツ詩一一九・二五、三 九 ナ詩一三八・一 太一 ラ詩一一九・一六
七、八八、一〇七、一 ネ詩一〇六・四、一一 〇・一八、一九 徒 ム詩一一九・一五
ウ詩一一九・七四、八 ノ耶二〇・七
一、一四七 オ伯二三・一一 詩
牛羅一五・四 四四・一八、一一九・
一五七 ク剛九・三 十詩六三・六

五七　ヘテ
五八　ヱホバはわがうくべき有なり　われ汝のもろもろの言をまもらんといへり　五八
五九　みを請求めたり　ねがはくは聖言にしたがひて我をあはれみたまへ　五九
六〇　なんぢの證詞にむけをわれなんぢの誡命をまもるに速けくしてたゆたはざりき　六〇
六一　たれども　我なんぢの法をわすれざりき　六一
六二　われは汝をおそるゝ者　またなんぢの訓諭をまもるものの侶なり　六二
六三　願くはなんぢの律法をわれにをしへたまへ　六三
六四　テテ　ヱホバよ汝のあはれみは地にみちたり　六四

六五　ヨー
六六　ヱホバよなんぢ聖言にしたがひ　恵をもてその僕をあしらひたまへり　六六
六七　くはわれに聰明と智識とををしへたまへ　われ汝のいましめを信ず　六七
六八　なんぢは善にしてまた善をおこなひたまふ　ねがはくは汝のおきてを我にをしへたまへ　六八
六九　だてゝ我にさからへり　われ心をつくしてなんぢの訓諭をまもらん　六九
七〇　かれらの心はこえふとりて脂のごとし　七〇
七一　されど我はなんぢの法をたのしむ　七一
七二　びえたり　なんぢの口の法はわがためには千々のこがね白銀にもまされり　七二

七三　ヤー
七四　なんぢの手はわれを造りわれを形づくれり　ねがはくは智慧をあたへて我になんぢの誡命をまなばしめたまへ　七四
七五　ヨーデ

イ詩一六・五　耶一〇・一八　ヘ詩一一九・一二、一三　三一・一八、一九　來一二・一一
ロ詩一一九・四一　哀三・二四　一六　哀三・二五　ト詩一一九・七一　耶三一・一九　チ詩一〇六・一、一〇
リ詩一一九・一二、一三　ヌ伯一三・四　詩一〇七・一　太一九・一七　ル詩一七・一〇　箴六・六
ヲ詩一一九・三五　カ詩一九・一〇、一一　ワ詩一一九・六七　來一二・一〇　徒二八・二七　ヨ詩一一九・九・二　一二・一一　一二・一〇、一一　一二・一〇　徒二八・二七　箴八・九・一二七

七四 まへ　七四　なんぢを畏るゝものは我をみて喜ばん　われ聖言(ソ)によりて望をいだきたればなり

七五 ヱホバよ我はなんぢの審判のたゞしく又なんぢが眞實(まこと)をもて我をくるしめたまひしを知る

七六 ねがはくは汝(なんぢ)のしもべに宣ひたる聖言(みことば)にしたがひて汝の仁慈(いつくしみ)をわが安慰(なぐさめ)となしたまへ

七七 なんぢの法(のり)はわが樂(たの)しめるところなり(ナ)

七八 高ぶるものに恥(はぢ)をかうぶらせたまへ　かれらは虚僞(いつはり)をもて我をくつがへしたれば(ニ)なり　さされど我(われ)なんぢの訓諭(きとし)をふかくおもふ

七九 なんぢを畏るゝ者となんぢの證詞をしるものとをわれにかへらしめたまへ

八〇 わがこゝろを全くして汝(なんぢ)のおきてを守(まも)らしめたまへ　さらばわれ恥(はぢ)をかうぶらじ

カフ

八一 わが靈魂(たましひ)はなんぢの救(すくひ)をしたひてたえいるばかりなり　然(され)どわれなほ聖言(みことば)によりて望(のぞみ)をいだく

八二 なんぢ(ネ)の審判(さばき)をおこなひたまふや　たかぶる者(もの)われを害(そこな)はんとて陥(あな)をほれり　かれらはなんぢの法(のり)にしたがはず

八三 何(いつ)のとき我(われ)をなぐさむるやといひつゝ　我みことばを慕(した)ふによりて眼おとろふ

八四 なりぬれども　尚(なほ)なんぢの律法をわすれず

八五 審判(さばき)をおこなひたまふや　たかぶる者われを害はんとて陥をほれり　かれらはなんぢの法にしたがはず

八六 なんぢの誡命(いましめ)はみな眞實(まこと)なり　かれらは虚僞(いつはり)をもて我(われ)をせむ　ねがはくは我をたすけたまへ

八七 んぢの誡命はみな眞實なり　かれらは虚僞をもて我をせむ　ねがはくは我をたすけたまへ

八八 んど我をほろぼせりされど我はなんぢの訓諭をすてざりき　願(ねがは)くはなんぢの仁慈(いつくしみ)にしたがひて我(われ)をいかしたまへ　然ばわれ御口(みくち)よりいづる證詞(あかし)をまもらん

ラメテ

一〇、一一、一九　四四
ヨ伯一〇・八　詩一〇〇・三、一三九・一四　タ詩一一九・三四、一

レ詩三四・二　ソ詩一一九・四九、一　四七　ツ來一二・一〇　ネ詩一一九・四一　ナ詩一一九・二四、四七、一七四　ラ詩二五・三　ム詩一一九・八六　ウ詩一一九・二三

詩六九・三　ク伯三〇・三〇　ヤ詩三九・四　マ默六・一〇　ケ詩三五・七　微一六　コ詩一四九・七八　エ詩一一九・四〇

詩三五・一九、三八　フ詩三五・一九　ヘ詩一一九・二七

八九 ヱホバよみことばは天にてとこしへに定まり
九〇 なんぢの眞實はよろづ世におよぶ なんぢ地をかたく立(イ)たまへば地はつねにあり
九一 これらのものはなんぢの命(ロ)令にしたがひ恒にありて今日にいたる 萬のものはなんぢの僕(ハ)なればなり
九二 なんぢの法わがたのしみとならざりしならば我はつひに患難のうちに滅びたるならん
九三 われ恒になんぢの訓諭をわすれじ 汝これをもて我をいかしたまへばなり
九四 我はなんぢの有なりねがはくは われ汝のさとしを求めたり
九五 惡きものは我をほろぼさんとして窺ひぬ われは唯なんぢの
九六 もろもろの證詞をおもはん 我もろもろの純全に限あるをみたり されど汝のいましめはいと廣し

メム

九七 われなんぢの法をいつくしむことといかばかりぞや われ終日これを深くおもふ
九八 なんぢの誡命はつねにわれとともにありて 我をわが仇にまさりて慧からしむ
九九 我はなんぢの證詞をふかくおもふが故に わがすべての師にまさりて智慧おほし
一〇〇 我はなんぢの訓諭をまもるがゆゑに 老たる者にまさりて事をわきまふるなり
一〇一 われ聖言をまもらんために わが足をとゞめてもろもろのあしき途にゆかしめず
一〇二 我なんぢの審判をはなれざりき なんぢ我をしへたまへばなり
一〇三 ひしにまさりて我なんぢのみことばの滋味はわが腭にあまきこといかばかりぞや 蜜のわが口に甘きにまさりて智慧をえたり このゆゑに虚僞のすべての途をにくむ

ヌン

一〇五 なんぢの聖言はわがあしの燈火わが路のひかりなり
一〇六 われなんぢのたゞしき審判をまもらんことをちかひ且かたくせり
一〇七 われ甚いたく苦しめり ヱホバよねがはくは聖言にしたがひて我をいかしたまへ
一〇八 ヱホバよねがはくはわが口の自(ロ)發(ハ)をうけ給ひ なんぢの審判をわれにをしへたまへ

イ 詩八九・二 太二四 ロ 耶三三・二五 ハ 詩一一九・二四、三五 彼前 ニ 太五・一八、二四・ ホ 詩一・二 ヘ 申四・六、八 ト 提後三・一五 チ 伯三・七—九 リ 箴一・二五 ヌ 詩一九・一〇 箴八 ル 詩一一九・一二八 ヲ 箴六・二三 ワ 尼一〇・二九 カ 詩一一九・八八

一〇九　よねがはくは誠意(まごころ)より(ヨ)するわが口の獻物(けもの)をうけて　なんぢの審判(さばき)をしへたまへ(ク)

一一〇　われ汝(なんぢ)のもろもろの證詞(あかし)をとこしへにわが嗣業(ゆづり)とせり　これらの證詞(あかし)はわが心(こころ)をよろこばしむ(ナ)

一一一　われ永遠(とこしへ)にこゝろを傾(かたぶ)けたり　之(これ)にこゝろを傾けたり

一一二　われ汝のおきてを終(をは)まで(ラ)とこしへに守(まも)らんとて

〇サメク

一一三　われ二心(ふたごころ)のものをにくみ　汝(なんぢ)のおきてを愛(いつく)しむ

一一四　なんぢはわが匿(かく)るべき所わが盾(たて)なり　われ聖言(みことば)(ウ)によりて望(のぞみ)をいだく

一一五　惡(あし)きをなすものよ我(われ)をはなれされ　われわれが神(かみ)のいましめを守(まも)らん

一一六　聖言(みことば)にしたがひ我(われ)をさゝへて生存(ながらへ)しめたまへ　わが望(のぞみ)につきて恥(はぢ)なからしめたまへ

一一七　われを支(さゝ)へたまへ　さらばわれ安(やす)けかるべし　われ恒(つね)になんぢの律法(おきて)にこゝろをそゝがん

一一八　すべて律法(おきて)よりまよひいづるものを　汝(なんぢ)かろしめたまへり　かれらの欺詐(あざむき)はむなしければなり

一一九　なんぢは地(ち)のすべての惡(あし)きものを渣滓(かなかす)(ク)のごとく除(のぞ)きさりたまふ　この故にわれ汝(なんぢ)の愛(あい)す

一二〇　わが肉體(にくたい)なんぢを懼(おそ)るゝによりてふるふ　我はなんぢの審判(さばき)をおそる

〇アイン

一二一　われは審判と公義(ただし)とをおこなふ　我(われ)をすてて虐(しへた)ぐるものに委(ゆだ)ねたまふなかれ

一二二　福祉(さいはひ)をえしめたまへ　高(たか)ぶるものの我(われ)をしへたぐるを容(ゆる)したまふなかれ

一二三　わが眼(め)はなんぢの救(すくひ)となんぢのただしき聖言(みことば)とをしたふによりてつかれおとろふ

一二四　ねがはくはなんぢの憐憫(あはれみ)にしたがひてなんぢの僕(しもべ)をあしらひ　我(われ)に

(ヨ)詩一一九・一〇九、二　ラ詩一一九・三三　ノ詩二五・二一　羅五・一　ヤ哈三・一六　マ來七・二二　ケ詩一一九・八一、
(ク)詩一一九・一二、二　ム詩三二・七、九一・一　五、九・三三、一〇　ヤ哈三・一六　ヤ哈三・一六　ヤ哈三・一六

一二五　なんぢの律法(おきて)をしへたまへ
一二六　(イ)彼等(かれら)はなんぢの法(のり)をすてたり
一二七　なき金(こがね)よりもまさりて汝(なんぢ)のいましめを愛(あい)す
一二八　おもふ我(われ)すべての(ニ)いつはりの途(みち)をにくむ

○

一二九　汝(なんぢ)のあかしは妙(たへ)なり　かゝるが故(ゆゑ)にわが靈魂(たましひ)これをまもる
一三〇　聖言(みことば)うちひらくれば光(ひかり)をはなちて　愚(おろ)かなる(ホ)ものをさとからしむ
一三一　我(われ)(ヘ)なんぢの誡命(いましめ)をしたふが故(ゆゑ)にわが口(くち)をひろくあけて喘(あへ)ぎもとめたり
一三二　(ト)聖名(みな)を愛(あい)するものにつねのごとくなんぢの(チ)身(み)をかへして我(われ)をあはれみたまへ
一三三　聖言(みことば)をもてわが步履(あゆみ)をたゞしくしてわが(リ)罪(つみ)をわれに主(しゆ)たらしめたまふなかれ
一三四　へもろもろの邪曲(よこしま)をわれに恒(つね)になしたまふごとく
一三五　(ヌ)われを人(ひと)のしへたげより贖(あがな)ひたまへ　さらばわれ訓諭(みさとし)をまもらん
一三六　(ル)ねがはくは聖顏(みかほ)をなんぢの僕(しもべ)のうへにてらし　汝(なんぢ)のおきて(ヲ)を我(われ)にをしへ給(たま)へ
一三七　(ワ)わが眼(め)のなみだ河(かは)のごとくに流(ながら)るるはなんぢの(カ)律法(おきて)をまもらざるによりてなり

○

一三八　(ヨ)ヱホバよなんぢは義(ただ)しくなんぢの審判(さばき)はなほし
一三九　わが敵(てき)(レ)なんぢの聖言(みことば)をわすれたるをもてわが熱心(ねつしん)(タ)われを滅(ほろぼ)せり
一四〇　汝(なんぢ)たゞしきと此上(このゆゑ)なき眞實(まこと)とをもてその證詞(あかし)を命(めい)じ
一四一　われは微(かすか)なるものにて人(ひと)にあなどらるれども　汝(なんぢ)のさとし(ソ)を忘(わす)れず
一四二　なんぢの聖言(みことば)はいときよしなんぢの僕(しもべ)はこれを愛(あい)す

イ詩一一九・一二　ロ詩一一六・一六　ハ詩一一九・一〇、一一　九・七二　ニ詩一一九・一一　ホ詩一一九・七　ヘ詩一一九・一〇　ト撒後一・六、七　チ詩一一九・一〇六・四　リ詩一七・五　ヌ詩一一九・一三　羅六・一二　ル路一・七四　ヲ詩四・六　ワ詩一一九・一二六　カ耶九・一、一四・一七　結九・四　ヨ啌九・一五　尼九・三三　耶一二・一　但　ソ詩一二・六、一八・一九・七　タ詩一一九・七—九　レ詩六九・九　約二・一七　ツ詩一一九・九、一一九・一五一　約一七・一七

一四三 ぢの義はとこしへの義なり
一四四 なんぢの證詞はとこしへに義し ねがはくはわれに智慧をたまへ 我ながらふることを得ん

○ コフ

一四五 われ心をつくしてよばはれり 汝ののりは眞理なり
一四六 われ患難と憂とにかゝれども 汝のいましめはわが喜樂なり
一四七 れりねがはくはわれを救ひ給へ 我なんぢの證詞をまもらん
一四八 望をいだけり 夜の更のきたらぬに先だち わが眼はさめて汝のみことばを深くおもふ
一四九 仁慈にしたがひてわが聲をきゝたまへ ヱホバよなんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ
一五〇 むるものは我にちかづけり 彼等はなんぢの法にとほくはなる
一五一 すべての誡命はまことなり 一五二 われ早くよりなんぢの證詞により 汝がこれを永遠にたてたまへることを知れり

○ レシ

一五三 ねがはくはわが患難をみて我をすくひたまへ 我なんぢの法をわすれざればなり
一五四 あげつらひて我をあがなひ 聖言にしたがひて我をいかしたまへ
一五五 すくひは惡きものより遠くはなる かれらはなんぢの律法をもとめざればなり
一五六 をいかしたまへ 一五七 我をせむる者われに敵する者おほし 我なんぢの證詞をはなるゝことなかりき
一五八 こなふものを見てうれへたり ねがはくはわが汝のみことばを守らざるにより 我かれらを見てうれへたり
一五九 ことを幾何なるをかへりみたまへ ヱホバよなんぢの仁慈にしたがひて我をいかしたまへ
一六〇 なんぢのみことばの

ネ詩一一九・七七　ラ詩五・三、八八・一
ナ詩一一九・三四、七　三、一三〇・六
三、一六九　ム詩一一九・七四

ウ詩六三・一、六　ノ詩一四五・一八
牛詩一一九・四〇、一　オ詩一一九・一四二
五四　ク路二一・三三

ヤ哀五・一　ケ詩一一九・四〇
マ 毋前二四・一五　詩　フ伯五・四
三五・一　米七・九　コ詩一一九・一四九

エ詩四四・一八、一一　結九・四
九・五一　ア詩一一九・八八
テ詩一一九・一三六

總計はまことなり　汝のたゞしき審判はとこしへにいたるまで皆たゆることとなし

一六一　○シン

一六一　もろもろの侯はゆゑなくして我をせむ　然どわが心はたゞ汝のみことばを畏る

一六二　(イ)

一六三　をえたるごとくに　汝のみことばをよろこぶ　一六三　われ虚偽をにくみ之をいみきらへども　汝のの

一六四　のりを愛す　一六四　われ汝のたゞしき審判のゆゑをもて一日に七次なんぢを讃稱ふ

一六五　一六五　なんぢの法をあいするものには大なる平安あり

一六六　一六六　わが靈魂はかれらには躓礙をあたふる者なし　一六六　ヱホバよ我なんぢの救をのぞみ

一六七　(ロ)　一六七　我はいたく之をあいす　一六八　(ハ)　われなんぢの訓諭となんぢの證詞とをまもりぬ　わがすべて

一六八　の道はみまへにあればなり

一六九　○タウ

一六九　ヱホバよ願くはわがよぶ聲をみまへにいたらせ　聖言にしたがひて我にちゑをあたへたまへ

一七〇　一七〇　わがくちびるは讃美をいだすべし　汝われに律法ををしへ給へばなり　一七一　わが舌はみことばを謳ふべし　なんぢの一切のいましめは義なればなり

一七二　(ニ)　一七二　なんぢの手をもて我をたすけたまへ　われなんぢの訓諭をえらびたればなり

一七三　一七三　願くはわが靈魂をながらへしめたまへ　さらば汝をほめたゝへん　汝のさばきのつねにわが助となしたまへ　一七四　(ホ)　一七四　ヱホバよ我なんぢの救をしたへり　なんぢの法はわがたのしみなり

一七五　(ヘ)　一七五　願くはわが靈魂をながらへしめたまへ　われなんぢの訓諭をえらびたればなり

一七六　一七六　我をたすけんことを　(ト)　われは亡はれたる羊のごとく迷ひいでぬ　なんぢの僕をたづねたまへ　われ汝のいましめを忘れざればなり

イ 詩前二四・一一、一　ロ 箴三・二　詩一一九・七四、二六・一八　詩一一九・一二三　ハ 創四九・一八　詩一一九・一七　ニ 詩一一九・一六六　ホ 詩一一九・一七四　ヘ 詩一一九・一七四　ト 詩一一九・一七六　チ 詩一一九・一六六　詩一一九・一七四　ヌ 箴五三・六　路一五・四、二四　リ 詩一一九・一六、二四、四七、七七、一一一　ル 詩一一八・五　拿二・二　ヲ 詩一一九・一七　ワ 詩一一九・一七　カ 詩一一九・一七　ヨ 詩一一九・一七　タ 詩一一九・一七　レ 詩一一九・一七　ソ 詩一一九・一七　ツ 詩一一九・一七　ネ 詩一一九・一七　ナ 詩一一九・一七　ラ 詩一一九・一七　ム 詩一一九・一七　ウ 詩一一九・一七　ノ 詩一一九・一七　オ 詩一一九・一七　ク 詩一一九・一七　ヤ 詩一一九・一七　マ 詩一一九・一七　ケ 詩一一九・一七　フ 詩一一九・一七　コ 詩一一九・一七　エ 詩一一九・一七　テ 詩一一九・一七　ア 詩一一九・一七　サ 詩一一九・一七　キ 詩一一九・一七　ユ 詩一一九・一七　メ 詩一一九・一七　ミ 詩一一九・一七　シ 詩一一九・一七　ヱ 詩一一九・一七　ヒ 詩一一九・一七　モ 詩一一九・一七　セ 詩一一九・一七　ス 詩一一九・一七

ヲ創一〇・二　結二七　二五・一　耶四九・ヨ毋前二・九　箴三・七　ソ箴二五・四
・二三　二八、二九　二三、二六　レ詩一六・八、一〇九　ッ詩九一・五　箴四九　一〇、一四五・二一〇
ワ創二五・一三　毋前　カ詩一二四・八　タ詩一二七・一　箴二　・三二　・一〇　默七・一六　ナ申二八・六　箴二・　ネ詩四一・二、九七・
ム毋後五・九　ラ箴二・三　亞八・二一　ウ出二三・一七　申
一六・一六

第一二〇篇 一

一 わが苦難(なやみ)にあひて我(われ)ヱホバをよびしかば我にこたへたまへり

二 ヱホバよねがはくは虚偽(いつはり)のくちびる欺詐(あざむき)の舌(した)よりわが霊魂(たましひ)をたすけいだしたまへ

三 あざむきの舌よなんぢに何(なに)をあたへられ何をくはへらるべきか

四 ますらをの利(と)き箭(や)と金雀花(えにしだ)のあつき炭(すみ)となり

五 わざはひなるかな我はメセクにやどりケダル(ヨ)の幕屋(まくや)のかたはらに住(す)めり

六 わがたましひは平安(やすき)をにくむものと偕(とも)にすめり

七 われは平安をねがふ されど我(われ)ものいふときにかれら戦争(たたかひ)をこのむ

第一二一篇 一

一 わが扶助(たすけ)は我にこたへたまへり 京詣(みやこまうで)のうた

二 あざむきの舌よなんぢに何(なに)をあたへられ何をくはへらるべきか

三 ヱホバはなんぢの足(あし)のうごかさるゝを容(ゆる)したまはず なんぢをまもるものは微睡(まどろむ)ことなくねむることなからん

四 視よイスラエルを守(まも)りたまふものは微睡ことなくまた寝ることなからん

五 ヱホバは汝(なんぢ)をまもるものなり ヱホバは汝のために右手(みぎのて)をおほふ蔭(かげ)なり

六 昼(ひる)は日なんぢをうたず夜は月なんぢを傷(うた)じ

七 ヱホバはなんぢを守りてもろもろの禍害(わざはひ)をまぬかれしめ並(また)なんぢの霊魂(たましひ)をまもりたまはん

八 ヱホバは今よりとこしへにいたるまで汝(なんぢ)のいづると入(い)るとをまもりたまはん

第一二二篇 一

一 人(ひと)われにむかひて 率(いざ)ヱホバのいへにゆかんといへるとき我(われ)よろこべり

二 ヱルサレムよなんぢらの足はなんぢの門(もん)のうちにたてり

三 ヱルサレムよなんぢは稠(しげ)くつらなりたる邑(まち)のごとく固(かた)くたてり

四 もろもろの支派すなはちヱホバの支派イスラエルの証(あかし)のために ヱホバの名(みな)に感謝(かんしや)せんとてかしこに上(のぼ)る

五 ダビデがよめる京(みやこ)までの歌(うた)

ろのやから即ちヤハの支派かしこに上りきたり イスラエルにむかひて證詞をなし またヱホバの名にかんしやをなす　五 彼處にさばきの寶座まうけらる これダビデの家のみくらなり　六 ヱルサレムを愛するものは榮ゆべし　七 ねがはくはなんぢの石垣のうちに平安 なんぢの諸殿のうちに福祉あらんことを　八 わが兄弟のためわが侶のためにわれ今なんぢのなかに平安あれといはん　九 われらの神ヱホバのいへのために我なんぢの福祉をもとめん

第一二三篇

一 京まうでの歌

二 天にいますものよ我なんぢにむかひて目をあぐ

三 主母の手に目をそゝぐがごとくわれらはわが神ヱホバに目をそゝぎてそのわれを憐みたまへ ヱホバよわれらを憐みたまへ そはわれらに輕侮はみちあふれぬ

四 ひなきものの凌辱とたかぶるものの輕侮とは われらの靈魂にみちあふれぬ

第一二四篇

ダビデのよめる京まうでの歌

一 今イスラエルはいふべし ヱホバもしわれらの方にいまさず

二 人々われらにさからひて起りし時

三 われらを生るまゝにて呑しならん

四 また水はわれらをおほひ 流はわれらの靈魂をうちこえしならん

五 高ぶる水はわれらの靈魂をうちこえしならん

六 ヱホバはほむべきかな 我儕をかれらの齒にわたして噛くらはせたまはざりき

七 我儕のたましひは捕鳥者のわなをのがるゝ鳥のごとくにのがれたり 羅はやぶれてわれらはのがれたり

八 われらの

イ出一六・三四　ロ申一七・八　代下一九・八

ハ詩五一・一八　ニ尼二・一〇　ホ詩二・四、一一・四、一一五・三　ヘ詩一三一・一、一四　チ詩五六・一、二、三　ト詩一二九・一　リ詩九一・三　哉六・五　ヌ詩一三一・二

助は天地をつくりたまへるヱホバの名にあり

第一二五篇

みやこ詣のうた

一 ヱホバに依頼むものはシオンの山のうごかさるゝことなくして永遠にあるがごとし

二 サレムを山のかこめるごとくヱホバも今よりとこしへにその民をかこみたまはん

三 惡の杖はたゞしきものの所領にとゞまることなかるべし 斯てたゞしきものはその手を不義にのぶることあらじ

四 ヱホバよ善人とこゝろ直きものとに福祉をほどこしたまへ

五 されどヱホバは轉へりておのが曲れる道にいるものを惡きわざをなすものとともに去しめたまはん 平安はイスラエルのうへにあれ

第一二六篇

京まうでの歌

一 ヱホバ、シオンの俘囚をかへしたまひし時 われらは夢みるもののごとくなりき

二 笑はわれらの口にみち 歌はわれらの舌にみてり ヱホバかれらのために大なることを作たまへりといへる者もろもろの國のなかにありき

三 ヱホバわれらのために大なることをなしたまひたれば我儕はたのしめり

四 ヱホバ、ネゲブの俘囚をみなみの川のごとくに歸したまへ

五 涙とともに播くものは歡喜とともに穫らん

六 その人は種をたづさへ涙をながしていでゆけど 禾束をたづさへ喜びてかへりきたらん

第一二七篇

ソロモンがよめる京まうでのうた

一 ヱホバ家をたてたまふにあらずば 建るものの勤勞はむなしく ヱホバ城をまもりたまふにあらずば 衞士のさめをるは徒勞なり

二 なんぢら早くおき遲くいねて辛苦の糧をくらふはむなしきなり 斯てヱホバ

その愛しみたまふものに寝をあたへたまふ 三 みよ子輩は ヱホバのあたへたまふ
たまものなり 四 年壮きころほひの子はますらをの手にある矢のごとし 五 矢のみちたる箙をもつ人はさいはひなり かれら門にありて仇とものいふとき恥ることあらじ

第一二八篇 一 京まうでの歌

ヱホバをおそれその道をあゆむものは皆さいはひなり 二 そはなんぢは福祉をえまた安処にをるべし 三 なんぢの妻はいへの奥にをりて おほくの實をむすぶ葡萄の樹のごとく 汝の子輩はなんぢの筵に圓居してかんらんの若樹のごとし 四 見よヱホバをおそるゝ者はかくのごとくに福祉をえん 五 ヱホバはシオンより恵をなんぢに賜はん なんぢ世にあらんかぎりヱルサレムの福祉をみん 六 なんぢおのが子輩の子をみるべし 平安はイスラエルの上にあり

第一二九篇 一 京まうでのうた

今イスラエルはいふべし 彼等はしばしば我をわかきときより悩めたり されどわれに勝ことを得ざりき 二 耕すものはわが背をたがへしてその畝をながくせり 三 ヱホバは義し あしきものの繩をたちたまへり 四 シオンをにくむ者はみな恥をおびてしりぞかるべし 五 かれらは長たざるさきにかるゝ屋上の草のごとし 六 これを刈るものはその手にみたず 之をつかぬるものはその束ふところに盈ざるなり 七 かたはらを過るものはヱホバの恵なんぢの上にあれといはず われらヱホバの名によりてなんぢらを祝すといはず 八

イ創三三・五、四八・四 ハ伯五・四 歳二七・三 ニ詩一一九・一 ト詩五二・八、一四四・一二 リ創五〇・二三 伯一四・一六 ヌ詩一二五・五 ル詩一二四・一 ヲ結二三・三 何二・一五、一一・一 ワ詩三七・二 カ得二・四 詩一一八・二六 ヨ申二八・四 タ詩一一二・一、一一 レ結一九・一〇 ソ詩一三四・三

ヨ哀三・五五　拿二・ソ王上八・四〇　詩二
二　一・二一　耶三三・八、
タ詩一四三・二　羅三　九
・二〇、二三、二四　ツ詩二七・一四、三三
レ出三四・七　ナ詩六三・六、一一九・　ウ詩一〇三・三、四　太
・二〇、四〇・一　寒　一四七　五五・七
ネ詩一一九・八一　ム詩八六・五、一五　寒
八・一七、二六・八、　ラ詩一三一・三
三〇・一八　牛羅一二・一六　ヤ詩六五・一
ノ太一八・三　哥前　マ徒七・四六
一四・二〇
オ詩一三〇・七
ク創四九・二四

第一三〇篇 一

京まうでの歌

一 あゝヱホバよ われふかき淵より汝をよべり
二 主よねがはくはわが聲をきゝ 汝のみゝをわが
懇求のこゑにかたぶけたまへ
三 ヤハよ主よなんぢ若もろもろの不義に目をとめたまはゞ 誰かよく立ことをえん
四 されどなんぢに赦あれば 人におそれかしこまれ給ふべし
五 我ヱホバを俟望む わが靈魂はまちのぞむ
六 わがたましひは衛士があしたを待にまさり 誠にゑじが旦をまつにまさ
七 イスラエルよヱホバによりて望をいだけ そはヱホバにあはれみあり またゆたかなる救贖
八 ありヱホバはイスラエルをそのもろもろの邪曲より贖あがなひたまはん

第一三一篇 一

ダビデのよめる京まうでのうた

一 ヱホバよわが心おごらずわが目たかぶらず われは大なることと我におよばぬ奇しき事とをつとめざりき
二 われはわが靈魂をもださしめまた安からしめたり 乳をたちし嬰兒のその母にたよるごとくわれはわが靈魂をたちし嬰兒のごとくわれに恃れり
三 イスラエルよ今よりとこしへにヱホバにたよりて望をいだけ

第一三二篇 一

京まうでの歌

一 ヱホバよねがはくはダビデの爲にそのもろもろの憂へをこゝろに記たまへ
二 ちかひヤコブの全能者にうけひていふ
三 われヱホバのために處をたづねいだしヤコブの全能者のために居所を

もとめうるまでは 我家の幕屋にいらず わが臥床にのぼらず
六 われらエフラタにて之をきゝヤアルの野にて見とめたり
八 エホバよねがはくは起きて なんぢの穢櫃とともになんぢの安居所にいりたまへ
九 なんぢの聖徒はみな歓びよばふべし
一〇 なんぢの僕ダビデのために なんぢの受膏者の面をしりぞけたまふなかれ
二 エホバ眞實をもてダビデに誓ひたまひたれば之にたがふことあらじ 曰く われなんぢの子輩もしわがをしふる契約と證詞とをまもらば なんぢの身よりいでし者をなんぢの座位にざせしめん
三 なんぢの子輩もしわがをしふる契約と證詞とをまもらば なんぢの身よりいでし者をなんぢの座位にざせしめん
一三 エホバはシオンを擇びておのが居所にせんとのぞみ かれらの子輩もまた永遠になんぢの座位にざすべしと
一四 曰くこれは永遠にわが安居處なり われこゝに住んそはわれ之をのぞみたればなり
一五 われシオンの糧をゆたかに祝しくひものをもてその貧者をあかしめん
一六 その祭司たちに衣せん その聖徒はみな聲たからかによろこびよばふべし
一七 われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん わが受膏者のために燈火をそなへたり
一八 われかれの仇にはぢを衣せん されどかれはその冠弁さかゆべし

第一三三篇 一詩

ダビデがよめる京まうでの歌

一 視よ はらから相睦てともにをるはいかに善いかに樂きかな
二 首にそゝがれたるアロンの髭にながれ その衣のすそにまで流れしたゝるゝがごとし
三 またヘルモンの露くだりてシオンの山にながるゝがごとし そはエホバかしこに福祉をくだし 窮なき生命をさへあたへたまへり

イ 出六・四 ロ 申前一七・一二 ハ 代上一三・五 ニ 申前七・一 ホ 詩五・七、九九・五 ヘ 民一〇・三五 代下六・四一 詩一三二・九、一四九・四 ト 詩七八・六一 チ 伯二九・一四 詩ヌ 申後七・一二 王上八・二五 リ 詩八九・三、四、三三、一〇・四 ヌ 詩三五・二六、一〇 ル 詩四八・一、二 ヲ 詩六八・一六 ワ 詩一四七・一四 カ 代下六・四一 詩一一・三六、一二・三、三一・九、一四九・四 ヨ 何一一・一二 タ 結二九・二一 路一 レ 王上一一・三六、一五・四 代下二一・七 ソ 詩三五・二六、一〇 ツ 創一三・八 來一三 ネ 出三〇・二二・三〇 ナ 申四・四八 ラ 利二五・二一 申 詩四二・八 路一・六九 徒二・三〇

第一三四篇

京まうでの歌

一 夜間エホバの家に立つもろもろの僕よ エホバを讃稱へよ

二 聖所にむかひ手をあげてエホバをほめまつれ

三 エホバ天地をつくりたまへるものシオンより汝をめぐみたまはんことを

第一三五篇

一 なんぢらエホバを讃稱へよ エホバの名をほめたゝへよ エホバの僕よ

二 エホバの家われらの神のいへの大庭にたつものよ 讃稱へよ

三 エホバは恵ふかし なんぢらエホバをほめたゝへよ その聖名はうるはし讃うたへ

四 そはヤハおのがためにヤコブをえらみてその珍寶となしたまへり

五 われエホバの大なるとわれらの主のもろもろの神にまさされるとをしれり

六 エホバその旨にかなふことを天にも地にも海にも淵にもみなことごとく行ひ給ふなり

七 エホバは地のはてより霧をのぼらせ 雨のために電光をつくり その庫より風をいだしたまふ

八 エホバは人よりエジプトよエホバはなんぢの中にしるしと奇しき事跡とをおくりてパロとその僕とにの首出をうちたまへり

九 エホバはおほくの國々をうち 又いきほひある王等をころし給へり

一〇 エホバはアモリ人のわうシホン、バシヤンの王オグならびにカナンの國々なり

一一 かれらの地をゆづりとしその民イスラエルの嗣業としてあたへ給へり

一二 エホバよなんぢの名はとこしへに絶ることなし エホバよなんぢの記念はよろづ世におよばん

一三 エホバはその民のために審判をなし その僕等にかゝはれる聖意をかへたまふ可ればなり

一四 もろもろの

ム代上九・三三
ウ詩一三五・一、二
半提前二・八
ノ詩一二四・八
オ詩一二八・五、一三
ク詩一一三・一、一三
ケ詩一一九・六八
フ詩一四七・一
コ出一九・五
サ伯三八・二一
シ詩一一九・一五三
ス詩一一五・四—八
セ詩一一五・三
ソ詩一一五・一六
タ詩一一〇・一三、五一
チ出一二・二六
ツ詩九五・三、九七・九
テ詩一一三・四
ア耶一〇・一三、五一
ト出一二・一二、二九
ナ詩七八・五一、一三
ニ詩一一五・四—八
ヌ伯三八・二四
ネ詩一一九・六八
ノ出七・八、九、一〇・一四
ハ詩一三六・一七
ヒ詩七八・五五、一三
フ詩一一五・一二
ヘ詩一三五・一七
ホ出三二・三六
マ詩九二・一三、九六
ミ詩一三六・一五
ム民二一・二四—二六、三四、三五
メ出七・八、九、一〇・一、一四
モ出三・一五
ヤ詩一一〇・一
ユ出一二・一二、二九
ヨ詩一一五・三
ラ詩一一五・一六
リ詩一一五・一三
ル詩一一五・四—八
レ詩一一五・一五
ロ詩一一五・一六
ワ詩一一五・一七
ヰ詩一一五・一八
ヱ詩九五・三、九七・九
ヲ出三・一五

一六 くにの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり　一六 そ
一七
一八 どきかず またその口に氣息あることなし　一八 これを造るものと之によりたのむものとは皆これにひとしからん
一九 一九 イスラエルの家よヱホバをほめまつれ アロンのいへよヱホバをほめまつれ
二〇 二〇 レビの家よヱホバをほめまつれ ヱホバを畏るゝものよヱホバをほめまつれ
二一 二一 エルサレムにすみたまふヱホバはシオンにて讃まつるべき
ヱホバをほめたゝへよ

第一三六篇

一 一 ヱホバに感謝せよヱホバはめぐみふかしその憐憫はとこしへに絶ることなければなり
二 二 もろもろの神の神にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
三 三 もろもろの主の主にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
四 四 たゞ獨りおほいなる奇跡なしたまふ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
五 五 智慧をもてもろもろの天をつくりたまへる その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
六 六 地を水のうへに布たまへるものに感謝せよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
七 七 そのあはれみは永遠にたゆることなければなり 巨大なる光をつくりたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
八 八 とこしへに絶ることなければなり 晝をつかさどらするために日をつくりたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
九 九 憐憫はとこしへにたゆることなければなり 夜をつかさどらするために月ともろもろの星とをつくりたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり
一〇 一〇 者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり もろもろの首出をうちてエジプトを責たまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
一一 一一 より出したまへる者にかんしやせよ そのあはれみはとこしへにたゆることなければなり イスラエルを率てエジプト人のなかより出したまへる者にかんしやせよ そのあはれみはとこしへにたゆることなければなり
一二 一二 臂をのばしつよき手

イ詩一一五・九―一一　ホ申一〇・一七　ヘ詩一三五・一五　リ詩一・一四
ロ詩一三四・三　ヘ代上一六・三四、四　ト創一・九　詩二四・一　ヌ詩一・一六
ハ詩一〇六・一、一〇　ヘ詩七三・一八　チ創一・一　ル出一二・五一、一三・　ヲ出一二・二九　詩　ワ出六・六
ニ代下二〇・二一　ト創一・一　繳三・一九　ヌ耶一〇・一二　三、一七　一三五・八

一三 をもて之をひきいだしたまへる者にかんしやせよ そのカ出一四・二一、二二
詩七八・一三
一四 たつに分たまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一三五・一四 夕出一三・一八、一五・一
二二 申八・一五
一五 中をわたらしめ給へるものに感謝せよ そのあはれみはとこしへにたゆることなければなり 一三五・一五 詩一四・二七
一六 紅海のうちに仆したまへるものに感謝せよ そのあはれみはとこしへにたゆることなければなり レ詩一三五・一〇、一一 ツ民二一・二一
ネ民二一・二三
一七 きて野をすぎしめたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり ナ書一二・一—八
一八 を撃たまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり 詩
一九 者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一三五・一九 名ある王等をころしたまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
二〇 にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一三五・二〇 バシヤンのわうオグをころしたまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
二一 感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり 一三五・二一 アモリ人のわうシホンをころしたまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
二二 しやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一三五・二二 かれらの地を嗣業としてあたへたまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
二三 へるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり 一三五・二三 その僕イスラエルにゆづりとして之をあたへたまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
二四 へる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり 一三五・二四 われらが微賤かりしときに記念したまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
二五 る者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり 一三五・二五 わが敵よりわれらを助けいだしたまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり
二六 ものに感謝せよ そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり 一三五・二六 すべての生るものに食物をあたへたまふ天の神にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり

第一三七篇

一 われらバビロンの河のほとりにすわり シオンをおもひいでて涙をなががしぬ 二 われらその

三 あたりの柳にわが琴をかけたり　三 そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめたり　我儕をくるしむる者
四 われらにおのれを歡ばせんとて　シオンのうた一つうたへといへり　四 われら外邦にありていかでヱホバの歌を
五六 うたはんや　五 ヱルサレムよもし我なんぢをわすれなば　わが右の手にその巧をわすれしめたまへ　六 もしわれ
七 汝を思ひいでずもしわれヱルサレムをわがすべての歡喜の極となさずばわが舌をわが膞につかしめたまへ　七 ヱホ
バよねがはくはヱルサレムの日にエドムの子輩がこれを掃除けその基までもはらひのぞけといへるを聖意に
八 とめたまへ　六 ほろぼさるべきバビロンの女よなんぢがわれらに作しごとく汝にむくゆる人はさいはひなるべし
九 なんぢの嬰兒をとりて岩のうへになげうつものは福ひなるべし

第一三八篇 ダビデのうた

一 われはわが心をつくしてなんぢに感謝しもろもろの神のまへにて汝をほめうたはん　二 我なんぢの
きよき宮にむかひて伏拜みなんぢの仁慈とまことの故によりて聖名にかんしやせんそは汝そのみことば
をもろもろの聖名にまさりて高くしたまひたればなり　三 汝わがよばはりし日にわれにこたへわが靈魂に
ちからをあたへて雄々しからしめたまへり　四 ヱホバよ地のすべての王はなんぢに感謝しもろもろの
口のもろもろの言をきゝたればなり　五 かれらはヱホバのもろもろの途についてうたはんヱホバの榮光おほい
なればなり　六 ヱホバは高くましませども卑きものを顧みたまふされど亦おごれるものを遠よりしりたまへり
七 縱ひわれ患難のなかを歩むとも汝われをふたゝび活しその手をのばしてわが仇のいかりをふせぎその右の手
八 われをすくひたまふべし　八 ヱホバはわれに係ることを全うしたまはん　ヱホバよなんぢの憐憫はとこしへに

イ詩七九・一　ロ結三・二六　ハ耶四九・七一一三　ニ哀四・二二　結二五・一二、一二・阿一〇―一八　ホ耶五〇・一五、二九　ヘ哀一三・一、六、四七　ト詩一一九・四六　チ王上八・二九、三〇　リ詩一一三・五、六　ヌ哀四三・二一　ル詩一〇二・一五、二二　ヲ詩一一三・五、六　哀三・三四　ワ箴三・三四　雅四・六　カ詩二三・三、四　ヨ詩五七・二　ヘ哀一三・二六　ト詩一一九・四六　チ王上八・二九、三〇　リ詩五・七　ヌ哀四三・二一　ル詩一〇二・一五、二二　ヲ詩一一三・五、六　哀三・三四　ワ箴三・三四　雅四・六　カ詩二三・三、四　ヨ詩五七・二　彼前五・五　默一八・六　ヘ哀一三・二六　ト詩一一九・四六

たゆることとなし 願くはなんぢの手のもろもろの事跡をすてたまふなかれ

伶長にうたはしめたるダビデの歌

第一三九篇

一 エホバよなんぢは我をさぐり我をしりたまへり
二 なんぢは我がすわるをもたつをもしり 又とほくよりわが念をわきまへたまふ
三 なんぢはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだし わがもろもろの途をことごとく知たまへり
四 そはわが舌に一言ありとも 視よヱホバよなんぢは全くこれを知たまふ
五 なんぢは前より後よりわれをかこみ わが上にその手をおき給へり
六 かゝる知識はいとくすしくして我にすぐ また高くして及ぶことあたはず
七 我いづこにゆきてなんぢの聖靈をはなれんや われいづこに往てなんぢの前をのがれんや
八 われ天にのぼるとも 汝かしこにいますなり われ陰府にまうくるとも 視よなんぢ彼處にいます
九 我あけぼの の翼をかりて海のはてにすむとも
一〇 かしこにて尚なんぢの手われをみちびき 汝のみぎの手われをたもちたまはん
一一 暗はかならず我をおほひ 我をかこめる光は夜となるらんと我いふとも
一二 暗ものをかくすことなく 夜もひるのごとくに輝けり なんぢにはくらきも光もことなることなし
一三 汝はわがはらわたをつくりわがはゝの胎にわれを組成たまひたり
一四 われなんぢに感謝す われは畏るべく奇しくつくられたり なんぢのもろもろの事跡はこととごとくくすしわが靈魂はいとつばらに之をしれり
一五 われ隠れたるところにてつくられ 地の底所にて妙につゞりあはされしとき わが骨なんぢにかくるゝことなかりき
一六 わが體いまだ全からざるに なんぢの目これをみ 日々かたちづくられしわが百體の一だにあらざりし時に ことごとくなんぢの册にしるされたり
一七 神よなんぢのもろもろの思念はわれに寶きこといかばかりぞや そのみおもひの總計はいかに多きかな

一八 我これを算へんとすれどもその
一九 かずは沙よりもおほし われ眼さむるときも尚なんぢとともにをる
二〇 なんぢはかならず惡者をころし給はん されば血をながすものよ我をはなれされ
二一 汝にさからひて言ふ なんぢの仇はみだりに聖名をとなふるなり
二二 あらずや なんぢに逆ひておこりたつものを厭ふにあらずや
二三 ねがはくは我をさぐりてわが心をしり 我をこゝろみてわがもろもろの思念をしりたまへ
二四 よこしまなる途のありやなしやを見て われを永遠のみちに導きたまへ

第一四〇篇

一 伶長にうたはしめたるダビデのうた
二 かれらは心のうちに殘害をくはだて たえず戰鬪をおこす
三 かれらは蛇のごとくおのが舌を利す そのくちびるのうちに蝮の毒あり セラ
四 ヱホバよ願くはわれを保ちて惡き人よりわれを助けいだし 我をまもりて强暴人よりのがれしめ給へ
五 高ぶるものはわがために繩と索とをふせ 路のほとりに網をはり かつ機をまうけたり セラ
六 われヱホバにいへらく 汝はわが神なり ヱホバよねがはくはわが祈のこゑをきゝ給へ
七 わが救のちからなる主の神よ なんぢはたゝかひの日にわが首をおほひたまへり
八 ヱホバよ惡者のねがふところを遂げしめ その惡き企圖をとげしめたまふなかれ おそらくは
九 彼等みづから誇らん セラ
一〇 われを圍むものの首はおのれのくちびるの殘害におほはるべし
一一 かれらの上に火のかたまりを降らせ 彼らを火になげいれられ ふかき穴になげいれられて再びおきいづることあたはざるべし
一二 かかる人は國のうへに舌をほしいまゝにすることをゆるしたまふなかれ そのあしき企圖をとげしめたまふなかれ
一三 われ知る 神は苦しむものの訟をたすけ 貧しきものの權利をまもりたまふことを
一四 義人は必ずなんぢの名をほめたゝへ 直きものは必ずなんぢの前にをらん

イ 箴一一・四　ロ 詩一一九・一一五　ハ 猶一五　ニ 代下一九・二　詩一一九・一五八　ホ 伯三一・六　ヘ 詩五・八、一四三・一〇　ト 詩一四〇・四　チ 詩五六・六　リ 詩五八・四　ヌ 詩七一・四　ル 詩一四〇・一　ヲ 詩三五・七、五七・六、一一九・一二〇、一四一・九　ワ 申三二・二七　カ 詩七・一六、九四・一　ヨ 詩一一・六　タ 箴一二・一三、一八・七

一二 悪言をいふものは世にたてられず 暴ぶるものはわざはひに追及れてたふさるべし
一三 訴とまづしきものの義とを ヱホバの守りたまふを知る 義者はかならず聖名にかんしやし 直者はみまへに住ん

第一四一篇

ダビデのうた

一 ヱホバよ我なんぢを呼ふ ねがはくは速かにわれにきたりたまへ 我が祈をみまへにさゝげ 夕のそなへもの
二 のごとくにわが手をあげて 耳をかたぶけたまへ
三 われは薫物のごとくにわが祈をみまへにさゝげ ヱホバよねがはくはわが口に門守をおきて わがくちびるの戸をまもりたまへ
四 悪事にわがこゝろを傾かしめて 邪曲をおこなふ者とともに悪きわざにあづからしめ給ふなかれ 又かれらの
五 珍饈をくらはしめたまふなかれ 義者われをうつとも我はこれを愛しみとしそれをせめん わが頭はこれを辞まず かれらが禍害にあふときもわが祈はたえじ
六 とせん わが頭はこれを辞まず かれらが禍害にあふときもわが祈はたえじ その審士はいはほの崖になげられ
七 んかれらわがことばの甘美によりて聴ことをすべし 人つちを耕しうがつがごとく我儕のほねははかの口に
八 ちらさるゝ ヱホバよ わが目はなほ汝にむかふ 我なんぢに依頼めり ねがはくはわが霊魂をともしき
九 まゝに捨おきたまふなかれ 我をまもりてかれらがわがために設くるわなと よこしまを行ふものの機とを
一〇 まぬかれしめたまへ われは全くのがれん あしきものをおのれの網におちいらしめたまへ

第一四二篇

ダビデが洞にありしときよみたる教へのうたなり 祈なり

一 われ声をいだしてヱホバにこひもとむ われ声をいだしてヱホバにこひ
二 はり 声をいだしてヱホバにこひもとむ われはその聖前に

三 わが歎息をそゝぎいだし そのみまへにわが患難をあらはす
四 わがみちを識たまへり 人われをとらへんとてわがゆくみちに羂をかくせり
五 ぎて見たまへ 一人だに我をしるものなし われには避所なくまたわが靈魂をかへりみる人なし
六 汝をよばふ 我いへらく汝はわがさけどころ有生の地にてわがうべき分なりと
七 をとめたまへ われいたく卑くせられたればなり 我をせむる者より助けいだしたまへ 彼等はわれにまさりて
強ければなり 願くはわがたましひを囹圄よりいだし われに聖名を感謝せしめたまへ なんぢ豐かにわれを
待ひたまふべければ 義者 われをめぐらん

第一四三篇 ― ダビデのうた

一 二 エホバよねがはくはわが祈をきゝ わが懇求にみゝをかたぶけたまへ
公義をもて我にこたへたまへ 汝のしもべの審判にかゝつらひたまふなかれ そはいける
三 者一人だにみまへに義とせらるゝはなし 仇はわがたましひを迫めわが生命を地にうちすて 死てひさしく世を經たるもののごと
四 く我をくらき所にすまはせたり 又わがたましひはわが裏にきえうせんとし わが心はわがうちに曠さびれたり
五 われはいにしへの日をおもひいで 汝のおこなひをわが手のみわざをおもふ
六 われ汝にむかひて手をのべ わがたましひは燥きおとろへたる地のごとく汝をしたへり セラ
七 速かにわれにこたへたまへ わが靈魂はおとろふ われに聖顏をかくしたまふなかれ おそらくはわれ穴にくだるものゝごとくならん
八 朝になんぢの仁慈をきかしめたまへ われ汝によりたのめばなり わが歩むべき途をしらせ

イ詩一四三・四　ニ詩三一・一二、八八　ヘ詩二七・一三　京三・二四
ロ詩一四〇・五　ホ詩四六・一、九一・二　ト詩一六・五、七三・　チ詩一一六・六　ヌ詩三四・二
ハ詩六九・二〇　二六、一一九・五七　リ詩一三・六、一一九・一七　ル詩三一・二　ヲ伯一四・三　ワ出三四・七　伯四・一七、九・二、一五
詩一三〇・三　傳七・二〇　カ詩七七・三、一四二・二〇　羅三・二〇　加二・一六　詩一四、一五・四　・三

ヨ詩七七・五、一〇、一三九・二四　ツ詩四六・五　ネ詩五・八　タ詩八八・九　レ詩六三・一　ソ詩二八・一　ナ詩二五・一　ラ詩二五・四、五、七、四〇　ム尼九・二〇　ウ箴二六・一〇　キ詩一一九・二五、三　一八・三四　ノ詩五四・五　オ詩一一六・一六　ク毋後二二・三五　ヤ詩四〇、四八　マ伯七・一七　詩八・二　コ詩一八・九　箴六四・一　ケ伯四・一九、一四・二　エ詩一〇四・三二　詩三九・五、六二・九　テ詩一八・一三、一四　フ詩一〇二・一一　ア詩一八・一六　サ詩六九・一、二、一　メ詩三三・二、三、四、一四四・一一　キ詩五四・三　ミ詩一八・五〇　シ詩一四四・七、八

九　たまへ　われわが靈魂をなんぢに擧ればなり
一〇　んとして汝にはしりゆく　一〇汝はわが神なり　われに聖旨をおこなふことをしへたまへ　汝のよき靈をもて
一一　我をたひらかなる國にみちびきたまへ　二ヱホバよねがはくは聖名のために我をいかし　なんぢの義によりて
一二　わがたましひを患難よりいだしたまへ　三又なんぢの仁慈によりてわが仇をたち　靈魂をくるしむる者をことごと
一三　滅したまへ　そは我なんぢの僕なり

第一四四篇　ダビデのうた

一　一ヱホバはわが磐　わが戰することをわが手にをしへ　闘ふことをわが指にをしへたまふ
二　二ヱホバはわが慈愛　わが城なり　わが高き櫓　われを救ふ者　わが盾わが依賴むものなり　ヱホバはわが民をわれにしたがはせたまふ
三　三ヱホバよ人はいかなる者なれば之をしり　人の子はいかなる者なれば之をみこゝろに記たまふや
四　四人は氣息にことならず　その存らふる日はすぎゆく影にひとし
五　五ヱホバよねがはくは天をたれてくだり　手を山につけて煙をたゝしめたまへ
六　六電光をうちいだして彼等をちらし　なんぢの矢をはなちてかれらを敗りたまへ
七　七上より手をのべ我をすくひて　大水より外人の手よりたすけいだしたまへ
八　八かれらの口はむなしき言をいひ　その右の手はいつはりのみぎの手なり
九　九神よわれ汝に新らしき歌をうたひ　十絃の琴にあはせて汝をほめうたはん
一〇　一〇をなんぢは王たちに救をあたへ　僕ダビデをわざはひの劍よりすくひたまふ神なり
一一　一一ねがはくは我をすくひて外人の手よりたすけいだしたまへ　かれらの口はむなしき言をいひ　その右の手はいつはりのみぎの手なり

一三 いひ その右の手はいつはりのみぎの手なり
一三 らの女子は宮のふりにならひて刻みいだし、隅の石のごとくならん 一三 われらの倉はみちたらひてさまざまのもの
一四 のをそなへ われらの羊は野にて千萬の子をうみ 一四 われらの牡牛はよく物をおひ わ
一五 なく亦おしいづることなく叫ぶこともなからん 一五 かゝる狀の民はさいはひなり ヱホバをおのが神とする民は
さいはひなり

第一四五篇

ダビデの讃美のうた

一 わがかみ王よわれ汝をあがめ 世々かぎりなく聖名をほめたゝへん 二 われ日ごとに汝をほめ
世々かぎりなく聖名をほめたゝへん 三 ヱホバは大にましませば最もほむべきかな その大なることは尋ねしる
ことかたし 四 この代はかの代にむかひてなんぢの事跡をほめたゝへ なんぢの大能のはたらきを宣つたへん
五 われ汝のほまれの榮光ある稜威と なんぢの奇しきみわざとを深くおもはん 六 人はなんぢのおそるべき動作の
いきほひをかたり 我はなんぢの大なることを宣つたへん 七 かれらはなんぢの大なる恵の跡をいひいで なんぢ
の義をほめうたはん 八 ヱホバは恵ふかく憐情みちまた怒りたまふことおそく憐憫おほいなり
九 ヱホバはよろづの者にめぐみあり そのふかき憐憫はみわざの上にあまねし 一〇 ヱホバよ 汝のすべての事跡はなんぢに感謝し
なんぢの聖徒はなんぢをほめん 一一 かれらは御國の榮光をかたり 汝のみちからを宣つたへて 一二 その大能
のはたらきと そのみくにの榮光あるみいづとを人の子輩にしらすべし 一三 なんぢの國はとこしへの國なり なん
ぢの政治はよろづ代にたゆることなし 一四 ヱホバはすべて倒れんとする者をさゝへ かゞむものを直くたゝしめ

イ 詩一二八・三 ロ 申三三・二九 詩三 八 詩九六・四、一四七 三・一二、六五・四、五
二 伯五・九、九・一〇 ハ 出三四・六、七 羅一一・三三 一四・一八 木 箴三八・一九
ニ 詩一九・一 リ 詩一四六・一 提前一・一七
ヌ 詩一四六・八

ル詩一〇四・二七　ヨ約四・二四　ツ詩一一八・八、九　賽　ラ詩一四四・一五　耶　ノ詩六八・六、一〇七　四七・六　路一三・　ケ出一五・一八　詩一
ヲ詩一三六・二五　タ詩三一・二三　ネ詩一〇四・二九　傳　ム創一・一　默一四・七　オ太九・三〇　約九・　ヤ申一〇・一八　詩　一〇・一六、一四五・
ワ詩一〇四・二一、一　四七・九　レ詩一〇三・一　ウ詩一〇三・六　牛詩一〇七・九　ク詩一四五・一四、一　マ詩一四七・六　一三　默一一・一五
カ申四・七　ソ詩一〇四・三三　ナ哥後二・六

一五 たまふ 一五 よろづのものの目はなんぢを待 なんぢは時にしたがひてかれらに糧をあたへ給ふ 一六
一七 きてもろもろの生るものの願望をあかしめたまふ 一七 ヱホバはそのすべての途にたゞしく そのすべての作爲に
一八 めぐみふかし 一八 すべてヱホバをよぶもの 誠をもて之をよぶものに ヱホバは近くましますなり 一九 ヱホバは己
一九 をおそるゝものの願望をみちたらしめ その號呼をきゝて之をすくひたまふ 二〇 ヱホバはおのれを愛しむものを
二〇 ずべて守りたまへど 惡者をことごとく滅したまはん 二一 わが口はヱホバの頌美をかたり よろづの民は世々かぎ
二一 りなくそのきよき名をほめまつるべし

第一四六篇

一 ヱホバを讃稱へよ わがたましひよヱホバをほめたゝへ 二 われ生るかぎりはヱホバをほめ
の子にたのむなかれ 三 もろもろの君によりたのむことなく 人
ろの企圖はほろびん 五 ヤコブの神をおのが助とし その望をおのが神ヱホバにおくものは福ひなり 六
あめつちと海とそのなかなるあらゆるものを造り とこしへに眞實をまもり 七 虐げらるゝもののために審判を
おこなひ 餓ゑたるものに食物をあたへたまふ 神なり ヱホバはとらはれたる人をときはなちたまふ 八
めしひの目をひらき ヱホバは屈者をなほくたゝせ ヱホバは義しきものを愛しみたまふ 九 ヱホバは
まもり 孤子と寡婦とをさゝへたまふ されど惡きものの徑はくつがへしたまふなり 一〇 ヱホバはとこしへに統御
めたまはん シオンよなんぢの神はよろづ代まで統御めたまはん ヱホバをほめたゝへよ

第一四七篇

一 ヱホバをほめたゝへよ われらの神をほめたゝふは善こと
(イ)
となり 樂しきことなり 稱へまつるは
(ロ)
二 よろしきに適へり ヱホバはヱルサレムをきづき イスラエルのさすらへる者をあつめたまふ
(ハ) (ニ)
三 ヱホバは心のくだけたるものを醫し その傷をつゝみたまふ
(ホ)
四 ヱホバはもろもろの星の數をかぞへて すべてこれに名をあたへたまふ
(ヘ)
五 われらの主はおほいなり その能力もまた大なり その智慧はきはまりなし
(ト) (チ) (リ)
六 ヱホバは柔和なるものをさゝへ 惡きものを地にひきおとし給ふ
(ヌ) (ル)
七 ヱホバに感謝してうたへ 琴にあはせてわれらの
(ヲ)
神をほめうたへ
(カ)
八 ヱホバは雲をもて天をおほひ 地のために雨をそなへ もろもろの山に草をはえしめ
(ワ) (カ)
九 ものを獸にあたへ 並なく小鴉にあたへたまふ
(ヨ)
一〇 ヱホバはおのれを畏るゝものと おのれの憐憫をのぞむものとを好したまふ
(タ)
一一 ヱホバはなんぢの神をほめたゝへよ シオンよなんぢの神をほめたゝへよ
(レ)
一二 ヱホバは馬のちからを喜びたまはず 人の足をよみしたまはず
(ソ)
一三 ヱホバはなんぢの門の閂木をかたうし 汝のうちなる子輩をのぞむものとを好したまふ
(ツ)
一四 ヱホバは汝のすべての境にやはらぎをあたへ いと嘉麥をもて汝をあかしめたまふ
(ネ)
一五 ヱホバはその言命をくだしてこれを地にくだしたまふ その聖言はいとすみやかにはしる
(ナ)
一六 ヱホバはなんぢの門の閂木をかたうし 汝のうちなる子輩をのぞむものとを好したまふ
(ラ)
一七 ヱホバは氷をつちくれのごとくに擲ちたまふ たれかその寒冷にたふることをえんや
(ム)
一八 ヱホバ聖言をくだしてこれを消し その風をふかしめたまへばもろもろの水はながる
(ウ)
一九 ヱホバはそのみことばをヤコブに示し そのもろもろの律法とその審判とをイスラエルにしめしたまふ
(ヰ)
二〇 ヱホバはいづれの國をもかくあしらひたまひしにあらず ヱホバのもろもろの審判をかれらはしらざるなり ヱホバ

イ 詩九二・一　ロ 詩一三五・三　ハ 詩三三・一　ニ 詩一〇二・一六　ホ 申三〇・三
ヘ 詩五一・一七　賽 チ代上一六・二五　詩 ル詩一四六・八、九　ト 創一五・五　チ 詩五七・一、五、六一・　四八・一、九六・四、　ヲ伯三八・二六、二七　詩一〇四・一三、一四五・三　リ翁一・三　ヌ賽四〇・二八　ワ伯三八・二七　詩一〇四・二四　カ伯三八・四一　太六　ヨ詩三三・一六―一八　何一・七　タ賽六〇、一七、一八　レ詩一三二・一五　ソ伯三七・一二　詩一〇四・二七・二八、一三六・二五、一四五・一五　伯　ラ馬四・四　ム申四・三二―三四　ツ伯三七・六　ネ詩一四七・一五　伯　ナ申三三・二―四　詩　ラ申三二・二、三　詩七六・一、七八・五、一〇三・七

をほめたゝへよ

第一四八篇

一 ヱホバをほめたゝへよ もろもろの天(てん)よりヱホバをほめたゝへよ もろもろの高所(たかきところ)にてヱホバをほめたゝへよ

二 ヱホバをほめたゝへよ もろもろの御使(みつかひ)よみなヱホバをほめたゝへよ その萬軍(ばんぐん)よみなヱホバをほめたゝへよ

三 日(ひ)よ月(つき)よヱホバをほめたゝへよ ひかりの星(ほし)よみなヱホバをほめたゝへよ

四 もろもろの天(てん)よりヱホバをほめたゝへよ 天(てん)の上(うへ)なる水(みづ)よヱホバをほめたゝへよ

五 これらはみなヱホバの聖名(みな)をほめたゝふべしそはヱホバ命(めい)じたまひたればかれらは造(つく)られたり

六 ヱホバまた此等(これら)をいやとほながに立(たて)たまひたり 又すぎうすまじき詔命(みことのり)をくだしたまへり

七 龍(たつ)よすべての淵(ふち)よ 地よりヱホバをほめたゝへよ

八 火(ひ)よ霰(あられ)よ雪(ゆき)よ霧(きり)よみことばにしたがふ狂風(あらし)よ

九 もろもろの山もろもろのをか 實(み)をむすぶ樹(き)すべての香柏(かうはく)よ

一〇 獣(けもの)もろもろの牲畜(けだもの)はふもの 翼(つばさ)ある鳥(とり)よ

一一 地の王たちもろもろの審士(さばきびと)よ 少きをのこ 若きをみな 老(おい)たる人(ひと)をさなきものよ

一二 みなヱホバの聖名(みな)をほめたゝふべし そのえいくわうは地(ち)よりも天(てん)よりもうへにあればなり

一三 ヱホバはその民(たみ)のために一つの角(つの)をあげたまへりこはそのもろもろの聖徒(せいと)のほまれなりイスラエルの子輩(こら)のほまれなり ヱホバを讃稱(ほめたゝ)へよ

第一四九篇

一 ヱホバをほめたゝへよ ヱホバに對(むか)ひてあたらしき歌(うた)をうたへ 聖徒(せいと)のつどひにてヱホバの頌美(ほまれ)をうたへ

二 イスラエルはおのれを造(つく)りたまひしものをよろこびシオンの子輩(こら)は己(おの)が王(わう)のゆゑによりて樂(たの)しむべし

三 かれらをどりつゝその聖名(みな)をほめたゝへ 琴鼓(ことつづみ)にてヱホバをほめうたふべし

四 ヱホバはその民をよろこびたまふ

ウ詩一〇三・二〇、二一 オ創一・一、六、七 詩三三・二五 ヤ賽四三・二〇 フ詩八・一 賽一二・四 コ詩一一三・四 エ詩七五・一〇 テ詩一四九・九

ヰ王上八・二七 哥後六・一三、一四 ク詩八九・三七、一一 マ詩一四七・一五—一一 ケ賽四四・二三、四九 ア弗二・一七 サ詩三三・三 キ伯三五・一〇 詩一〇〇・三 賽五四・五 ユ亞九・九 太二一・五 メ詩八一・二、一五〇・四 ミ詩三五・二七

ノ創一・七 ハ詩一一二・二 耶三一・三五、三六、

五 はおのが民をよろこび 救にて柔和なるものを美しくしたまへばなり 聖徒はえいくわうの故によりてよろこ
六 び その寢牀にてよろこびうたふべし 六 その口に神をほむるうたあり その手にもろはの劍あり
七 ろの國に仇をかへし もろもろの民をつみなひ 八 かれらの王たちを鏈にて かれらの貴人をくろかねの械にて
八 いましめ 錄したる審判をかれらに行ふべきためなり 斯るほまれはそのもろもろの聖徒にあり ヱホバをほめ
九 たゝへよ

第一五〇篇

一 ヱホバをほめたゝへよ その聖所にて神をほめたゝへよ その能力のあらはるゝ穹蒼にて神をほめたゝへよ
二 故によりてヱホバをほめたゝへよ その大能のはたらきのゆゑをもて神をほめたゝへよ
三 つゞみと蹈舞とをもて神をほめたゝへよ 絃簫をもて神をほめたゝへよ
四 たゝへよ なりひゞく鐃鈸をもて神をほめたゝへよ
五 氣息あるものは皆ヤハをほめたゝへよ ヱホバをほめたゝへよ

詩篇をはり

イ詩一三二・一六　ロ伯三五・一〇　ハ來四・一二　ニ申七・一、二　ホ詩一四八・一四　ヘ詩一四五・五、六　ト申三二・二四　チ詩八一・二、一四九　リ出一五・二〇　ヌ詩三三・二、九二　ル代上一五・一六、一九、二八、一六・五、三五・一、六